

「アルテファクト」

ARTEFACT

02

「特集」
インターシフト





photo: Ryo Yoshiya

ART
FACT

◎ 都市のカルチュラル・ナラティブ '18

平成30年度 港区文化プログラム連携事業
「地域文化資源インターシップ」地域文化の現場を訪ねる講座」

平成30年度文化庁 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

「都市のカルチュラル・ナラティブ in 港区・大学・ミュージアムを核とする地域文化資源の連携・国際発信・人材育成事業」

【編集】「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト

(本間友・市川佳世子・松谷美美)

【企画制作】Rhetorica

(太田知也・松本友也・石井雅巳・吉屋亮・永良凌)

【アート・ディレクション/デザイン】太田知也 (Rhetorica)

【デザイン】永良凌 (Rhetorica)

【協力】篠律子、國本学史、新倉慎右、高野明子

【発行】慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

03-5427-1621

<http://art-keio.ac.jp/artfact>

2019年3月25日

本誌は平成30年度港区文化プログラム連携事業「都市のカルチュラル・ナラティブ」・地域文化資源インターシップ「地域文化の現場を訪ねる講座」の一環として制作されました。



photo: Ryo Yoshiya

2018年度の「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトは、平成30年度港区文化プログラム連携事業および、平成30年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業の指定を受け、各種イベントを実施しました。プロジェクト・マガジンである「ARTEFACT」では、レファレンスを追記した書き起こしやレポート等によって、これらのイベントの内容を記録しています。イベントに参加できなかった人も、本誌を手にとることで、カルチュラル・ナラティブを知り、楽しむことができる。そのような誌面を作るため、あえてイベントの時系列とは異なる掲載順をとり、記録だけではなく、マガジンとしての企画記事も含めた構成にしています。

1 都市の寺院を訪ねる

- 「増上寺山内寺院の歴史と文化」
- ① ガイドツアー&レクチャー「芝増上寺大門通りと旧御成道の歴史探訪」
- 2018年9月27日(木) 15:00-17:00
- 増上寺大門 司常照院本堂 廣度院 増上寺三解脱門 参加者…30名
- 講師…伊坂道子(建築家、伊坂デザイン工房共同代表)、野村恒道(常照院住職)
- 講師が伝える都市文化の物語——妙定院の文化財
- 2018年9月29日(土) 15:00-17:15 妙定院 参加者…53名
- 講師…伊坂道子、小林正道(妙定院住職)、小林淳道(妙定院副住職)
- 「レクチャー&坐禅ワークショップ」古川のほとり・龍源寺からのまなざし…寺院文化の現在」
- 2018年10月13日(土) 13:30-15:00 龍源寺 参加者…31名
- ・レクチャー「寺院が伝えるトポグラフィ」
- 講師…松原信樹(龍源寺住職)、國本学史(慶應義塾大学)
- ・坐禅ワークショップ
- 「学問・文化プラットフォームとしての寺院…泉岳寺と禅の文化」
- 2018年11月18日(日) 10:00-11:30 / 13:00-14:30 泉岳寺 参加者…のべ63名

- ・ガイドツアー「泉岳寺の境内にみる歴史と文化」
- 講師…牟田賢明(泉岳寺知客兼受処主事)
- ・講演「禅宗寺院の学問と文化」
- 講師…堀川貴司(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授、牟田賢明)
- 2 「ギャラリーを知る」

- 「慶應義塾のギャラリーを知る…トーク&ガイド「釈宗演と近代日本」展」
- 2018年7月21日(土) 10:15-11:45 慶應義塾大学(三田) 参加者…23名
- ・ミニレクチャー「慶應義塾の文化財と三田キャンパスのギャラリー」
- 本間友(慶應義塾大学アート・センター所員)
- ・ギャラリー・トーク「釈宗演と近代日本…若き禅僧、世界を駆ける」
- 都倉武之(慶應義塾福沢研究センター准教授)
- 「港区のギャラリーを知る…特別見学+トーク「ギャラリーと公共性」」
- 2018年2月8日(金) 13:30-15:30 横田茂ギャラリー 参加者…43名
- ・イントロククシヨシ&特別見学「横田茂ギャラリー、東京パブリッシングハウスとCCRの仕事」
- 講師…横田聡(東京パブリッシングハウス)
- ・トーク「ギャラリーと公共性」
- 講師…横田茂(横田茂ギャラリー)、渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター教授)
- 3 学校建築をめぐる
- 「慶應義塾三田キャンパス 建築フロムナード——建築特別公開日」
- 2018年10月17日(水・20日) 10:00-17:00 慶應義塾大学(三田) 参加者…のべ54名
- ・建築ガイドツアー
- 2018年10月17日(水・20日) 10:00-17:00 慶應義塾大学(三田) 参加者…のべ55名
- 講師…森山緑(慶應義塾大学アート・センター所員)
- 「大学の建築フォーラム…アーカイヴとアウトリーチ」
- 2018年10月20日(土) 14:00-16:30 参加者…57名 慶應義塾大学(三田)西校舎5F講義室
- 渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター教授)／キムレタシ(藤本貴子(文化庁国立近代建築資料館 建築資料調査官)、桑折美智代(明治学院歴史資料館)、富田ゆり・丸山美季(学習院大学史料館))

「アルテファクト」02

「特集」 インターンシップ
Features: Internship

ART
FACT

4	PREFACE	インターンシップの風景——余白領域に生み出されるもの——本間友
7	COLUMN	カルチュラル・コミュニケーションになるう！——市川佳世子
10	COLUMN	Cultural Value Chain Analysis——視野の拡大と共有——阿児雄之
14	WORKSHOP	古川のほとり・龍源寺からのまなざし…寺院文化の現在
16	REPORT	現代に残る増上寺山内寺院の景観——亀山裕亮
20	REPORT	寺院が伝える都市文化の物語——妙定院の文化財
24	GUIDE TOUR	慶應義塾三田キャンパス 建築フロムナード
26	LECTURE	大学の建築フォーラム——アーカイヴとアウトリーチ——渡部葉子・藤本貴子・桑折美智代・富田ゆり・丸山美季
36	REPORT	ギャラリーから考える公共性——日本橋から竹橋へ／40年の対話——水野俊
40	LECTURE	禅宗寺院の学問と文化——堀川貴司
47	COLUMN	星灯籠は都市の余白を吊うか——松本友也 (Rhetorica)
50	FICTION	自撮りする幽歩者——青山のストリート・アーティスト・チヨウ・アイに会った——Rhetorica (太田知也・松本友也・石井雅巳・古屋亮)
66	FICTION	The Self-taking Ghostroller: The story of Aoyama and the Artist “cho_ey” Rhetorica (Tomoya Ohta, Tomoya Matsumoto, Masumi Ishii, Ryo Nagata and Ryo Yoshio)
69	COLUMN	Is Hoshitoro Mourning the City’s Empty Space, or “Terrain Vague”? Tomoya Matsumoto (Rhetorica)
80	LECTURE	Scholarship and Culture of Zen Temples Takashi Horikawa
83	REPORT	The Possibility of Publicness from the Gallery-From Nihonbashi to Takeshiba / 40 Years of Dialogue Shun Mizuno
92	LECTURE	Forum for Architecture of Universities: Archive and Outreach Yohko Watanabe, Takako Fujimoto, Michiyo Kohri, Yori Tomita and Miki Maruyama
96	REPORT	The Story of a City’s Cultural Landscape Told by Its Temples: The Heritage of Myojin
99	REPORT	Touring the Surviving Temples around the Precincts of Zojoji Yusuke Kameyama
104	COLUMN	Cultural Value Chain Analysis: Expansion of Perspective and Its Sharing Takayuki Aiko
106	COLUMN	Let’s Become a Cultural Communicator! Kayoko Ichikawa
108	PREFACE	Internship Landscape: What Is Produced in the Margin Area? Yu Homma

インターシッポの風景

PREFACE

余白領域に生み出されるもの

「インターシッポ」というテーマ設定

「都市のカルチュラル・ナラティブ」は、学術成果の前景化を軸に今昔の文化資源を相互につなぎ、文化の物語（カルチュラル・ナラティブ）を結像しようというプロジェクトである。この控えめにいってもわかりにくいコンセプトを具体化すべく、年ごとにテーマを設定しイベント開催やプロジェクト・マガジンの編集を行っている。2017年度のテーマは「都市のカルチュラル・ナラティブ」そのものとし、大学での講演会や専門家による建築ツアーを通じてプロジェクト自体のコンセプトを伝えようとした。いわば外側から文化を眺めて学んだ昨年度に対して、今年は一歩踏み込んで、文化が継承され、生み出される現場を訪ね、その場に参加することを企画の軸に据え、テーマを「インターシッポ」とした。

ここでインターシッポについて簡単に確認しておこう。インターシッポは、専門教育の場と実践の場を繋ぐ仕組みで、1906年にシンシナティ大学のハーマン・シュナイダー（Hermann Schneider）が考案したとされている（（田島元正ほか編著『学校・インターシッポ』。日本では、1997年に文部省、通商産業省、労働省の三省（省名は当時）が合同で作成した文書「インターシッポの推進に当たつての基本的考え方」において示された「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリア

リアに関連した就業体験を行うこと」という枠組みが広く共有されてきた（（所戸晴雄ほか編『インターシッポ実践ガイド』大学と企業。テーマをインターシッポと設定したとき、当初はいささか単純に「文化の現場を体験するプログラム」という認識だった。しかし、実際に活動を進めるうちに、このインターシッポという枠組みがもつより大きな可能性が見えてきた。

イベント

インターシッポというテーマに対し、用意したプログラムはイベントと人材育成ワークショップの二つである。イベントプログラムには「都市の寺院を訪ねる」「ギャラリーを知る」「学校建築をめぐる」という三つのサブテーマを付し、文化が展開する現場でその現場の担当者から話を聞く構成を基本とする。

「都市の寺院を訪ねる」で来訪した寺院は、廣度院、常照院、泉岳寺、増上寺、妙定院、龍源寺の六寺院。「芝増上寺大門通りと旧御成道の歴史探訪」（16頁）では、常照院本堂の特別拝観を中心に、増上寺周辺の建築・歴史を専門家の解説で学びながら町を歩き、「寺院が伝える都市文化の物語——妙定院の文化財」（20頁）では、江戸時代の土蔵を現代に蘇らせ、数多くの文化財を継承す

る妙定院でレクチャーと特別見学を行った。また「泉岳寺と禅の文化」（40頁）では、体験プログラム（境内のガイドツアー）と座学（慶應義塾の教員による講義）を組み合わせている。より体験に焦点を当てた「古川のほとり・龍源寺からのまなざし」（14頁）には、坐禅ワークショップを取り入れた。

「学校建築をめぐる」では、慶應義塾大学三田キャンパスの建築を公開する「建築プロムナード」（24頁）と同日に、建築資料アーカイヴの活動や大学における建築公開の取組を現場の担当者が紹介し今後の連携について議論する「大学の建築フォーラム」（26頁）を開催。

「ギャラリーを知る」では、知られざる大学内ギャラリーの活動について、慶應義塾大学が円覚寺と共同で開催した異色の展覧会「釈宗演と近代日本」を題材に紹介、「ギャラリーと公共性」（36頁）では、竹芝で40年にわたり活動する現代美術画廊横田茂ギャラリーを会場に、社会における画廊の役割を巡るトークとバックヤードを含む見学会を実施した。

人材育成ワークショップ

人材育成ワークショップでは、今後のモデルとなるプロトタイプングを行おうと、様々な試みを盛り込んだ。ワークショップの狙いは、文化の現場における実践を担う人材を育てることだが、実践といつても多様な種類がある。本プロジェクトは「都市のカルチュラル・ナラティブ」という名前が示す通り、文化の物語を知り、さらに自らが語り手としてその文化を語り伝えていくことをコンセ

プトとしている。そのため、人材育成においては発信すること／

伝えることに焦点を当て、ワークショップを「カルチュラル・コミュニケーションター・ワークショップ（Cultural Communicator Workshop）」と名付けた（以下CCWS'18）。

慶應義塾大学の教員と学生の協力を得て、やや見切り発車的にスタートしたワークショップの基本プログラムは、システム思考／デザイン思考に基づく講義とワークショップ（10頁）、地域の文化機関への取材、チューターによるライティングセッションと記事の執筆という三部からなる。インターンとして参加した学生は、出身や学年、専門も様々で、文化の伝達に本質的な「異文化コミュニケーション」という主題について多くの課題と成果を見いだしたワークショップだった（CCWS'18の詳細は、市川佳世子の報告を参照…7頁）。

ARTEFACT×インターシッポ

インターシッポというテーマはARTEFACTにも反映されている。お気付きの通り、今回のARTEFACTは別冊付きで、別冊にはCCWS'18インターシッポの労作を収録している。本プロジェクトには、現在、幹事である慶應義塾大学アート・センターを含め九の文化機関が参加している。CCWS'18の実施にあたっては、（公財）味の素の文化センター、NHK放送博物館／NHK放送文化研究所、（株）虎屋 虎屋文庫の三機関の協力のもと、特別に見学・取材プログラムを編成した。学生たちはまず各機関を訪問し担当者への取材を行ったあと、取材内容やその後の追加調査を元に、自

分の関心に引きつけて原稿を執筆した。教員だけが読む大学のレポートと、より広い読者が存在する記事の違いへの戸惑いや、取材内容を事実在即しかつ自分の関心を交えながら記事化するこの難しさを大いに感じたようだ。一度ドラフトが提出されたあと、チューターと取材先文化機関が相談しながらライティングセッションを行い、最終的に記事として仕上げている。別冊ではその過程も「フィードバック座談会」として誌面化している。

／余白領域としてのインターンシップ

「インターン」と聞くと医局の研修医を思ふ浮かべることもあるだろう。奇妙な符合だが、ARTEFACT 01に「グーグル・アースダイバーに聞く」を寄稿した Rhetorica が、今号では江戸後期の蘭学者／医者である高野長英と歌川広重が描いた「星燈籠」を切り口に、都市の余白^{マージン}を巡るデザイン・フィクションを展開している（47頁）。

Rhetorica が取り上げた「余白」はインターンシップを考える上でも重要なキーワードだ。インターンシップは、端的に言えば、異なる現場同士を繋ぐ活動だ。ではインターンシップの展開する現場

はどこにあるのか。そう考えたとき、現場の間にある余白領域が浮かび上がってくる。都市のカルチュラル・ナラティブが設定した今回の現場には、寺院、アーカイヴやミュージアムの人々、イベントへの参加者やインターン生、教員やチューターそれぞれの現場が滲み出すように混じり合い、どの場にも属さない実践が現れていた。そのようなインターンシップの風景を眺めると、この余白に「クリエーター」と「享受者」に二分されがちな文化の領域を繋ぐ場、両者の実践が共有・交換され、新たな実践を生み出してゆく場としての可能性を見いだしたくなる。

すでに、学校を主たる領域として、インターンシップを単なる就業体験を超えた学問知と実践知の架橋や新たな知の創出を促すものとして捉える議論が行われている（編田祐充博士前著）。本プロジェクトにおけるインターンシップの取組は緒に就いたばかりだが、今年の活動、とくにCCWS'18の実践で得た課題と成果をインターンシップを巡るこれらの先行研究に接続し、インターンシップの持つ余白領域の可能性を探りたい。

カルチュラル・コミュニケーターになろう！

COLUMN

市川佳世子

（慶應義塾大学アート・センタープロジェクト・マネージャー）

身近な地域の歴史や文化を知り、文化機関に足を運び、その体験を文章にして、国際的な視野で発信する。カルチュラル・コミュニケーター・ワークショップ（以下CCWS'18）は、文化的体験の価値や魅力を広く循環させることのできる人材を育成するため、まずは慶應義塾大学の学生を対象に開催された。

／ワークショップ概要

CCWS'18は三部構成のワークショップで、第一部「ガイダンスとデザイン思考トレーニング」（思考編）、第二部「文化機関訪問・調査」（取材編）、第三部「活動成果の発信」（発信編）の順に展開した。第一部の思考編ではシステムデザイン・マネジメント研究科の鳥谷真佐子さんを講師にお招きし、「どのような目的・方法で国際発信を行うのか？」をテーマに、システム×デザイン思考の手法を用いて、グループ・ディスカッションを行った。第二部の取材編では三つのグループに分かれて、味の素食の文化センター、NHK放送博物館／NHK放送文化研究所、虎屋文庫を見学・取材に訪れた。第三部の発信編では、プロジェクト・マガジン、ブログ、SNS

の三つの発信媒体ごとのグループに分かれて、それぞれの執筆テーマを共有し、話し合いや追加調査をもとに草稿をまとめ、修正を重ねた原稿を公開した。

／参加者募集…コミュニケーションの始まり

国際コミュニケーションに必要なスキルを習得するためには、それを実践する機会の提供は必須だった。国内の学生と留学生をバランス良く集めるため、教職員や学生の協力を得て、留学生が多く集まる場所や授業、国際交流に関心のあるサークルを通じて情報を広めた。また、質問はライン（Line）でも受け付けた。文化×国際発信という内容のインターンの目新しさや、大学が主催する企画という安心感もあって、あらゆる学部から幅広い学年の学生たちが参集した。

／多言語コミュニケーション

日本語力に不安があるがぜひ参加したいという要望に応えるため、連絡のメールやスライド資料は日英のバイリンガル化を徹底し、

各イベントではチューターが英語通訳のサポートを提供した。また、全参加者に対して、多言語で進行することへの理解を求め、各自の得意言語で発信することを前提として共有した^{〔*1〕}。学生たちは戸惑いを感じつつも、言語の壁にとらわれることなく意見交換することの大切さや豊かさを実感できたようだ。

／国際コミュニケーションの目的と方法／

第一部の思考編では、二つの手法を用いたグループ・ワークを行った^{〔*2〕}。まず、バリュー・グラフを作成し、国際発信のより上位の目的を探った。発信のみにこだわらず双方向のコミュニケーションの中でお互いの文化について知ることは、多様性の理解を生み、武力衝突を避けるためにも大事であることや、対等なコミュニケーションを図ることが紛争解決や世界平和にも繋がる、という目的が可視化されていたのは感慨深かった。

次に、顧客価値連鎖分析を通じて今回の活動に関わる様々な人や機関と、その間を循環する様々な価値を洗い出した。俯瞰的に見たときに、まずは身近な友人や家族に話す、という口コミの威力を思いがけず再認識することになった。国際発信に関しても、母国に帰った留学生が身近な人に留学先での文化的体験を話すことで、付加価値のある情報が説得力をもって伝わる可能性が見えた。学生たちはワークを通じて、広い視野で考え、多様な意見をインプットすること、考えを可視化して整理し、共有していくことの大切さを学んだ。また、ワークショップ形式だったため、学年の下を気にせず、リラックスした雰囲気の中で自分の意見を出し、対

等に話し合いを進めることができたようだ。

／文化機関の見学と取材／

第二部の文化機関訪問に先立ち、学生たちは各自で下調べをして、グループ内で質問事項を取りまとめて事前に先方に伝えた。それぞれの文化機関の担当者には、なるべく学生の関心に合わせて見学と取材のプログラムを組んでいただいた。普段なかなか触れる機会のない資料を間近で見える機会のみならず、専門家と対話する中で、さらなる調査の糸口を得る機会となった。

味の素食の文化センターでは、企業の寄付を受けた公益法人として、社会に広く貢献するため、食文化の研究支援や理解の普及活動が行われている。食に関する図書を幅広く取り揃えるライブラリーと、日本の食文化の歴史を精巧な食品サンプルなどを通して視覚的に体験できる展示室を案内していただき、普段は公開されていない錦絵を見せていただいた。身近な食文化について改めて良く知る機会となった。

NHK放送博物館では、放送文化の歴史や博物館の成り立ちの経緯について伺い、常設展示と企画展示を案内していただいた。愛宕山という場所と放送文化のつながりや、普段何気なく視聴しているテレビ番組制作の裏側に膨大な量の研究と情報活用のためのアーカイブが存在すること、そして展示を通じた研究のアウトプットのあり方について考えを深めることができた。

虎屋文庫では、虎屋の歴史や和菓子について話を伺い、一般には非公開の文庫内を案内していただいた。虎屋と和菓子に関する様々

な資料が収集・保存された収蔵庫と、その資料を活用して研究が進められている現場を見学し、老舗企業の活動が文庫の活動に支えられていることや、文庫が企業と協力して和菓子の文化や魅力を国内外に伝える活動に取り組まれていることが良く理解できた。

／より良いコミュニケーションのためのフィードバック／

第三部の発信編では、学生たちはそれぞれ取材と見学をふまえてテーマを深め、執筆準備を進めた。発信媒体はマガジン、ブログ、SNSと異なるものの、伝えたい内容を文章にして、改善していく作業はいずれも同じだ。まず準備した草稿に対して文化機関の担当者やチューターからフィードバックを得る^{〔*3〕}。それに応じて追加調査を行い、様々な視点を取り入れて、文章を練り直していく。話し合いと編集を重ねてから文章を公開するプロセスは、SNSを通じて誰もが気軽に発信できてしまう今の時代だからこそ重要になる。大学の授業の中でも普段からもっと実践を重ねるべきだろう。

また、新しい媒体での発信に関しては、むしろ学生から学ぶことも多くあった。ブログ記事では親しみやすい文章を工夫して書いてくれた学生も多く、様々な文体や視点が持ち込まれた。イン스타그램を使用した文化情報の発信に関しては、フランスからの留学生が向こうでのインターン経験をもとにガイドラインを制作してくれた。

／参加型の学習とワークショップの可能性／
ワークショップの手法は参加者の主体的な参加を促し、学びを共有する豊かな場を生み出すため、新しい参加型の授業や社会教育のあり方を考える上で注目される^{〔*4〕}。そのような場づくりには、ファシリテーションが要となる^{〔*5〕}。大学教員は知識の伝達者から学習のファシリテーターへと変わっていく必要がある。高度にグローバル化が進み複雑化してきた現代社会に対応するために、創造的な思考力や問題解決能力を備えた人材の育成は急務であり、そのためには体験の中で知識や学びを深めるような参加型の学習が必須となる^{〔*6〕}。大学が学生を社会に送り出す架け橋となるためにも、今回のような参加型学習を促すワークショップを授業という形でも実現していきたい。

／カルチュラル・コミュニケーターというモデル／

CCWS'18に参加した学生たちは、言語の壁を乗り越えてコミュニケーションを取ることやグループで作業することの難しさを実感しながらも、その中で生み出せるものの豊かさを実践の中で学んだ。身近な文化を知る。体験する。その内容を伝えるために人と繋がる。カルチュラル・コミュニケーターは、社会のあらゆる場面で活用できるスキルを備えるモデルを提供するのではないか。

〔1〕 大学での多言語による研究教育活動のモデルとなったのは、筆者が2018年度スイス政府奨学生として滞在したフリブル大学 (www.unifr.ch)。仏独の二か国語が公式言語であるフリブル州の大学では、講座ごとに主たる講義言語が決まっているが、学生は各自得意な方の言語での発言を認められている。

〔2〕 本誌の阿児雄之の報告(10～13頁)を参照。

〔3〕 フィードバックは学習を促進するために重要。G. Light et al., Learning and Teaching in Higher Education: The Reflective Professional (Los Angeles, 2009, 2nd edition, first published 2001), p. 216.

〔4〕 中野民夫『ワークショップ―新しい学びと創造の場―』(岩波書店、2001年)など。

〔5〕 中野民夫『ファシリテーション革命―参加型の場づくりの技法―』(岩波書店、2003年)など。

〔6〕 L. S. Watts and P. Blessinger eds, Creative Learning in Higher Education: International Perspectives and Approaches (New York, 2017), pp. 18-20.

Cultural Value Chain Analysis

視野の拡大と共有

COLUMN

文化の豊かさを表す際に、多様・多彩という言葉をよく聞く。しかし、多様・多彩という言葉を用いることによって、思考停止に陥ってはいないだろうか。多様な文化、多彩な人々、多面的な活動と発言しつつも、その内実としての多様性を構成している要素を十分に捉えることができていない。むしろ、捉えることを放棄したが故に使用できているのではないだろうか。

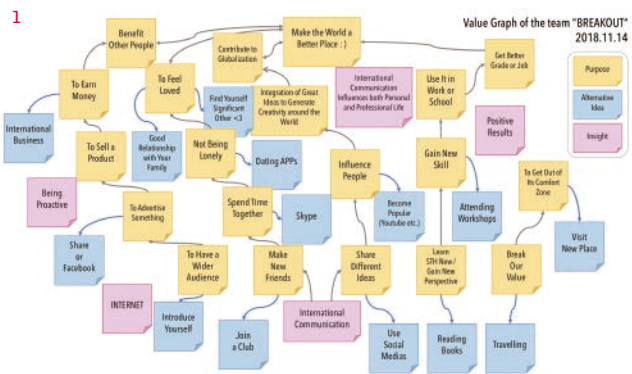
筆者は、2018年より「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトに参画し始めた。このプロジェクト・メンバーやその活動は、まさに多様かつ多彩であり、その全貌は未だ霧がかかっている見えない状況である。2018年の活動テーマに「地域文化資源インタナシッパ」を掲げ、本誌にも活動紹介がなされている様に「都市の寺院を訪ねる」「ギャラリーを知る」「学校建築をめぐる」の三つが大きなトピックとなっている^①。しかし、それらの関係性や、なぜ港区の地域文化資源として寺院・ギャラリー・学校建築が表出してきたのか全く分からず、参加当初は大きな疑問と興味を抱いていた。

これとほぼ時を同じくして、2018年6月に、

JSPS科研費262865「博物館の新たな在り方を模索するための体験学習・ワークショップ評価の構築」（研究代表者…島谷真佐子）が採択され、筆者も研究分担者として携わっている。本研究課題は、博物館にて開催される体験学習やワークショップという催しを単なる集客材料ではなく、その目的と価値を再度位置付け直し、新たな評価指標を構築しようと試みるものである^②。これまで各地の博物館へ赴き、システムズエンジニアリングの分野で生まれたバリュー・グラフ（Value Graph）とCVCA（Customer Value Chain Analysis：顧客価値連鎖分析）という手法を用いて、体験学習やワークショップに関わる人々と議論と検討を重ねている。これらの手法は、プロジェクト活動や社会システムなどを構成する要素を付箋に記していき、その関係を結びつけていくことで、俯瞰的かつ系統的に活動やシステム全体を視覚化することを可能にするものである。バリュー・グラフ^③は、活動の目的が「何のため」であるかを高次に考えていくことにより、局所的な解決方法に陥ることなく、真の目的を共有しつつ代替案を発想することに役立てることができる。

一方、CVCAは活動に関わるステークホルダーを明

確化し、ステークホルダー間でやりとりされる価値（金銭や情報、知識など）を記述することによって、活動全体を俯瞰することができるようになる^④。



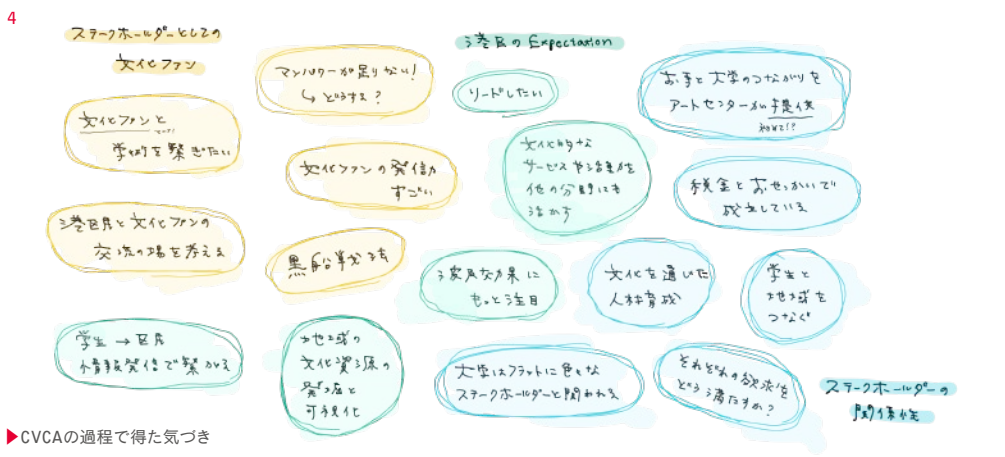
▲Value Graphの例（「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトワークショップ、BREAKOUT チーム作成）

① 慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」<http://www.art-c.keio.ac.jp/research/research-projects/cunary/>

② 本間友（インターシッパの風景——余白領域に生み出されるもの）ARTE-FACT 02, pp.46, 2019

③ 島谷真佐子「博物館の新たな在り方を模索するための体験学習・ワークショップ評価の構築」JSPS科研費18K18665 <https://aken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18K18665/>

④ 前野隆司ほか「システム×デザイン思考で世界を変える慶應SDMイノベーションのつくり方」日経BP社、2014年。

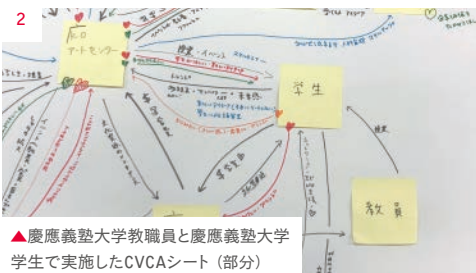


▲CVCAの過程で得た気づき

東京工業大学博物館や大阪府立弥生文化博物館にて、担当者の方々と実際にバリュー・グラフやCVCAを作成していく中で、博物館における体験学習やワークショップの様な小規模の活動であっても、その活動が目指す目的は複数あることが多く、それに関わる機関や個人も複数にわたり複雑な関係性をもって進行していくことが見えてきた。そこには、体験学習やワークショップというイベントを通じての来館者数増加、対外的に見える博物館活動の活性化、運営補助金獲得という目論見が含まれている。また、実施者（博物館学芸員、ボランティア）ならば文化普及や博物館の存在認知向上、参加者（来館者、地域住民）ならば知的欲求や文化知識の享受、支援者（自治体、企業）ならば市民サービスの向上や文化貢献を通じて企業イメージの向上など、各々が多くの期待を寄せていることも改めて可視化された。体験学習やワークショップは博物館活動を構成する一要素に過ぎないが、これらの在り方を俯瞰的に捉えることは、関係するステークホルダーをも考慮した、博物館全体の運営を考えることに通じる道筋が現れてきた。

これらの実施経験から、バリュー・グラフとCVCAは、イベントを中心として展開し、多様な多彩な活動のあまり混沌としつつある「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトを理解するのに有用であろうと考え、二つの視点からプロジェクトへの適用を試みた。

ひとつはプロジェクト全体を俯瞰して、その意義



▲慶應義塾大学教職員と慶應義塾大学学生で実施したCVCAシート（部分）



▲アート・センタースタッフ、学生、地域の文化機関（妙定院）、港区役所職員でCVCAを実施

されたCVC Aは、それぞれに特徴があり、一個人や一機関だけでは表現できなかった価値循環を描くことができています。例えば、学生が入った回では、「慶應義塾大学」「三田会（慶應義塾大学同窓会組織）」との価値連鎖が特徴的であった図2。学生は慶應義塾大学から教育という価値を受けるのはもちろんのこと、「慶應義塾大学」というブランド、さらには「三田会」という社会への接点点という価値を重視していた。そして、大学は学生から活動人材としての力や学生世代における現代的な感性という価値を得ているというCVC Aが描かれた。また、港区役所職員が入った回では図3、地域文化資源の活用促進が、文化を軸とした価値循環だけに留まらず、それに参画する区民の福祉をも充実させる可能性を秘めているとの気づきをCVC A作成過程で得た図4。これらの例は、個別企画を見ていただければ得がたい気づきであり、プロジェクト全体を俯瞰することによって初めて見出された知見に他ならない。



▲人材育成プログラム「Cultural Communicator Workshop '18」チラシ

もうひとつは、地域文化資源インターンシップに臨む学生教育に対する試みである。地域文化資源インターンシップでは、開催されるイベントへの参加だけではなく、港区の地域文化資源への主体的な取材を通じて、食文化と放送文化を学び、カルチュラル・コミュニケーションに育つてもらうという人材育成プログラムという側面も含めている。プログラムの構成要素のひとつとして、システム思考とデザイン思考を用いて自分たちの活動の意義や位置づけを多視点から俯瞰的に見ることを目的とする、バリュー・グラフとCVC Aを用いたワークショップを開催した（*）図5。

この人材育成プログラムには、約40人から参加申し込みがあり、その約半数が留学生である。人材育成プログラムでは、思考の訓練―地域文化機関への取材―発信（文章、写真など）という段階を経て、カルチュラル・コミュニケーションへと成長する道のりを想定している。この第1段階にて、「なぜ文化を国際発信するのか」をテーマとして、バリュー・グラフとCVC Aを用いたワークショップを開催した

図6。学年、専門分野、国籍は違うけれども、チームメンバーがフラットな立場で議論を交わし、作り上げたバリュー・グラフとCVC Aは実に興味深いものばかりだ図7。



▲Cultural Communicator Workshopの様子

すかったです。」「Acquired skills to work together with people from different disciplinary and cultural background」というコメントをもらっている。フラットに話せるからこそ考えに差がでる。学年とか国籍とかいう社会的な仕組みによって与えられた存在位置ではなく、自分自身の経験や視点が如実に現れてくる。そうすると、慶應義塾大学で学ぶ学生の一人としての国際発信ではなく、「私」が発信したい文化と相手が姿を表してくる。あるチームのCVC Aでは、「まずは身近にいる友人や留学生に港区の文化を伝えるところから始めよう。そこか

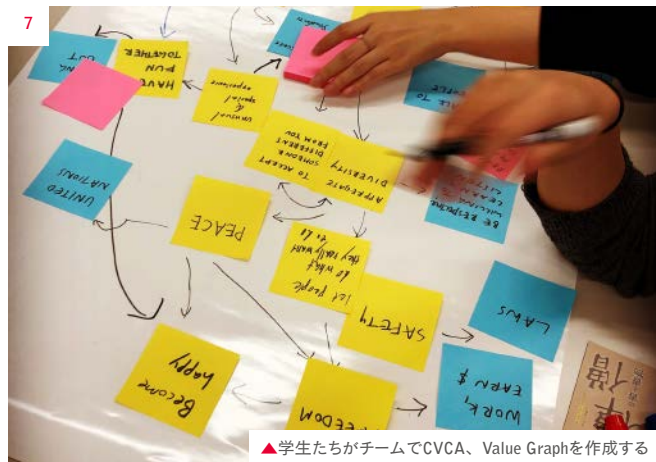
）本誌の市川佳世子の報告（7頁）を参照。

らSNS等を通じて世界へ拡散していくというかたちもあるんじゃないか。」という気づきが導かれていた図8。

その背景にはこのようなフラットかつ個々を尊重して意見を受け入れていくチーム形成が関連しているのではないだろうか。一般的、辞書的、教科書的な言葉の理解ではなく、自分事として「なぜ（私は）国際発信するのか」と考えをさらけ出すことによって、自らの立ち位置と活動の目的を考えることができ、一緒に活動するメンバーとの意識共有が可能となったであろう。そして、単なる受け身の訪問とレポートではなく、文化を介した人々のつながりや文化を発信する記事を書く意味を自身の中で描きだすことができていたと感じる（本誌別冊に最終成果としての記事を掲載しているのでご覧いただきたい）。

これら二つの試みで作成されたバリュー・グラフやCVC A群は、それ自体がいうまでもなく意味を持つが、参加した方々からは、それらを作成する過程でお互いの考えを述べ、さらにその考えを受けて新たな考えが想起されていくことを体感したことが刺激的であったという声が多い。

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトで実施されるイベント、博物館で開催される体験学習やワークショップは、実に多様で多彩である。この中で注目すべきは多彩ではなく、それらイベントが目標としている上位の目的を、企画者・参加者・支援者が共有できているかどうかにあるので



▲学生たちがチームでCVCA、Value Graphを作成する

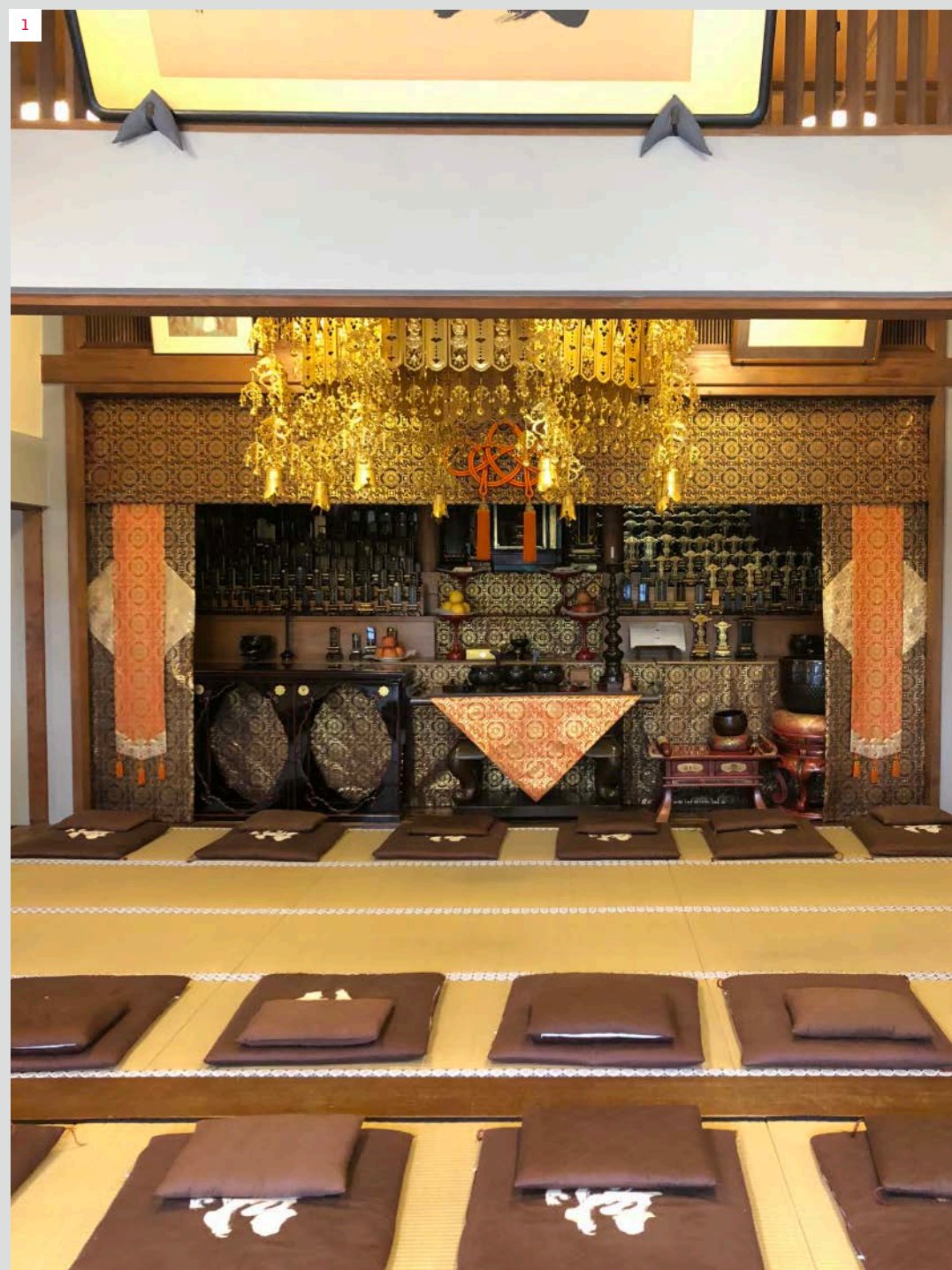
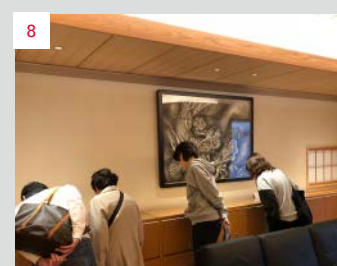
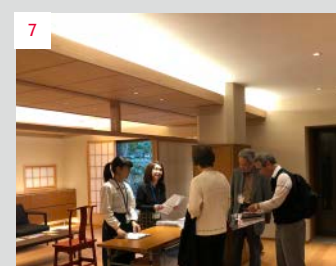
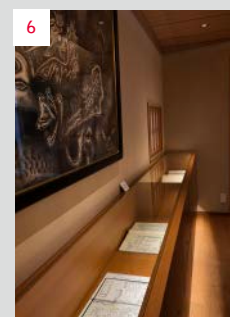


▶チーム「The Collaborators」のCVCA

はないだろうか。イベント単独の評価は、参加者数やアンケートによる満足度ではかられたりすることが多い。これらは全て企画者に対する評価であって、イベントの開催目的を評価できていないと捉えることもできる。筆者が参画している研究課題において、博物館における体験学習やワークショップの新たな評価構築を目指しているのも、ここに疑問を感じているからである。そのような既存評価に對して、これら二つの試みから得られた「視座の異

なる互いの目的を抽出し、目指している上位の目的を明示化していく」というアプローチは、新たな評価観点を与えてくれた。今回の試みは、多様かつ多彩な地域文化資源へ飛び込んでいく「地域文化資源インターンシップ」の姿を細部まで明瞭に描き出し、多数のステークホルダーが複雑に絡み合う中での目的を共有する一助になったと考えている。また、少し、大袈裟かも知れないが、バリュー・グラフやCVC Aの作成にあたり付箋へ書き出された、個々人の言葉こそが「都市のカルチュラル・ナラティブ」の一形態と捉えてみるのも面白いだろう。

Ryugen-ji has over 300 years of history in Mita. In the lecture Abbot Matsubara, he told the history of Ryugen-ji and the role of a temple [Fig.2]. In the Zazen workshop, participants had opportunities to rethink over their bodies and spirits [Fig.4]. The temple kindly displayed the precious historical documents which has been passed down for generations in the temple [Fig.6].



300年以上にわたり、古川のほとりから三田の町を見つめてきた龍源寺を訪ねるワークショップ。松原住職によるレクチャー[図2]では、龍源寺の歴史や、自分の中にあるものをすくい上げる場所としての寺院の役割等が語られた。

続く坐禅ワークショップは、20分×2回の充実したもの[図3]。車などの町の音が、いつもと違うように耳に響くなど、参加者からは、自分の心と身体を改めて見つめ直す経験になったという感想があった[図4]。会場には、龍源寺に伝わる古文書などの

資料も展示され、地域の歴史に開かれた窓としての寺院の役割を改めて感じさせた[図6]。

ツアー概要

日時 Date/Time	2018年10月13日 (土) 13:30-15:00 Saturday 13 October 2018, 13:30-15:00
場所 Venue	龍源寺 Ryugen-ji Temple
講師 Lecturer	松原信樹住職 (龍源寺)、國本学史 (慶應義塾大学) Shinju Matsubara (Abbot of Ryugen-ji Temple), Nori-fumi Kunimoto (Keio University)

WORKSHOP

レクチャー&坐禅ワークショップ 「古川のほとり・龍源寺からのまなざし：寺院文化の現在」

Lecture and Zazen (meditation) Workshop at Ryugen-ji Temple

現代に残る 増上寺山内寺院の景観

亀山裕亮（慶應義塾大学アート・センター学芸員補）



▲大門、ツアーのスタート

徳川將軍家の菩提寺として知られる増上寺は、江戸時代には現在よりもはるかに広大な境内をもっていた。多くの山内寺院が伽藍や靈廟を取り巻くように集まり、さまざまな役割を担うその様は、一つの町にたとえられるほどだっただろう。今回のガイドツアーでは、増上寺大門から三解脱門までの道のりを歩き、二つの山内寺院を訪問させていただいた。

ガイドツアー「芝増上寺大門通りと旧御成道の歴史探訪」レポート

1. 増上寺大門

ガイドツアーは大門から始まった。駅名にもなっている大門だが、現在建っているのは、実は「二代目」である。初代の大門は木造で、増上寺が徳川家の菩提寺となつてすぐ、1605年頃に建築された。徳川家將軍の葬列もここを通り、増上寺のシンボルとして歌川広重の作品にも描かれている。

一方、現在の二代目大門は1937年に鉄筋コ



◀歌川広重《東海道名所之内 芝増上寺》（国立国会図書館 所蔵）

ツアー概要

- 2018年9月27日（木）「芝増上寺大門通りと旧御成道の歴史探訪」
- 増上寺大門～常照院 本堂～廣度院～増上寺三解脱門
- 講師：伊坂道子氏（建築家・伊坂デザイン工房共同代表）、常照院 野村恒道 住職

ンクリート造で再建されたもの。1923年の関東大震災によって初代大門の老朽化が進んだことに加え、交通の点から間口を広くする必要もあり、再建されることとなったのだ。伊坂氏によれば、この再建は大門の「高麗門」という日本建築の意匠を、鉄筋コンクリートという近代的な技術によって表現しようとする試みであったという。そして、その実現には技術者と職人の両方が深く関与した。二代目大門の均整のとれた姿は、増上寺の旧跡をとどめる

と同時に、木造にはないような堂々たるスケール感も兼ね備えている。

2. 常照院土蔵（あかん堂／本堂内陣）

大門通りを三解脱門の方向へと進み、右手の細い路地へと入っていくと、石積みの外壁をもった土蔵が現れる。これが常照院の本堂である。この堅牢な石積みの外壁は、関

東大震災を受けて作られたのだ

という。この外壁があつたために、この土蔵だけは戦災に耐えることができた。本尊である秘仏、善光寺如来（二光三尊阿弥陀如来）は芝金杉の海で漁夫の網にかかったところを引き上げられ、のちに奉納されたと伝えられる。これを安置する堂宇がなかなか開帳しないため、江戸時代には「あかん堂」とも呼ばれた。

今回のツアーでは、現在でも普段は見ることできない内陣を特別に拝観させていただくことができた。二間半（約4・5メートル）四方の土蔵の内部は、ごく小規模な空間ながら、格天井に描かれた梵字の入った文様や、正面の仏壇の彩色など、細かな装飾が華やかである。内部にいくと、緻密に作り出された儼かな雰囲気圧倒されるかのような感覚をおぼえた。



▲常照院 本堂（土蔵）



▲常照院 野村恒道住職によるレクチャー



▲欄間



▲あかん堂内部を特別見学



▲格天井



photo: Ryo Yoshiya



▲廣度院の練塀



▲歌川広重《東都名所 芝増上寺山内の図》(国立国会図書館 所蔵)

3. 廣度院表門・練塀

続いて訪れたのが、三解脱門の向かいにある廣度院。増上寺の創建時に僧侶の修行のために設けられたのがはじまりとされ、増上寺山内でも最古の子院である。院の表門と練塀は江戸時代から何度かの修復を経つつ、現在まで残っているもので、表門には廣度院を宿坊とした浅野家の紋所「芸州鷹の羽」が入っている。通りからも見ることでできる廣度院の練塀は、日比谷通りを挟んだ向かいにある三解脱門とともに、往時の景観を偲ぶことのできる重要な痕跡となっている。このような練塀が、かつては境内の道沿いに立ち並び、統感のある美しい景観を作り出していたのだという。そう考えるとき、いつも何気なく通り過ぎてきた日比谷通りの風景も、また意義深く感じられないだろうか。

4. 増上寺三解脱門(三門)

三解脱門がツアーの終着点となった。東京大空襲によって多くの建築が焼失したこの地域にあつて、大門とともに残った数少ない建造物である。入母屋造で軒下には禅宗様の大きい詰め組みが組まれており、力強い印象を与える。

この三解脱門から大門へと向かう大門通りは、さらにその先の浜松町で東海道と直角に交わっている。現在でも旧東海道浜松町から増上寺を望むと、大門・三解脱門・本堂の三つが一直線に重なりあてみえる。これはもちろん偶然などではなく、江戸という都市が成立する過程で、計画的に作り出されたのである。

今回訪れた増上寺の建築物は、いずれも江戸時代から現在に至るまで、同じ場所に存在し続けている。しかしその歩みは決して平坦なものではなかった。関東大震災や戦災など、さまざまな出来事がきっかけとなり、その姿は絶えず変化してきたのである。都市のなかにはたしかに過去の痕跡が刻み込まれている。このツアーは、そのような積み上げられた歴史の層に思いを馳せる格好の機会となったように思われる。



▲三解脱門の解説



▲歌川広重《東都名所之内 芝増上寺之図》
(Museum of Fine Arts Boston, William S. and John T. Spaulding Collection)

寺院が伝える都市文化の物語

——妙定院の文化財

2018年9月29日（土）、港区の寺院妙定院において、ご住職の小林正道氏、建築家の伊坂道子氏を講師にお招きして、講演会・特別見学会「寺院が伝える都市文化の物語——妙定院の文化財」が開催された。本企画の参加者は、通常公開されていない妙定院の本堂や浄土蔵を特別に拝観し、妙定院とその建物や寺宝が、江戸時代から現代までの歴史の中で、どのように変化し、守り伝えられて来たのかを、現場で学ぶことができた。以下は、同企画における二つの講演の要旨である。なお、増上寺山内寺院について詳しくは、ARTEFACT 01収載の「伊坂道子氏講演『増上寺旧境内の変遷』」に学ぶ、増上寺の江戸から現代」および伊坂道子『芝増上寺境内地の歴史的景観』岩田書店、2013年を参照のこと。[要旨作成：ARTEFACT編集部]

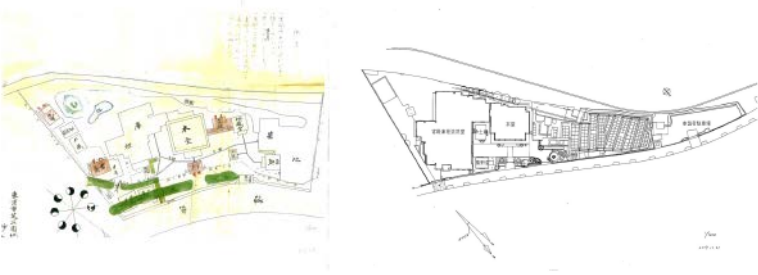
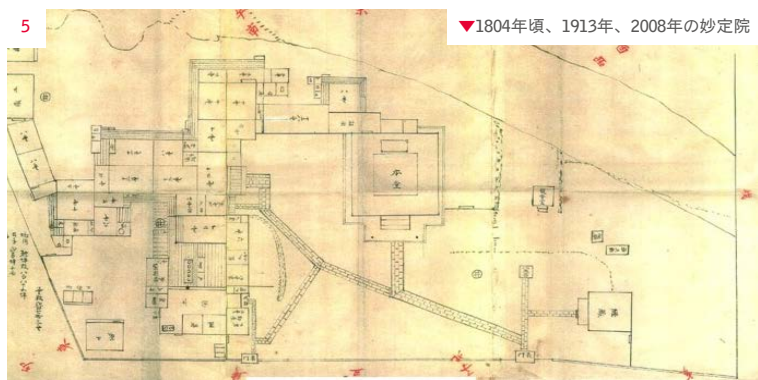
守るこころ展くこころ——妙定院の文化財

小林正道（妙定院住職）

妙定院は、増上寺の山内寺院である。増上寺は、1393年、浄土宗第八祖である西誉聖聡上人によって開創された。1590年に徳川家康公が江戸に入城し、増上寺は徳川家の菩提寺となっている。

後の復興としては、1950年に仮本堂が建ち、1958年に昭和 본堂として造立された。今回の企画の参加者が座している本堂は、2008年に竣工した木造総檜造の建物である。

空襲で難を逃れた二つの土蔵は、建築家の伊坂道子氏の尽力もあり、移築・再建され、浄土蔵・熊野堂は、現在国の登録有形文



2008	妙定院開創250年記念 第1回 妙定院展
2009	熊野堂の秘仏初公開 特別展 「法然上人の生涯をみる」
2010	極楽と地獄 ～浄土曼荼羅と地獄絵の世界
2011	法然上人800年大遠忌記念 「法然上人～浄土への道」
2012	応挙の釈迦図～仏教のはじまり
2013	定月大僧正と徳川家重公 ～妙定院と、九代将軍と、江戸城大奥と
2014	初・熊野大権現 特別開帳 「富士と熊野～自然へのいのり」
2015	御開帳の年「善光寺如来と阿弥陀さま」
2016	本堂大公開「伝来の本尊と徳川家康公」
2017	妙定院展10周年記念 「伝来の名品コレクション」
2018	びっせん 画僧月傳と円山応挙

▲2008年から2018年までの妙定院展のテーマ

化財に指定されている。この二つのお堂があったために、妙定院は寺宝を多く守り伝えることができています。浄土蔵は、本尊に善光寺如来を安置し、徳川家・江戸城ゆかりの彫刻を収蔵する。その他多くの寺宝は、寺院の収蔵庫にも保管されている。

2008年以降、こうして伝えられてきた寺宝を展示する、「妙定院展」を毎年開催し、彫刻や絵画などを公開している。妙定院では、寺の在り方のひとつとして、地域や社会に開かれた寺であることを模索している。江戸から続く歴史のもとで、様々に環境は変化しつつも、今日まで、多くの文化財を伝え・残すことができた。こうした文化と寺宝を社会に広く示してゆくことで、多くの人々に親しんでもらい、仏教や寺院に対する理解を深める一助となつて欲しいと考えている。

増上寺の境内は、武蔵野台地の端に位置している。近くには丸山古墳があり、古墳時代から聖地とされた土地でもあった。家康公は、鬼門・裏鬼門などを考えて寺社を置いているが、江戸城の背後、元々聖地であった場所に増上寺を配している。

妙定院は、1763年、増上寺の四十六世妙誉定月大僧正によって開山された。開基は、徳川九代将軍家重公である。もとは、定月上人の草庵であったが、次第に建物が増えていく。上人は、芸術家でもあり、絵画・書・彫刻も制作し、妙定院の作庭もした程、大変な文化人であった。

妙定院は、浮世絵にも描かれている通り、近くには水田があり、小川が静かに流れていたような場所に位置するお寺であった。近現代を通じて土地の区画整理などもあり、妙定院の地形は変化している。江戸期には火災が多かったため、建物の多くが土蔵造りで建てられていたが、1945年の空襲による直撃を受けて、地蔵堂・経蔵と二つの土蔵を除き、本堂・庫裏を含む建物はほとんど焼失している。戦



▲現在の妙定院



▲妙譽定月《妙定院図》妙定院蔵



▲妙定院庭園

江戸の建築の扉をひらく

伊坂道子（建築家・伊坂デザイン工房共同代表）

この地域（港区芝地域）には、増上寺山内寺院にある、常照院本堂や廣度院の表門・練塀など、江戸の建築が残っている。中でも妙定院は由緒深く、様々に調査をさせていただいた。調査を進めると、経蔵から移された經典が保管されている土蔵（現浄土蔵）は1811年、熊野堂は寛政八年（1796年）の銘がある棟札を発見した【図6】。

新地寺院の建立が禁止された時代に、増上寺別院として妙定院は建立されている。妙誉定月上人から今の14世の諦誉正道上人まで250年続いているが、区画整理や戦災などの影響もあり、江戸期と今では、妙定院の姿は変わっている。

この妙定院を江戸の姿に戻す、という正道住職の決断を受けて、建物の詳細調査、境内設計図の作成を開始した。土蔵を高速道路の振動から守り、経年劣化を防いで、調査当時トタン張りとなっていた外観を江戸時代の建築本来の姿を取り戻すという目的のもと、解体・移築・再建の参考とするために日本中の蔵を見に出向いた【図7】。

浄土蔵は本来の土蔵造りを変えず、二階の床を取って、仏像群の収蔵兼展示空間とすることを意図した。いよいよ解体・移築に取りかかると、熊野堂からは大量の古文書が発見され、これまで『三縁山志』や『増上寺文書』では分からなかった事実が明らか

になった【図8】。さらに、浄土蔵のかつての材料や寸法までがわかり、現存の建物と一致することを確認した。熊野堂や浄土蔵は、修理を重ね、境内での場所を移しつつも、大切に継承されてきたことが判明したのである。

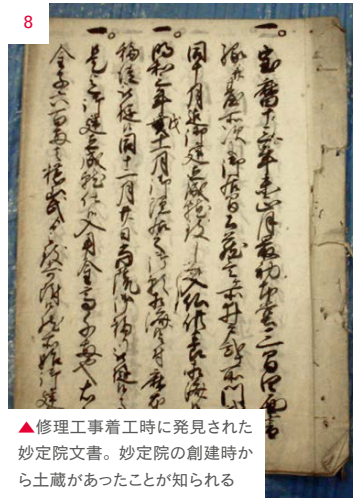
熊野堂、浄土蔵の解体・修理では、江戸期の左右一對の部材を必ず片方は残している。川越の文化財など、数々の蔵を修復した左官の棟梁、加藤信吾氏の協力のもと、作業が進められた。

土蔵の木舞、下げ縄に泥団子を打ち付ける「荒打」の作業は土蔵二棟のため一週間も繰り返され、丈夫な壁面が作られてゆく。そして、内側から泥団子を入れる「裏返し」の工程を経て、土の材料に徐々に砂を増やしながら縄を数回巻く「樽巻」など十数工程を行い、最後に漆喰を塗り固める。ほぐした麻の繊維や、海藻の「ツノマタ」、石灰、貝灰等を混ぜて作る本漆喰で仕上げを行った。木造部分は江戸の工法で直しつつ、耐震のために、基礎に鉄筋コンクリートを採用している。【図9】【図10】

熊野堂では、基礎の石積み目の地に漆喰を盛りあげてふさぎ火や湿気が入らないようにするなど、他では見られない工夫も行われている。洪墨を塗った羽目板状の板壁を架けることで漆喰を保護し、窓に雨除けの庇を付けるが、防火のための対策がとられている。土蔵の壁には、折れ釘を出し、木造の庇や腰壁を留め付け

ている。火事の際には、折れ釘にかけた庇や腰壁板を取り外しておいて、火事をやり過ごすという対策だ。
こうした土蔵造りは、壁が厚く、扉も土塗りでしたりしている。8月の朝晩の温湿度差を計測すると、建物の外気温は温度では10度程、湿度は30%近くも変動する。ところが土蔵の内部では、温湿度の変動は緩やかである。

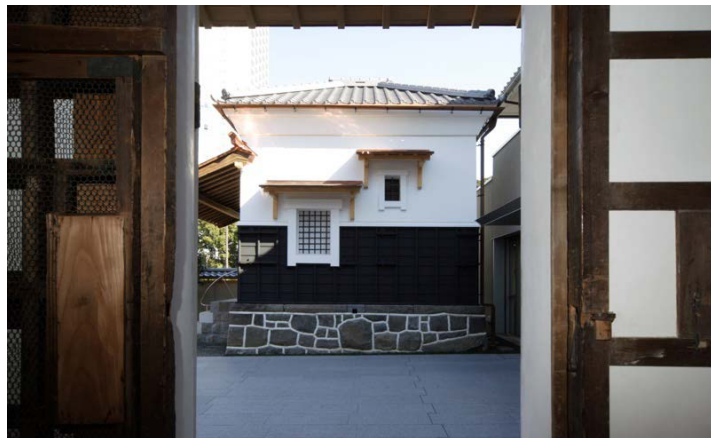
火災や、温湿度の変動に非常に強い、という土蔵造りの特性に加えて、都市部の空襲といった戦災があっても妙定院の寺宝が燃えずに残ったのは、寺族が空襲や火事などを予見して、土蔵の中に寺宝を収蔵して守る、という対策をしてきたからでもあった。こうして守り、伝えられた貴重な文化財は、妙定院展を通じて公開されている。



▲修理工事着工時に発見された妙定院文書。妙定院の創建時から土蔵があったことが知られる



▲修理後の熊野堂



▲修理後の浄土蔵

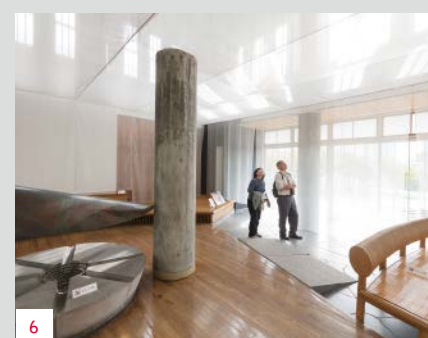
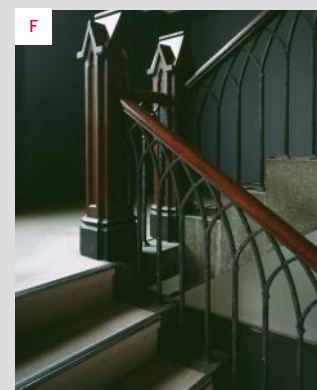


▲円覚寺舍利殿が置かれている塔頭構内に建つ土蔵



▲熊野堂内調査で発見された棟札

図A-C 第一校舎 First School Building
図D-F 塾監局 Jukukan-kyoku (Keio Corporate Administration)
撮影：新良太 Photo by Ryota Atarashi



本ページでは、建築プロムナード当日の記録写真に加え、写真家・新良太氏が撮影した第一校舎、塾監局（内部非公開）の写真をご紹介します。
いずれも、慶應義塾大学図書館と同じ、曾禰中條建築事務所が設計を手がけた建築。特に第一校舎の階段のスケール（C）は圧巻だ。今回見逃した方は、是非次回、注目してほしい。

This page introduces the photographs from the Architecture Open Day, as well as the photographs of the First School Building and the Jukukan-kyoku (Keio Corporate Administration) by Ryota Atarashi. Both buildings were designed by Sone Chujo Architectural Office, who also designed Keio University Old Library. You must experience the large-scale staircase of the First School Building.

GUIDE TOUR

慶應義塾三田キャンパス 建築プロムナード

Keio University Mita Campus Architecture Open Day

ツアー概要	
日時 Date/Time	2018年10月17日（水）・20日（土）10:00-17:00 Wednesday 17 and Saturday 20 October 2018, 10:00-17:00
場所 Venue	慶應義塾大学三田キャンパス Keio University Mita Campus
ガイドツアー 講師 Guided tour lecturer	森山緑（慶應義塾大学アート・センター所員） Midori Moriyama (Keio University Art Center)

大学の建築フォーラム

アーカイヴとアウトリーチ

LECTURE

学校と記憶

― 慶應義塾の建築プロジェクトを中心に ―

渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授／キュレーター）

／ 慶應義塾の建築プロジェクト

―― ユーザー・マインドの建築アーカイヴ――
「慶應義塾の建築プロジェクト」は、大学内でいくつもの建て替え計画が進行していた2008年に開始されました。建築の撮影、関連する図面や資料の調査、記録化を通じて、建築が失われた後にもその姿を再構築するためのよすがを作ることがプロジェクトの目的です^{〔表1〕}。建築の設計を主眼として竣工時を建築の完成とみなす通常の建築アーカイヴと異なり、このプロジェクトでは、竣工時を建築誕生の時と捉え、その後の建築がたどった時間を含む「建築の記憶」を集積する「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」構築を試みています。
学校建築の持つ、建築とユーザーの特異な関係性を考えると、ユーザー・マインドという観点の有効性が浮かび上がってきます。なぜなら、学校建築

は、生徒や学生が生活の大半の時間を過ごす生活の場であり、非常に多くの人にとって極めて重要な記憶の器として機能しているからです。しかも、世代を超えて一定の年齢の人々の記憶を蓄積するという二重の特殊性を持っています。

「慶應義塾の建築プロジェクト」ではアウトリーチにも力を入れています。これは建築の記憶と人々の記憶をつなぐ活動と言うこともできるでしょう。なかでも、大学の在校生へのアプローチはとりわけ重要です。現在その建築を生活の場としている人々に、自らの空間に対する眼を開かせ、建築リテラシーを向上させることに直結するからです。これから、在校生を巻き込んで実施した、重要な活動を二つ紹介します^{〔表2〕}。

／ 「谷口吉郎とノグチ・ルーム」展と

「幼稚園生による幼稚園本館」展と
2009年に開催した「谷口吉郎とノグチ・ルーム」展と慶應義塾幼稚園生を対象としたワークショップは、プロジェクトの最初のアウトリーチ活動であり、その後の展開のモデルとなりました^{〔図1〕}。旧ノグチ・ルームの初の特別公開を含むこの企画は、現実の建築



▲「谷口吉郎とノグチ・ルーム」展（2009年）

本稿は、2018年10月20日に開催された講演会「大学の建築フォーラム…アーカイヴとアウトリーチ」のサマリーである（要旨作成・編集…ARTEFACT編集部）。講演会の開催概要は、2ページを参照。

空間と、大学に残された谷口吉郎建築（慶應義塾幼稚園、日吉寄宿舍）の写真や図面を同時に鑑賞する機会を提供するもので、運営には美学美術史学専攻の学生たちが関わりました。大学で学ぶ若い世代が建築空間の在り方や問題に出会い、考える機会を創出するファクターとして、ノグチ・ルームがたどった歴史を生かすこと、その歴史も含めて建築空間の問題として継承することが重要だと言えるでしょう。
さらにこの展覧会では、プロの写真家による建築写真とともに、幼稚園の生徒たちによる写真を展示しました。この写真は、幼稚園を撮影した写真

〔1〕慶應義塾の建築プロジェクトの活動については、「慶應義塾の建築FOCUS No.1 信濃町往来」（慶應義塾大学アート・センター、2018年）に詳しい。FOCUSではまた、2017年度に信濃町キャンパスのオープンエリアで実施し、プロジェクトのアウトリーチ活動に新しい局面を開いた展覧会「信濃町往来」も特集している。

2015	2月	〔撮影〕三田新図書館、東京會館
	3月	〔展覧会〕「ノグチ・ルーム再び」展 〔催事〕「ノグチ・ルーム再び」関連企画、建築見学ツアー 〔調査〕金沢工業大学、金沢21世紀美術館、石川県立伝統産業工芸館、金沢歌劇座（谷口吉郎設計）、鈴木大拙館（谷口吉生設計）
	6月	〔撮影〕ホテルオークラ
	9月	〔撮影〕信濃町7号棟
	10月	〔撮影〕信濃町中央棟、門柱
	11月	〔催事〕慶應義塾三田キャンパス建築プロムナード――建築特別公開日 〔催事〕慶應義塾三田キャンパス1951：ノグチ・ルームの誕生を巡って 〔撮影〕信濃町白梅寮
	204枚の図面をデジタル化	
	8月	〔催事〕三田山上で出会う近代建築と彫刻 〔催事〕ガイドツアー「近現代建築と彫刻が奏でる『交響詩』」 〔催事〕親子向けワークショップ「慶應三田キャンパス 夏休み教室 ～建築&彫刻鑑賞編～」
	10月	〔催事〕建築プロムナード
	11月	〔催事・展示〕「転位する部屋――畳敷と新萬來舎
2016	12月	〔撮影〕信濃町キャンパスの空撮、三田図書館、三田旧図書館
	101枚の図面をデジタル化	
	2月	〔撮影〕日吉図書館
	3月	スマートフォンアプリ「ポケット学芸員」において、三田キャンパス内建築物の音声ガイドを公開 〔撮影〕三田演説館（福澤諭吉像移設により）
2017	5月	〔撮影〕日吉記念館およびヴォーリズチャペル
	11月	〔催事〕建築プロムナード
	12月	〔展覧会〕「信濃町往来――建築いま昔」展 〔撮影〕信濃町往来 展示風景
	175枚の図面をデジタル化	
	3月	〔出版〕「慶應義塾の建築 FOCUS No.1 信濃町往来」
2018	10月	〔催事〕建築プロムナード 〔催事〕大学の建築フォーラム：アーカイヴとアウトリーチ

2008	プロジェクト発足（ワーキング・グループ発足）	
2009	3月	〔撮影〕三田南校舎、信濃町別館、幼稚園舎
	5月	〔撮影〕日吉記念館
	6月	〔撮影〕日吉寄宿舍
	7月	〔教育〕慶應幼稚園にてワークショップ
	10月	〔展示〕「谷口吉郎とノグチ・ルーム」展 〔催事〕レクチャー「イサム・ノグチの空間――総合的環境デザイナー（設計者）としてのイサム・ノグチ」 〔催事〕大学の建築フォーラム
2010	1月	〔撮影〕信濃町予防医学棟
	2月	〔撮影〕日吉ヴォーリズチャペル、三田塾監局、三田第一校舎、日吉第二校舎
	3月	〔撮影〕三田塾監局、日吉第一校舎
	10月	〔撮影〕信濃町北里記念医学図書館、三田旧図書館
	11月	〔撮影〕日吉第5校舎
2011	4月	〔撮影〕日吉寄宿舍（リノベーション後）
	9月	〔展覧会〕アート・アーカイヴ資料展 VI 「記憶の南校舎」
	11月	〔撮影〕高輪台小学校
2012	3月	〔撮影〕麻布学園
	4月	〔撮影〕信濃町動物実験棟校舎、日吉第二校舎
	12月	〔催事〕シンポジウム＋見学会「寄宿舍と日吉キャンパスの近代建築」
2013	1月	〔調査〕図面の調査、塾内建築史の文献調査開始 〔撮影〕信濃町6号棟、7号棟
	2月	〔展覧会〕「谷口吉郎と日吉寄宿舍」展
	3月	〔展覧会〕「港区の学校建築 震災と復興」展 〔撮影〕日吉普通部
	225枚の図面をデジタル化	
2014	4月	〔調査〕図面の調査、塾内建築史の文献調査、国内外の建築アーカイヴの事例調査
	9月	〔撮影〕慶應義塾中等部本館
	11月	〔催事〕ノグチ・ルーム ワークショップ 2014 〔調査〕金沢市民芸術村、金沢21世紀美術館。関連シンポジウム、及び見学会に参加。関係者へのヒアリング調査
	383枚の図面をデジタル化	

家新良太氏が、5・6年生全クラスを対象に行ったワークショップの成果です^[図2]。生徒たちにとつては、自分で写真を撮ることで、何年もの間、毎日通ってきた建築が改めて「見えるもの」になるという新しい経験でした。つまり、この展覧会は288人の生徒＝ユーザーの眼を通した建築の展示でもあり、その眼差しがアーカイヴへフィードバックされる機会でもあったといえます。

／シンポジウム「日吉の近代建築」と

「谷口吉郎と日吉寄宿舍」展
二つ目の例は、1938年に竣工した日吉寄宿舍に関する活動です。日吉寄宿舍について、当時の『三田評論』は「寮舎其他の建築装備の最優秀」と誇り、それが「寄宿生の教育の効果」を高めると語っています^[図2]。若い頃に過ごした空間が、建築認識や空間感覚に及ぼす影響は計り知れません。ここには、学校として優れた建築を用意することに教育的意義があるとする大学の自負と意気込みが感じられます。

そんな日吉寄宿舍はしかし、戦争の激化を受けて、開設後わずか7年でまず海軍、ついで米軍に接収されてしまいます。キャンパスが返還されて

からは、1棟だけが寄宿舍として使用されてきました。まず、老朽化への対応と文化財としての保存を図るため、当初、3棟中1棟をリノベーションして残りを解体するプランが立てられましたが、2011年に開催されたリノベーションに関わるワーキング・グループで2棟の残留が提案され、3棟とも残されることになりました。このリノベーションは、竣工当時の諸要素を丁寧に検討して、今日的な大学生の生活の快適さも実現しながら、オリジナルの在り方を伝えようとするものでした。

この改修を事例として、リノベーションの実務担当者や建築の専門家を招き、建築の保存と利用・使用について考えるシンポジウムを開催し、あわせて寄宿舍生が案内する寄宿舍の見学ツアーを実施しました^[図3]。このツアーは、参加者にとっては生きた寄宿舍の姿に出会い、また寄宿舍生にとっては、毎日生活している空間に改めて出会い直す機会



▲慶應義塾幼稚舎×慶應義塾の建築プロジェクトワークショップ

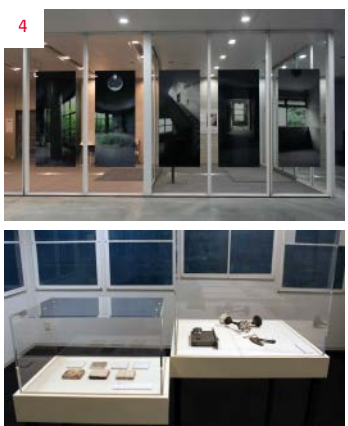
会となりました。

翌2013年には、三田キャンパスのアート・スペースで「谷口吉郎と日吉寄宿舍」展を開催しました^[図4]。この展示では竣工時の図面や記録写真と共に、記念アルバムや各寮が発行していた雑誌や記録などを展示して、寄宿舍生活の有り様もあわせて紹介しました。また、リノベーションについての資料も展示し、時代の変遷に伴って変化する建築の歴史を提示しています。

学校建築は記憶が集積する器であり、多くの人々にとって、記憶をよみがえらせるスイッチとして働きます。だからこそ、その意義についてアウトリーチ活動などを通じて発信し、建築の記憶と人々の記憶をつなぐ努力を怠ってはいけないのではないのでしょうか。このような取り組みはまた、学校の記憶を紡ぎ、学校の、さらには教育の空間を豊かにしていくものでもあるでしょう。



▲シンポジウム＋見学会「寄宿舍と日吉キャンパスの近代建築」



▲「谷口吉郎と日吉寄宿舍」展（2013年）

／近現代建築アーカイブズの保存と活用

文化庁国立近現代建築資料館と国内外の事例から

藤本貴子文化庁国立近現代建築資料館建築資料調査官

／アーカイブズとはなにか

近現代建築アーカイブズと聞いて、何を思い浮かべられるでしょうか。国際公文書館会議によれば、アーカイブズとは「その長期的価値により保存される、人間の活動の副産物である記録物」とされています。アーカイブズに含まれる資料には決まった形式はなく、「Authenticity(真正性)」「Reliability(信頼性)」「Integrity(完全性)」「Usability(利用性)」という質をもち、未来に残すための価値ある資料の総体がアーカイブズと考えられています^[図1]。

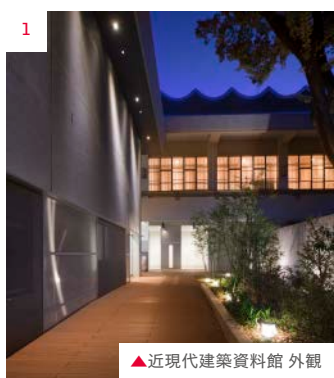
こうした資料を扱う専門家をアーキビストと呼びますが、日本では公的な資格としてのアーキビスト

ト制度はなく、公文書以外の資料には、アーカイブズとしての法的な位置づけもありません。しかしいずれにせよアーカイブズとそれを扱うアーキビストの使命は、資料を適正に管理すること、公正な利用を促進することといえます。

／近現代建築資料館の活動

日本の近現代建築資料を保存する動きは1980年代からありましたが、建築資料の散逸が相次いだことも契機となり、2013年に初の国立の建築資料専門機関として文化庁国立近現代建築資料館（以下「建築資料館」という）が設立されました^{[図2][図1]}。以来、建築資料館は、重要な近現代建築資料の収集保管、展示教育普及、情報収集、調査研究、そしてアーカイブズ機関のもつとも重要な機能である閲覧公開を進めています。資料内容の専門性が高いと利用者は主に研究者になりがちですが、公文書館と同じように、建築資料館の資料も誰にでも等しく開かれています。

もちろん、展示や出版活動を通じて資料への理解を促進させることも、アーカイブズ機関の使命のひとつです。建築資料館では、2018年7月時点で13の資料群を収集・保管しています。収蔵図面総数は約11万3千点で、その他に写真や文書などの資料も多数収蔵しています。大規模な収蔵資料としては、坂倉準三資料、吉阪隆正



▲近現代建築資料館 外観



▲図面フラットニングの様子

点で13の資料群を収集・保管しています。収蔵図面総数は約11万3千点で、その他に写真や文書などの資料も多数収蔵しています。大規模な収蔵資料としては、坂倉準三資料、吉阪隆正

資料、大高正人資料があります。大高正人資料では、試験的になるべく多くの資料を受け入れており、その結果、建築家の資料として考えられるほとんどの種類の資料が含まれているのではないかと考えられます。具体的には図面、スケッチ、写真、スライド、アパチャーカード、都市計画の報告書、事務所書類、雑誌やその抜刷、映像・音声フィルムなどが含まれています。

搬入した資料は基本的に燻蒸し、収蔵庫に移動します。湾曲した図面などは、フラットニング作業のあと番号を付与し、場合によってはデジタル化を行っています^[図2]。フィルム資料は劣化の危険があるため、保存用の中性紙箱にガス吸着シートと共に収納した上で、温湿度管理がされている収蔵庫のドライキャビネットに収納、その他の文書類は保存用箱に入れ替えて保管しています。整理の過程で、国際公文書館会議が定めた記述の国際標準にのっとり、目録の作成も行っています。

大高正人資料については、このような資料整理のあと、2016年10月から2017年2月にかけて、大高の初の包括的な展覧会である「建築と社会を結ぶ——大高正人の方法」展を開催しました^[図3]。大高正人の個展が初めてだったこともあり、この展覧会を機に、建築資料館以外の博物館等での展示が実現するなど、資料の活用が進みました。アーカイブズ機関で展覧会を行う意義のひとつは、収蔵資料の周知とさらなる活用の契機となることだと考えられます^[図3]。

[1] What are archives?

International Council on Archives <https://www.ica.org/en/what-archive> (2016-2012参照)

[2] 設置趣旨 <http://nana.bunka.go.jp/gaiyo/>

[3] 本展の展覧会図録は、オンラインで公開されています。 <http://nana.bunka.go.jp/wp/wp-content/uploads/2017/03/ootata/>

建築資料館は建築資料に特化した唯一の国立機関ですが、収蔵品に建築資料が含まれている機関は国内に多数あります。活用事例の一つに、1981年に設立された京都工芸繊維大学美術工芸資料館があります。同館は村野藤吾の図面資料を所蔵しており、整理作業の成果として15回に及ぶ展覧会を企画しました。これらの展示においては準備・設営・運営を学生が担当しただけではなく、展示品となる建築模型も制作しています^[4]。

日本ではまだこのような例は多くはありませんが、海外に目を転じると、大学が近現代建築資料をアーカイブズとして保存・公開している例は豊富にあります。ルイス・カーンの資料を有するペンシルベニア大学の建築アーカイブズでは、ギャラリー



▲京都工芸繊維大学美術工芸資料館で村野藤吾の設計原図を整理作業する様子
[2007年、提供：松隈洋（京都工芸繊維大学教授）]

スペースで常設展示を行っているほか、大学の授業にも収蔵資料を使用しています。所属教員や卒業生の建築資料を収集するイェール大学のマニスクリプト&アーカイブズでは、授業で学生が資料整理に携わることもあるようです。コロンビア大学のエイヴリー図書館は、大学に関係する資料だけでなく、ニューヨークに関する建築資料も収集しており、建築文化の地域拠点となっています。カリフォルニア大学の環境デザインアーカイブズも、北カリフォルニア地域の建築のみならずランドスケープや環境デザインに関する資料を収集し公開しています。丹下健三の資料を所蔵するハーバード大学や、マサチューセッツ工科大学でも建築資料を保存・公開しています。また有名なロンドンのA.Aスクールにもアーカイブズ部門があり、ドイツでも複数の大学が建築資料を保存・公開していると聞きます^[5]。

大学における建築アーカイブズの展開は、教育という観点から重要で、公共性を持つ機関として、海外での事例のように建築文化の地域拠点ともなりうる可能性があります。眠っている建築資料が日本にまだ多くあることを考えると、慶應義塾大学アート・センターのように自校の建築や資料を文化資源として活用する取り組みが増えていくことを期待したいです。建築資料館のような機関がハブとなって大学の資料活用をサポートしていくことが重要であると考えています。



▲「建築と社会を結ぶ——大高正人の方法」展 会場写真

歴史的建造物が語るキャンパス——文化財三棟（インブリー館・記念館・チャペル）を中心に

桑折美智代（明治学院歴史資料館）

明治学院はプロテスタントのミッションスクールです。明治学院中学校、明治学院東村山高等学校、明治学院高等学校、明治学院大学・大学院を設置しており、2013年に創立150年を迎えました。J.C.ヘボン博士がクララ夫人と、1863年に横浜居留地の自宅で「ヘボン塾」を開設したのが明治学院の淵源です。その後、東京の築地居留地へ移転し、1886年「東京一致神学校」、「東京一致英和学校」、「英和予備校」が合併し「明治学院」という名称が決まります。1887年に設置認可がおりて、築地から白金の地へ校地を移しました。港



▲白金キャンパス シオラマ
(上：1890年頃、下：現在)



▲インブリー館
(上：創建当初、下：解体修復工事後)

区白金台のキャンパスには、インブリー館、記念館、チャペルの文化財三棟が現存しています^[図1]。

インブリー館

学院で教鞭を執っていた宣教師たちの住居で唯一現存する1棟がインブリー館です^[図2]。W.インブリー博士が長年住居としたことから、「インブリー館」と名付けられたこの建物は、1889年頃に木造2階建アメリカ住宅様式で建築されました。設計者は不明ですが、当時のアメリカ建築様式を指導した人物がいたようです。1964年に曳家により現在地に移動、学院の施設として使用されてきました。1995年から約2年がかりで実施した解体修復工事を経て、屋根を除いて創建当初の姿に復元され、バルコニーや煙突も再び見られるようになりました。工事の際、外壁下見板の内側に貼られた創建時の厚紙が発見され、そこに描かれた図

面や道具箱から、日本人大工が建築に携わっていたことが判明しました。

インブリー館は都内最古の宣教師館であるだけでなく、日本国内でも最古期の事例として極めて貴重な建築物であり、日本における西洋風住宅の変遷を知るうえでの基準作と位置づけることができます。現在は学院牧師室、歴史資料館事務室、会議室として使用されており、1998年に国の重要文化財、2002年に東京都「特に景観上重要な歴史的建造物等」の指定を受けました。

明治学院記念館

1890年に神学部校舎及び図書館として竣工したアメリカ・ネオゴシック様式の建築物。大学の正門を入ると右手に見える、1階が煉瓦造りで、2階が木造の外観デザインが特徴的な建物です^[図3]。設計者は不明ですが、当時教鞭を執っていたH.M.ランデイス教授ではないかと考えられています。建設当初は1階2階とも総赤煉瓦造り、屋根は一部スレート葺きとフランス瓦葺きでしたが、1894年の明治東京地震で被災し、2階部分を木造に改築しました。さらに1914年、学内火災の類焼で塔が焼失、1923年には関東大震災で2階の大煙突が倒壊しています。その後、一度は解体が

[4] The Architectural Archives of the University of Pennsylvania
<https://www.design.upenn.edu/architectural-archives/about>
Archives at Yale <https://archives.yale.edu/>
Columbia University Avery Library <https://library.columbia.edu/locations/avery.html>
The Environmental Design Archives at University of California, Berkeley <https://archives.ced.berkeley.edu/>
Harvard Library The Kenzō Tange Archive <http://td.lib.harvard.edu/a/990143792750203941/catalog>
MIT Museum Architecture and Design collection <http://mitmuseum.mit.edu/collection/architecture-and-design>
AA archives <https://www.aarchives.ac.uk/AASCHOOL/LIBRARY/archive.php>

【参考文献】
『明治学院百年史』（1977）、明治学院
『明治学院五十年史』（2013）、明治学院
『明治学院五十年史主題編』（2014）

建物の保存・修復
『明治学院旧宣教師館インブリー館』建物調査報告書（1995）、明治学院旧宣教師館
『明治学院旧宣教師館建物調査報告書』補遺 木構造技術調査報告書（1996）、明治学院旧宣教師館
『明治学院旧宣教師館保存修理工事報告書』（1998）、明治学院旧神学部校舎兼図書館（記念館）建物調査報告書（1999）、明治学院礼拝堂・チャペル 建物調査報告書（1999）、『東京都区指定有形文化財明治学院礼拝堂 保存修理工事報告書』（2008）

その他
『明治学院礼拝堂パイプオルガン更新事業報告書』(Meiji Gakuin Chapel Organ Project Report)（2013）
※発行元はすべて学校法人明治学院

決定されましたが、周囲から保存の声が上がったことに加え、1963年、東京オリンピックに向けた国道1号線拡張に伴う用地買収とともに東京都が建物移築費を負担することになりました。その翌年、インブリー館とともに修理・保存が決まり、曳家され、煉瓦と木造の連繫構造、ステイクスタイルを備えた美しい姿を取り戻しています。

現在は、1階に小チャペルと歴史資料館の展示室があり、2階のかつて図書館だった部屋は大会議室や事務室として使用されています。1979年に「港区指定有形文化財」、2002年東京都「特に景観上重要な歴史的建造物等」に指定されました。

明治学院礼拝堂（チャペル）

学院のシンボルともいべき現在の礼拝堂（チャペル）は、W.M.ヴォーリズによって1916年に建設されました^{図4}。イギリス・ゴシック様式を基調とし、屋根をシザース・トラスで支えています。当時は相次ぐ火事や地震により学院内の礼拝堂が失われており、資材が高騰するなか、少しでも安価で建築できるよう、地震で使用不可能となったミラー記念礼拝堂の資材等を再利用して建設されました。その後、1923年の関東大震災での被災によりバットレス（外部の控え壁）が追加され、学生数の増加に伴って1931年に袖廊の拡張を行っ

た結果、現在の十字架型となりました。

1955年の阪神・淡路大震災をきっかけとした調査で耐震性が不十分であることが判明し、2006年から約2年間保存修理工事が行われました。正面講壇の創建当時への復原、煉瓦積み外壁構造の補強、2階部分へのオルガン設置工事が主たる作業となりました。明治学院礼拝堂は、1989年に「港区指定有形文化財」、2002年に東京都「特に景観上重要な歴史的建造物等」に指定されています。

建築物の継承と活用

文化財三棟の歴史をあらためて振り返ると、度重なる地震や火災に耐え、都心のキャンパス内でこうして現存している事実は、奇跡的なことかもしれません。

文化財の建物調査、保存修理工事でご協力いただいた、故鈴木博之先生（元東京大学大学院教授）は、「大学キャンパスのなかには、経済原理だけではない文化が、今後とも蓄積されつづけてゆくことを期待したい」と述べられました。先人が残してくれた貴重な文化的財産を保存し、研究、教育、文化事業の場として活用し、未来へつないでいくことが文化財と関わる者の責務だと感じています。

学習院大学目白キャンパスの歴史ある建物の保存と活用

富田ゆり・丸山美季（学習院大学史料館）

学習院大学目白キャンパスの概要

学習院は1877年の開校後、神田錦町、虎ノ門、四谷へと移り、1908年に目白へ移転しました。現在では幼稚園と中高等科、大学は目白に、初等科は四谷、女子中高等科、女子大学は戸山にキャンパスを構えています。当時の目白キャンパスの設計プランは文部省技師で学校建築を多く手がけた久留正道が行い、敷地の北西に教室、本館、図書館などの校舎群を、南西に運動場・柔剣道場など運動施設、東に寮、食堂、教官官舎などを配置することで、教育施設ゾーンと居住ゾーンを明確に区別

しました。また正門の正面に、緑地や広場といった空間を配置して圧迫感を軽減し、その奥に図書館と向い合わせて本館、正堂を置きました。建物はほとんど木造で、デザインはシンプルで華美な装飾もなく、学習院の精神でもある「質実剛健」にふさわしい建物でした。関東大震災や戦禍による被害を受けながらも、キャンパスには、明治・大正・昭和・平成と、それぞれの時代を映す建物が点在し、「キャンパス全体が巨大な博物館である」とも言われています。

遺したものの——登録有形文化財7棟

しかし、中にはいつの間にか取り壊されてしまった建物も少なからず存在します。学習院大学史料館では、キャンパス内の建物について見直す必要性を感じ、1999年に東京理科大学工学部建築学科・伊藤裕久教授に建物調査を依頼。それを契

機に、歴史的建造物が持つ「記憶」を後世へと継承するための広報活動を開始し、展覧会を企画したり、広報誌などでとりあげるようになりました。2009年学内の7つの建物が国登録有形文化財に登録されたことで、ようやく保存活用が認識されるに至りました^{図1}。

1. 正門 1908年 設計…久留正道
2. 総寮部（乃木館）1908年 設計…久留正道
3. 厩舎 1897～1907年頃か？
4. 旧図書館（史料館）1909年 設計…久留正道
5. 旧皇族寮（東別館）1913年 設計…宮内省内匠寮
6. 旧理科特別教場（南1号館）1927年 設計…宮内省内匠寮
7. 旧中等科教場（西1号館）1930年 設計…宮内省内匠寮、権藤要吉

* ○内は現在の建物名称

◀登録有形文化財7棟。1 正門 2 総寮部（乃木館）3 厩舎
4 旧図書館（史料館）5 旧皇族寮（東別館）6 旧理科特別教場（南1号館）7 旧中等科教場（西1号館）



▲明治学院記念館
（上：創建当初、下：創立150周年時）



▲明治学院礼拝堂
（上：関東大震災後、下：現在）



／守れなかったもの——ピラミッド校舎／
「ピラ校」の愛称で親しまれた学習院大学のシンボリックな建物「中央教室（ピラミッド校舎）」は、1959年に始まる、建築家・前川國男の大学キャンパスプランの中で誕生しました^{図2}。前川は、昭和初期のネオ・ゴシック様式の校舎でL形に囲われた広場の中心にピラミッド型（四角錐）の大教室棟を、その周囲に本部棟^{図3}などの3校舎群を配置しました。このキャンパスプランを始めるにあたり、



▲中央教室(ピラミッド校舎)

かつて久留正道の掲げた「質実剛健」を継承し「安い絹ではなく、丈夫な木綿を着よう」を合言葉に、簡素な中にも現代的でアカデミックな学園の実現を目指して設計を進めました。前川は、ピラミッド型の校舎について「すこしばかりデッカイ庭石が据えられたと御考へいただければよいかと存じます」と語ったと言います。まさに龍安寺の石庭にある石のように、建物を設置することで、その周囲に生まれる「間^ま」のような外部空間の造形をテーマにしようと試みたのです^{図4}。

過去の建物による空間構成を活かしながら完成させた前川のプランは賞賛され、当時の建築雑誌などに度々紹介されました。特にピラミッド校舎の内部は、宗教建築を思い起こさせるような圧倒的な迫力をもっていました^{図5}。ここは、教室としてだけでなく、式典などの公式行事や、演劇や講演会の舞台としても利用されました。また、授業の



▲本部棟内部

合間や放課後に学生が集う、まさにキャンパスのオアシスとも言うべき存在でした。
しかし、このピラミッド校舎群は学生数や学部編成の変化などの諸事情により解体を余儀なくされました。当館では、校舎の「記憶」を少しでも遺したいという思いから、解体過程の定点撮影、廃棄部材の保存、見学会や講演会などを企画しました。イベントの開催にあたっては、学内の他部署にも協力を呼びかけたり、卒業生のネットワークを最大限に利用し、その成果を『学習院キャンパス写真集 ピラミッド校舎の記憶』前川國男作品・中央教室』としてまとめました。

／未来つなぐ取り組み

最後に、史料館の学芸員が歴史的建造物を守り伝え、活用するために行ってきた活動の中から、キャンパスツアーとアーカイブズ・記録化の取組についてご紹介します。

「キャンパスまるごとミュージアムツアー」では、学習院の歴史を説明しながら、敷地内に分散している建物や石碑、自然を、学習院の歴史を語るうえで欠くことはできない「ミュージアムピース」として案内しています^{図6}。建物の外観や特徴を説明するだけでなく、参加者がその中を実際に歩き回って外を眺めたり、部材に触れたり、建築空間を体感できる機会となっています。建物以外の歴史的な見どころや緑豊かな学校環境に触れることがで



◀前川國男によるキャンパスプラン



▲中央教室 内部



▲キャンパスまるごとミュージアムツアー

きるこのツアーは、大変な好評を得ています。

建物の登録有形文化財指定を記念して刊行した『学習院 目白の学び舎——学習院の歴史ある建築』では、登録有形文化財7棟のほか、学習院にゆかりのある他所の建物や、歴史的な写真、図面などを紹介するだけでなく、実際に建物を使用していた卒業生・教員のコラムや対談を掲載しています。

また、『学習院南1号館』は、国登録有形文化財の校舎の改修工事の全記録です。竣工当初の外観や内装を復原し、貴重な遺構を保存しながら、バリアフリー化や耐震工事などの「現代化」を施し活用につなげてゆく過程が、設計担当者や現場担当者の声、写真、図面などによって紹介されています。

また「学習院大学史料館紀要」（第22号、第24号）にも建物の調査結果を収録しています。近年

では、今上陛下（当時皇太子明仁親王殿下）ゆかりの寄宿舎であった小金井清明寮（1946年）と目白清明寮（1951年）についてまとめました。

こうした刊行物や広報誌の無料配布、またツアーの開催は、在学生の愛校精神を育くむことにつながり、また教職員、卒業生などの大学関係者にもちろんのこと、近隣地域及び一般の人々に、伝統を重んじながらも開かれた大学を目指す学習院の歴史と魅力をアピールする重要な機会となっています。アーカイブを残す間もなく解体された建物に関する設計資料や写真の収集、卒業生からの聞き取り調査による建物の記録化を進めると共に、保存に対する意識を高める取り組みを今後も続けていきたいと考えております。

【参考文献】

- 1 『学習院キャンパス写真集 ピラミッド校舎の記憶：前川國男作品・中央教室』（学習院大学史料館、2008年）
- 2 『学習院 目白の学び舎：学内に遺る歴史ある建築』（丸善プラネット、2010年）
- 3 『学習院南1号館：再生した旧理科教場』（丸善プラネット、2013年）
- 4 「ミュージアムレター」 キャンパス案内号、No.24南1号館特集、No.29小金井清明寮特集
- 5 『学習院大学史料館紀要』（第22号2016年）、（第24号、2018年）

- 1, 4, 5 無料配布。学習院大学史料館（03-5992-1173）に直接お問い合わせください。
- 2, 3 全国の書店にて販売中

【図版出典】

Fig. 4：『新建築』（1960年10月号105ページ）より
その他：学習院大学史料館提供

ギャラリーから考える公共性

日本橋から竹橋へ／40年の対話

今回の都市のカルチュラル・ナラティブは「ギャラリーと公共性」と銘打ち、40年近くに渡って港区で活動してきた横田茂ギャラリーの活動を紹介した。竹芝にあるギャラリーは2ブロック離れた旧所在地から今年度移転したばかりで、吹き抜けの広い展示スペース

はギャラリーというより海外美術館の一室を思わせる。本稿は2019年2月8日に行われた同ギャラリーのバックヤード見学ツアーと、ギャラリーのオーナーである横田茂と慶應義塾大学アート・センターの渡部葉子による対談のレポートである。



▲旧ギャラリーの窓から湾を臨む

アート・センターの本間氏の冒頭言によれば港区は14を超えており、これは他の都道府県レベルの自治体と比べても多いそうだ。しかしながらその展示以外の活動を目にする機会は意外と少ないのではないだろうか。ギャラリーが持つこうした文化的なリソースを新たに発見することが今回の企画の眼目である。

横田茂ギャラリー、

東京パブリッシングハウス、JCR I
続いて、東京パブリッシングハウスの代表をつとめる横田聡氏からは、ギャラリーとギャラリーから派生した東京パブリッシングハウス（TPH）、特定非営利活動法人Japan Cultural Research Institute（JCR I）の活動が紹介された。ギャラリーは1976年に日本橋の古美術商、瀬津雅陶堂の地下の一角で雅陶堂ギャラリーをオープンし、1982年に浜松町駅近くの竹芝の倉庫に移転した。さらに平成元年、1989年に横田茂ギャラリーとして新たに活動を開始した。再開発を経る以前の竹芝は倉庫の並ぶ人通りの少ない地区だったというが、横田氏が中心地である日本橋から竹芝に拠点を構えたのは、倉庫街という活き活きとした日常空間で芸術作品を展示したいと願ったからである。今回新たにギャラリーが移転した建物も元はバブル時代に賑わったナイトクラブで、変転著しい竹芝の二側面を今に伝えている。また書籍や印刷物を中心に扱うTPHは1991年に設立され、横田茂ギャラリーとは違う独自のプログラムで活動し、アーティストの言葉や写真を公刊、展示してい

る。設立当初は美術館に海外館のカatalogや20世紀美術の雑誌等を納めていたが、次第に書籍や写真といった複製物を独自に取り扱うようになった。作品としてのポートフォリオやアーティストブックの出版、印刷物やエディション版画等の展示も担っている。

ギャラリーではさらにアトリエ・マテリアルの収集・展示も行っており、若林奮や村上友晴、中西夏之の資料を所蔵している。こうした戦後美術の重要作家の名前を見るにつけ、このギャラリーが果たした役割の大きさを実感させられる。またJCR Iは、日本の文化を自身の語彙で発信すると

いう設立理念のもと、助成事業、主要なアーカイヴとその特徴をリスト化した「Archive@アーカイヴ・ダイレクトリー」の作成、ギャラリー・アーカイヴの構築などの活動を行い、アーカイヴが未だ定立していない戦後日本美術の領域において、貴重な資料群を公共の場に供するための作業が行われている。ギャラリーは作品の展示・売買といった経済活動の場と思われがちだが、実際には作品や出版物、研究活動などを通じたより広い「公共性」を担う場所であることが改めて確認され、イベントはギャラリー内の案内へと移った。

▲バックヤード・ツアー——展示を支える「舞台裏」
ギャラリー紹介では3つのグループに分かれ、メインの展示スペースとそれを上から見下ろせる2階部分、そしてバックヤードが順に紹介された。元々ナイトクラブが入っていたという建築は一部の構造体を残して壁やバルコニーが取り払われ、壁に新たに切り込まれたスリットから自然光が差し込んでいる。扇型の展示スペースはそこがかつて舞台だった時の名残を見せるが、絵画だけでなく映像や彫刻、あるいはパフォーマンスなど様々な作品に対応するためにあえてこのように残したのだという。展示にはこの日のイベントにも参加していた河口龍夫氏による宇宙と時間をテーマにした作品《COSMOS》のほか、白石由子のキャンバス作品《Out There》、また作品として出版された同氏による四角レコード《SPECIMEN》なども鑑賞することができた。



▲ギャラリーツアー



▲メインの展示スペース

バックヤードはギャラリーの展示を支える心臓部とも言える箇所。作品庫と書庫、アーカイヴ・マテリアルの所蔵庫には作品の梱包材や展示台も取められ、展示活動を支える裏方道具が揃っている。すでに書籍で一杯になった書庫はもともとダンサーの控え室で、かつてはロシア語の張り紙がそのままにされていたそうだ。再開発が続く竹芝だが、今でもこうしたふとした箇所にかつての面影が残っているのかもしれない。1万ほどある蔵書のうち、海外カタログを中心とした半数以上は2階の展示スペースにディスプレイされている。

旧ギャラリーにあったロフトを参考にしたという2階部分には、エミコ・サワラギ・ギルバートや福島秀子らの作品（《Water Bar》《五月の振動Ⅱ》）が並び、吹き抜けの1階展示スペースも見下ろすことができる（図4・図5）。2階の屋外テラスへと出ると、芝生の上に置かれたアブラハム・デヴィッド・クリスチャンの彫刻《無題》が恒久展示されている。公共彫刻としても意図されたこの作品は、ゆりかもめからも見える位置にあり、文化施設としてのギャラリーから地域へのメッセージになっているという（図6）。横田氏が日本橋から移転するにあたって港区を選んだのは、海や道路、空港に囲まれた物流の中心地という意味もあったそうだ。



▲2階ギャラリー



▲2階から見下ろす1階展示スペース



▲2階の屋外テラス アブラハム・デヴィッド・クリスチャン《無題》

／ギャラリーと公共性／

横田・渡部両氏による対談は横田氏からの提案もあり、Q&A形式でギャラリーのこれまでの活動を振り返る内容となった。まず「公共性」というテーマに関して、渡部は「オフィシャル」であることと「パブリック」であることの区別を今一度確認し、その上で現代美術が市民や公共に対して果たす役割について尋ねた。横田氏は「現代」は当然、いつの時代にもあり、その意味でいま「現代美術」と呼ばれている作品に限らず美術とはそれぞれの時代精神や世界観を示すものだと言え、さらにギャラリーはメッセージの発信者としての芸術家と公衆との間にあつて、お互いを仲介するものだと言っ

た。公共というと多くの人に伝達することと捉えられがちだが、一人だけに見せることもまた公共性なのではないか、という横田氏の発言が印象的であった（図7）。

アーティストとの関わりについても、一つの作品や展覧会を孤立して取り上げるのではなく、常に彼らの制作や視点全体を意識しているのだという。芸術家にとって日常である作品制作に対して、ギャラリーも日常としてそれに「淡々と」付き合っていくという姿勢は、出来事を歴史やムーヴメントへと編成する美術館や美術史の営みとは対照的にも思える。

またTPHを設立したきっかけについて問われると、ギャラリーと同様に自身の印刷物へのプライベートルな関心、「簡単にいえばわがまま」が根本にあるのだと冗談めかした。しかし「公共性」に関して、出版物はギャラリーの物理的空間とは異なる公共的空間を作り出せるのではないかと語った。作品としてのアーティストブックや記録としてのカタログを通じて、一過性の展覧会とは違った仕方方でメッセージを伝えられる点にTPHの強みがある。その意味でTPHは単にギャラリーの印刷物部門としてだけでなく、アーティストのメッセージを伝えるためのもう一つの場として機能しているようだ。さらに渡部は横田氏との以前の対談に触れ、日本と海外の出版文化の違いにも言及した。海外のアーティストがカタログをある程度の部数出版し多くの人に行き渡るように、また情報にアクセスで

きるようにしてきたのに対し、日本では少数のお手製アーティストブックが多かったのだという。こうした出版物と公共性の問題は、残念ながら時間の問題もあり短く言及されるに留まったが、日本と海外の公共性の違いを考える上で興味深い点ではないだろうか。

対談の最後には芸術家との「キャッチボール」が改めて話題となった。意外にも横田氏は芸術家を積極的に探しているのではないのだと語り、芸術家との出会いを男女の出会いにも喩えた。そして芸術家が投げる「ボール」を拾って彼らの考えることを実現するまでに、2年や3年かかることも普通だという。質疑応答では、会場にいた河口氏から作家としてご発言いただき、作品が公開されることで生じる社会性のほか、横田氏が当時須磨のア

トリエまで訪ねてきて一緒にカラオケ（！）にいったことなど、個人的なエピソードも語っていた。およそ40年にわたってギャラリーを営んできた横田氏だが、ギャラリーを始めた当初から展覧会やギャラリーのあり方に関して疑問を持っていた。今のギャラリーは手探りでやってきたことの積み重ねで、あくまで個人的な一例だと断りを入れた上で考えを語った。しかし公共性という問題がそもそも市民同士のコミュニケーションに関わるのであれば、作品や作家との偶然的な出会いや個人的なコミュニケーションこそ、その出発点となるのではないだろうか。ギャラリーは個人的な出会いを介して公共性へと至る場なのだと言って浮き彫りになったことと思う。



▲対談「ギャラリーと公共性」

禅宗寺院の学問と文化

堀川 貴司
(慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫 教授)

LECTURE

本稿は、「学問・文化プラットフォームとしての寺院・泉岳寺と禅の文化」(2018年11月18日、泉岳寺)での講演をもとに、講演中で紹介された資料の情報や図版などを加え、編集したものである(ARTFACT編集部)。講演会の開催概要は、2ページを参照。

はじめに——金閣と銀閣

室町時代を象徴する建物といえ、鹿苑寺の金閣と慈照寺の銀閣でしよう。

鹿苑寺はもともと三代將軍足利義満の別荘「北山殿」として作られ、彼の死後、遺言により寺院となりました。一方、慈照寺は八代將軍足利義政の隠居所「東山殿」でしたが、こちらも死後に寺院に改められました。

日本の文化の歴史のなかで、義満の時代を「北山文化」、義政のそれを「東山文化」と呼んできたのも、この二つの場所がそれぞれの文化の中心地だったからですが、その中でも、太陽と月のごとく、見事な好対照をなしている金閣と銀閣は、さらにその象徴的存在です【[1](#)】【[図2](#)】。

ここで注目したいのは、両者がともに禅宗寺院であり、しかも五山の二つ相国寺の塔頭(附属寺院)

であるという点です。「五山」と「塔頭」、この二つの言葉は今回のキーワードとしてこの後詳しく説明することにして、ここでは、室町時代の文化の中心に禅宗が存在し、最高権力者であった將軍がそれを大事に保護していた——金閣・銀閣はその象徴でもある、ということを知っておいてもいいと思います。

1. 禅宗と五山

「五山」とは？

五山の「山」とは寺院のことです。中国の禅宗寺院は多く山の中に開かれたため、正式の寺院名のほかに、その山の名が通称として用いられました。では「五」とは何か。中国の禅宗は6世紀以降しだいに勢力を伸ばし、12世紀になると、支配者階級との結びつきを深めていきます。その結果、首都の杭州(臨安)およびその近くの貿易都市である寧波(明州)にあった五つの有力寺院が選ばれ、国家の保護を受けるとともに、皇帝と国家の安泰を祈願することを義務づけられ、またその住持(寺



▲金閣



▲銀閣

院を代表する僧)は皇帝によって任命されることとなりました。この制度が鎌倉時代に導入され、室町時代に完成したのが、日本の五山です。

日本の禅宗

日本における禅宗という宗派は、鎌倉時代に誕生しました【[A](#)】。

禅宗においては、師匠から弟子へと、直接教えを伝えることを最も重視しますので、中国人の禅僧が日本に来るか、日本人の禅僧が中国に留学するか、どちらかの手段によって教えを継承する必要があります

あります。そのため、既にさまざまな流派に分かれていた中国の禅宗が、この二つの手段によって次々と日本にもたらされることになります。

道元(1200-153)の開いた曹洞宗の布教が当初北陸地方に限定されていたのに対し、栄西(1141-1215)の開いた臨済宗は、栄西以後も留学僧・来日僧が多く、それらの人々が権力者と結びつき、日本の中心地に大寺院を建立していきます。最新の中国文化を移入する場となったこれら禅宗寺院を、中国に倣って、文化・経済両面において権力を支えるものとして位置付けようとしたのが五山です。

日本の五山

13世紀の鎌倉幕府、建武の新政の後醍醐天皇も五山を定めようとしたが、本格的な取り組みは室町幕府によって行われ、さまざまな変遷の後、三代將軍足利義満の時代にほぼ現在の形に定まりました。14世紀末に確定した五山寺院は下表の通りです【[B](#)】。

京都のみ六ヶ寺あるのは、義満の時代に相国寺が創建され、五山に追加されたためです。ただし、万寿寺は文化的な活動においてあまり実績がなく、これを除いた五ヶ寺を京都五山と見なしてもそれほど不都合ではありません。

また、これも中国を模倣して、五山の下には京都を中心に十刹、その下に全国各地に諸山というランク付けをされた寺院が置かれました。

なお、京都大徳寺・妙心寺のように、同じ臨済宗

	京都	鎌倉
五山之上	ずいりゅうざんたいへいこうこくなんぜんぜんじ 瑞龍山太平興国南禅寺 (南禅寺)	
五山第一	れいきざんでんりゅうしせいぜんじ 霊亀山天龍資聖禅寺 (天龍寺)	こぶくざんけんちようこうこくぜんじ 巨福山建長興国禅寺 (建長寺)
五山第二	まんねんざんしょうこくじようてんぜんじ 万年山相国承天禅寺 (相国寺)	ずいろうざんえんがくこうじようぜんじ 瑞鹿山円覚興聖禅寺 (円覚寺)
五山第三	とうざんけんにんぜんじ 東山建仁禅寺 (建仁寺)	きこくざんじゆふくこんさうぜんじ 亀谷山寿福金剛禅寺 (寿福寺)
五山第四	えにちざんとうふくぜんじ 慧日山東福禅寺 (東福寺)	きんぼうざんじようちぎ 金宝山淨智寺
五山第五	まんじゆぜんじ 万寿禅寺 (万寿寺)	とうかざんじようみようこうりぜんじ 稻荷山淨妙広利禅寺 (淨妙寺)

▲五山寺院

の大寺院でも五山の枠外にあるものを「林下」と呼びました。曹洞宗の本山である永平寺・総持寺もそうです。これらも中世における禅宗文化の担い手として重要です。

このなかで、室町幕府にとっても最も重要な寺院は相国寺です。三代將軍足利義満は、南北に

分かれていた朝廷の合一、有力守護大名の討伐など、争乱を平定するとともに、朝廷の内部においても地位を確立し、武家・公家両方の権力を統合しました。また、明や朝鮮との外交関係を確立させ、貿易による利益を幕府の財源にしました。そのような権力の象徴として、京都の中心部、幕府にも朝廷にも近接した場所に、明徳3年(1392)、相国寺を完成させました。壮大な伽藍を誇り、特に七重塔は、寺塔としては日本史上最も高いものだったといえます。この中の鹿苑院という塔頭には、五山全体を統括する僧録司という幕府の役所も置かれ、住持の人事を担当しました【[C](#)】。

相国寺は幕府の宗教政策の一部を担う公的な存在であるとともに、將軍家の葬儀・法要なども行う、將軍家の菩提寺という役割も果たしていました。鹿苑寺・慈照寺という、將軍の私邸から出発した寺院が相国寺の塔頭になっているのも、そのような深い関係があるためです【[D](#)】。

なお、江戸時代に入ると、徳川家康によつて、僧録司は南禅寺の塔頭金地院に移されます。また、幕府との連絡のため、同じ名前の塔頭が江戸にも作られます。これが、現在の芝公園にある金地院です。

附属寺院としての塔頭

ここまで、「塔頭」という言葉を何回か使ってきましたが、ここで詳しくその意味を説明しましょう。この言葉は「塔」に接尾語「頭」が付いた熟語

【A】 禅に関する展覧会も折々に開催されています。近年では、2016年に『禅——心をかたち』が京都国立博物館、東京国立博物館で開催されました。展覧会カタログには、禅にまつわる作品が一堂に紹介されています。建仁寺をはじめ、ここにあつた禅寺の簡潔な説明や用語解説もあります。『臨済禅師1550年白隠禅師250年遠諱記念 禅——心をかたち』(京都国立博物館、東京国立博物館、日本経済新聞社文化事業部編集、日本経済新聞社発行、2016年)。

【B】 今回の講演中には、沢山の寺院が登場します。無くなつてしまつた寺院もありますが、いまも訪れることができる場所もあります。試みに、寺院の場所をマッピングした地図を作ってみました(<http://art-ken.ac.jp/cmap19>)。

【C】 鹿苑院は、明治時代に廃絶してしまいましたが、近年、遺構が同志社大学今出川キャンパスで見つかりました。同志社大学における発掘調査の概要は、「相国寺旧境内の発掘調査——同志社大学今出川キャンパス整備に伴う発掘調査——」(2010.11.27、同志社大学今出川キャンパス整備に伴う発掘調査委員会・歴史資料館)で紹介されています。

で、意味は「塔」と同じです。「塔」とはサンスクリット語の「ストウパ」を似た発音の漢字に置き換えた「卒塔婆」の省略形で、本来は釈迦の遺骨である仏舍利を収めた塚や建物を指します。奈良や京都の大寺院にある三重塔や五重塔はその系譜に連なるものです。この意味が次第に広がり、僧侶の墓を指すようにもなりました。

特に禅宗は、先ほども言ったとおり、人から人へ直接教えを受け継いでいくことを重視しますので、師匠の死後も、その墓を塔として大事にし、弟子たちが、その塔を守るためにその側に建物を建てました。それが塔頭です。しかし日本では、住持を退いた後の隠居所として、生前から塔頭を建設する習慣が早くから行われたため、室町時代にな



▲相国寺



▲兩足院

ると、五山寺院にはそれぞれ数十もの塔頭が存在するようにあります。

本来、禅宗寺院においては、住持およびその身の回りの世話をする侍者以外の修行僧は、僧堂という建物で共同生活するのが決まりでしたが、塔頭が増えてくると、それぞれの塔頭で修行僧を抱えるようになります。修行を終えた僧はそこから他の寺院の住持となるなどキャリアを重ね、最後に五山寺院の住持を終えると、もとの塔頭に戻ってくる、というライフサイクルが普通になっていきます。時代が下ると当然二つの塔頭からの出身者が増えてきますので、新たな隠居所が必要になり、塔頭のなかにさらに小さな塔頭が作られます。このような塔頭の附属施設を寮舎と呼んでいます。

塔頭や寮舎の建設や維持にはお金がかかりますので、それぞれに大名や貴族、あるいは大商人などの特定の後援者が付くことが多く、彼らは経済的な支援のみならず、自分の家の子弟を送り込むこともありました。その具体例を次に見てみたいと思います。

2. 塔頭の学問と文化 ——建仁寺兩足院を例として

建仁寺

京都五山のひとつ、建仁寺は、京都における最も古い禅宗寺院です。建仁2年（1202）、鎌倉幕府第二代将軍源頼家の支援により、栄西が開きました。相国寺が幕府と深く結びついて、政治の面でも大きな役割を果たしていたのに対し、建仁寺は文学活動が盛んで、優れた詩人や学者を多く出しています。京都ではいつ頃からか、禅宗寺院の特徴を「〇〇づら」（づら＝つら、顔の意）という言い方で表します。相国寺は「声明づら」と呼ばれます。声明とは、儀式の時に禅僧たちが歌う歌のことです。将軍家の菩提寺として、葬式や法事を頻繁に行う、という特徴を見事に捉えています。それに対して建仁寺は「学問づら」。勉強ばかりしている、という、これも少し皮肉めいた呼び方です。

兩足院の成立

「学問づら」の建仁寺のなかでも特に重要な塔頭が、14世紀から現在に至るまで、書物を中心に貴重な文化財を伝えている兩足院です^{[*][図4]}。

龍山徳見（1284-1358）は、現在の千葉県の武士千葉氏の出身で、鎌倉五山で修行した後中国に渡り、45年間も滞在、その間に中国の禅宗寺院の住持も務めました。帰国後は建仁寺・南禅寺・



▲歌川広重《名所江戸百景 日本橋通一丁目略図》
（国立国会図書館蔵）

一方、知足院には、龍山が帰国の時、中国から連れてきた林淨因の子孫が多く入っています。この家は奈良で饅頭屋を営み、その子孫が現在も和菓子のお舗、塩瀬総本家として続いています。無等の弟子である文林寿郁も林氏出身で、彼は建仁寺住持引退後、知足院から分かれて新たな塔頭を開きました。これが兩足院です。

塔頭の存続条件

このような歴史を見ると、塔頭が続いていくには、経済的な面と学問的な面との両方が必要ながことがわかります。学問的な面で言うと、優れた能力の持ち主がいて、師匠の学問を継承していくことが大事ですが、そのときその支えになるのは書物です。中国から輸入されたもの、日本で出版されたもの、あるいは写本でしか流通していないものを入手し、または自分たちの手で写して、学問的な情報を蓄積していくことが、次の世代に学問を伝えていくためにも欠かせない営みでした。しかし、書物の入手にはお金が必要です。手で写すにも、紙や筆・墨を用意する必要があります。つまり、学問的な面の継承も、経済的な裏付けが無ければ成り立たないわけです。

ヒト・モノ・カネの三つが揃って、初めて塔頭は長く存続していくのです。

兩足院の場合、その前身の塔頭には、美濃の東氏と奈良の林氏という二つの家から継続的に子弟が入っていました。東氏は地方の武士ですが、和

天龍寺の住持を歴任しましたが、建仁寺では義堂周信・絶海中津という、五山文学を代表する二人の僧に学問的な指導を行っていて、建仁寺の学問的伝統の出発点となっています。最後は建仁寺において亡くなりました。

彼の死後、二人の弟子が建仁寺の住持を務め、引退後それぞれ塔頭を開きました。一庵・麟の開いた靈源院と、無等以倫の開いた知足院です。いずれも形式上龍山徳見を初代としています。

靈源院には、龍山と同じ千葉氏の一族である、美濃（現在の岐阜県）の東氏の子弟が多く入っています。建仁寺の学問や文学において最も重要な人物のひとつ、江西龍派や、15世紀半ばに中国に使節として派遣された九淵龍琛、少年時代の一休宗純の学問の師匠である慕哲龍攀などがここで活躍しました。

江戸時代の兩足院

江戸時代には、京都の有力商人である大村家がパトロンとなりました。屋号を白木屋といい、江戸に呉服屋を開き、明治以降は各地に百貨店を開きました。東京では現在のコレド日本橋の場所にあったことは、ご存じの方もいらっしゃるでしょう。そういう援助も得て、引き続き学問的な蓄積が続けていきます^[図5]。

[1] 以下、兩足院に関する記述は、先代の御住職伊藤東慎師の著作『黄龍遺韻』（兩足院、1957年）に基づいています。

[2] 対馬における拠点となったのは「以訂庵」。以訂庵の名前は、慶應義塾が収蔵する「対馬藩藩主宗家文書」の資料の中にも見つかることができます。対馬藩藩主宗家文書は、江戸時代、朝鮮国との外交・貿易を独占的に担った対馬宗家において作成された古文書。古記録約1500点で、うち895点が「対馬宗家関係資料」として重要文化財に指定されています。

歌の世界でも「古今伝授」という『古今和歌集』の秘伝を継承する人物を出すほど、文化的教養を持つ家でした。林氏も、残された系図を見ると、医学・書道・音楽・茶の湯などに才能を発揮した人々が多く、そのような文化的な雰囲気のおかげで育った人が、禅僧になって学問を修めるのは自然なことだったでしょう。彼らは、人的・経済的に禅宗寺院を支えることによって、室町時代の文化を維持発展させるのに貢献したのです。

蔵書調査で感じること

慶應義塾大学の附属研究所である斯道文庫からは、研究者が毎年定期的に両足院の蔵書の調査に回っています^[E]。調査のときにいつも感じるのは、歴代の住持たちが、常に蔵書を充実させていく努力を惜しまなかったということです。16世紀から19世紀にかけて、その時々住持が入手したり写したりした書物が積み重なって現在の両足院の蔵書が形成されたのだということを、調査に行くたびに実感します。たとえば、蔵書の中には、塔頭の中で漢詩の会が開かれ、住持と修行僧たちが一緒に詠んだ作品が記録されているものもあります。また、さまざまな書物から特定のテーマに関する記事を抜き書きした写本、いわばデータベースのような書物も伝わっていて、当時の勉強の様子が偲べれます。そういう書物の場合、最初に作った住持から次の住持へと書物が引き継がれていく過程で内容の増補が行われます。中には、三代にわたって増補されている

ものもあります。筆跡から、これは誰が書いたものだろう、と推定するのも、その書物の成立年代や成立事情を知る上で重要なことです。

両足院の現在

現在、両足院は季節ごとに拝観日をかけて、建物や庭を公開しています。また、座禅やヨガ、あるいは講演会・展覧会などの催しも積極的にを行っています。境内には大村家から寄贈された茶室が二つあり、お茶会もよく行われています。充実したホームページを御覧頂けば、その様子がわかります^[*2]。また、斯道文庫の教員が中心となって作成した、日本の古い書物や文化を紹介するオンライン講座「古書から読み解く日本の文化(2)漢籍の受容」では、冒頭のイントロダクションを両足院で撮影させて頂きました^{[*3][図9]}。

現在の建物は幕末に建てられたものです。冬などは、板敷きの廊下や縁側を歩くと、靴下をはいていても足が凍るように冷たく感じます。修行僧たちはもちろん、ここを裸足で歩いていたはずです。調査に伺うと、そういった昔の生活に思いを馳せることもあります。

書物を通して見る禅宗文化・センチュリー文化

財団寄託品展覧会「禅僧の書と書物」

さて、2018年11月12日から12月14日まで、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて、斯道文庫とアート・センター、それに慶應義塾図書館の三つが

共同で、「センチュリー文化財団寄託品展覧会『禅僧の書と書物』」を行いました。

センチュリー文化財団は、出版社の旺文社を創業した赤尾好夫氏が、日本の文字や書道に関する文化財を収集して後世に伝えようと、研究や教育に役立ててもらいたい、という意図で設立した組織です。現在、収集品の多くは慶應義塾大学に置かれていて、将来的には全てが寄贈されることになっています。この資料を中心として、毎年展覧会を開いています。2018年は「禅僧の書と書物」というテーマですので、今回のテーマと深い関係があります。そこで、展覧会に出品されている作品をいくつか紹介してみたいと思います^[E]。

1. 増刊校正文狀元集注分類東坡先生詩^{ぞうかうかうせいしゅうげんしゅうぶんしゅうし} 20巻後集10巻〔宋末元初〕刊^[図7]

中国で出版された版本で、北宋の文人政治家蘇軾(1036-1101)の詩を内容別に細かく分類し、注釈を加えたものです。蘇軾は、五山僧たちが最も好んだ詩人でしたので、その詩集はこのように輸入されただけでなく、日本でも出版されています。この本の特徴は、御覧の通り、筆でたくさん注記が書き入れられていることです。もともとこの書物の余白だけでは足りなくなり、本をばらばらにして大きな紙に貼り付けてふたたび製本し、注記を追加しています。さらに、余白だけでは間に合わないで、別の紙に書いて貼り付けたり綴じ込んだりしています。五山僧の学問の様子がよくわかる書物です。

4. 渡唐天神図(愚極礼才賛)〔至町〕^[図10]

「渡唐天神図」と呼ばれる絵画です。学問の神様菅原道真(845-903)は、死後たたりをなしたため、神様として祀られ「天神」と呼ばれるようになりましたが、この天神は普通とは違って、中国風の衣装を着け、袋を掛け、梅の枝を持っています^[G]。これは、不思議な伝説に基づきます。それは、中国の禅僧無準師範のもとに天神が弟子入りし、教えを受け継いだという証拠に袈裟を与えられた、というものです。無準は13世紀前半に活躍した僧侶ですが時間も空間も飛び越えた師弟関係ということになるのですが、それがそが奇跡であるということで、15世紀以降大流行します。この作品の上部に書かれている文章は、無準の弟子で東福寺の開山である円爾から勧められて天神は無準の弟子になったという話になっていて、どうも

^[2] 両足院
https://ryosokuin.com/

^[3] 慶應義塾大学は、イギリスに本部がある「e-line-learn」という、インターネットを通じて大学の授業を世界に公開する組織に参加して、オリジナルのコースを制作しています。「古書から読み解く日本の文化(2)漢籍の受容 Sino-Japanese Interactions Through Rare Books」は、この取り組みの一つです。他にも、「古書から読み解く日本の文化(1)和本の世界 Japanese Rare Culture Through Rare Books」の2コースを制作しています。慶應義塾大学におけるコース開発については、高信彰徳「FutureLearnプロジェクトにおけるオンラインコースの開発」慶應義塾大学DMC紀要 4(1) pp. 34-41, 2017. 3、慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター (https://e-nii.ac.jp/aiat/2006312475/)

^[E] 調査にあたって撮影された写真は、マイクロフィルムとして保存されています。2009年までの撮影分は「慶應義塾大学附属研究所斯道文庫撮影建仁寺両足院蔵書マイクロフィルム目録初編」(https://e-nii.ac.jp/aiat/20004770626)によって知ることができ、慶應義塾大学学術情報リポジトリ KOARAよりダウンロードでき、http://koara.lib.keio.ac.jp/

^[F] センチュリー文化財団寄託品展覧会「禅僧の書と書物」出品作品全点の解説を掲載した展覧会カタログも発行されています。



6 ▲FutureLearn「古書から読み解く日本の文化」コース イントロダクション



7 ▲増刊校正文狀元集注分類東坡先生詩(斯道文庫蔵)



8 ▲続新編分類諸家詩集(慶應義塾図書館蔵)



9 ▲勅修百丈清規鈔(慶應義塾図書館蔵)



11 ▲狂雲集[冲森本](個人蔵)

円爾に始まる東福寺の僧侶たちがこの伝説を作り出したのではないかと思われます。日本の仏教宗派のなかで、禪宗は遅れて成立したため、天台宗や真言宗などはしばしばトラブルを起こしました。天神が禪宗を学んだという伝説は、禪宗の日本における正統性を訴えるための手段として創作されたものでしょう。実は、達磨は日本に渡って聖徳太子と出会っていた、というこれまた荒唐無稽な伝説も鎌倉時代に作られていて、その意図も同じ所にあつたと考えられます。

5.『狂雲集』(沖森本)〔室町中期〕写¹⁾²⁾

最後に紹介するのは一休宗純の詩集『狂雲集』の写本です。末尾に文明4年(1472)の一休自筆の奥書があります。恐らくはそれまでの作品を弟子に清書させ、詩集としてまとめたものと思われるが、末尾には少し筆跡が異なる作品が増補されていて、文明10年頃まで書き足されたものかと思っています。『狂雲集』には、内容の異なる写本が多く伝えられていますが、この本は一休の弟子が本拠地とした大徳寺の塔頭真珠庵の本に近い内容のものです。

一休はご存じの通り、トンチ小僧として有名ですが、本来は激しい行動と作品とで知られる人物で、書の商品も人気があります。展覧会では、本物の書道作品は展示していませんが、模写の作品やこのような詩集、またトンチ小僧の伝説のものになった江戸時代の小説集などを展示しています。

／おわりに／

今回は、禪宗の学問や文化が、塔頭という生活空間において育まれ、それを経済的・人的に支援する人々がいて、戦乱や社会の変化などにも耐えながら、現在にまで伝えられている、ということをお話してきました。

禪宗寺院の方々には、これからもそのような文化を大事に守ってほしいと思います。一方で、例えば「禅僧の書と書物」展に出品している書物などは、明治維新以降やむを得ず手放されたものが、古書店を通じて図書館や斯道文庫に購入され、研究対象として大事に保管されているものです。そういう意味では、われわれ研究者も、このような塔頭の文化の一部を将来に伝えていく役割の一端を担っているとも言えます。



▲渡唐天神図(斯道文庫蔵[センチュリー文化財団寄託品])

【図版出典】

Fig.1 Photo by Kakidai

Fig.2 Photo by Oilstreet

Fig.3 Photo by 663highland

Fig.4 Photo by karesansui

Fig.5 国立国会図書館デジタルコレクション
info:ndljp/pid/1312279

／再開発只中の青山北町アパート／

青山北町アパート——華やかな青山通りを一本脇道に入ると姿を現す、鬱蒼とした緑、そして築50年を超え、ある種の風格すら漂わせる団地群¹⁾——は、この原稿を書いている2019年3月現在、まさに進行中の再開発計画によって失われつつある。

港区に残る数少ないこのマージナルな領域を、象徴的に保存すること。それが今回われわれの企画した、架空のブログ記事と写真からなるフィクション作品「目撮りする幽歩者——青山のストリート・アーティスト、チョウ・アイについて」(作＝太田知也／写真＝吉屋亮／原案＝松本友也＋石井雅巳)の意図するところだ。

しかし、なぜ青山北町アパートなのか。この建物と土地は、どのようにマージナルなのか。来歴を辿れば1900年、小学校教員養成機関である「東京府師範学校」の新校舎が青山の当地に建てられたことから、この土地の歴史ははじまっている。その後、いくつかの教育機関の校舎として利用されるも、東京大空襲で建物は全焼。その跡地に、戦後初の都営住宅として建設されたのが、現在の「青山北町アパート」である。

／都市の余白としての北町アパート／

港区と渋谷区のほぼ区境に位置するこの団地は、いわば戦後の青山＝表参道エリアの高度成長をずつと見守ってきた存在だ。いまや一大ファッションスポットとして発展した青山通りのすぐ裏手にこれだけの敷地の団地が残っていること自体、異様に感じられる²⁾。青山でこだけ時間が止まったような、奇妙なまでに静かな区画。この団地のそんな性格は、建築家ソラ＝モラレスの提唱した「テラン・ヴァーグ(terrain vague)」³⁾「*」⁴⁾という概念にほぼ重なっている。

「terrain vague」——直訳すると「空き地」というタームは、ソラ＝モラレスによれば「可能性としては利用できるものの、自分たちが部外者であるような何らかの規定をすでに受けている土地の「区画」を意味する「terrain」、そして直訳では「波」、加えて「空虚」「曖昧」といったニュアンスを持つ「vague」の2語からなる。このタームで彼が名指そうとしたのは、「用途や活動の不在と、自由や期待の感覚」を喚起する両義的な空間である。こうした空間は、「確かに都市の日常の利用にとつては外在的ではあるが、都市そのものには内在的なもの」であり、それは「都市の効率的な回路



▲地図出典＝マピオン
<https://www.mapion.co.jp/m2/35.66518282,139.71250445,19/poi=ST22588>

基本情報：青山北町アパート	
竣工年	1968年
戸数	376戸(25棟)
敷地面積	約4ヘクタール

1) イグナシ・デ・ソラ＝モラレス・ルビオー「テラン・ヴァーグ」田中純訳、磯崎新十浅田彰監修「Any-place——場所の諸問題」、NTT出版、1996年。

2) 実際に、テラン・ヴァーグ的な場所の例としてこの青山北町アパートを挙げている先行研究も存在する。参照：若本早代「Terrain Vague Network——都市のリタダンシーと建築のふゆねごころ」
<https://www.jia-kanto.org/shushiten/2017/data/16/index.html> 2017年。

3) 渡唐天神図の多くは、頭巾をかぶり、道服をつけ、左肩から右腰に袈裟袋をさげ、梅の枝を持ちます。決まり事を踏襲しながら、渡唐天神図は多数制作されました。初期渡唐天神像はやすんぐりとした体軀をしているのが特徴で、『禅——心をかたちに』(展覧会図録、日本経済新聞社、2016)の238・239番などにあたります。狩野元信が描いた渡唐天神図は、真正面向きでやや右腕を前に出しています。この図様は、狩野派の絵師に踏襲されてゆきました。また、鎌倉建長寺で活躍した禅啓は、水墨画で横向きの渡唐天神を描いています。

星灯籠は都市の余白を吊るか

松本友也(Rhetorica)

photo: Ryo Yoshiya

や生産構造の外部に存在する」^{〔家3〕}。
まさしく生産性の塊であるような都市の中心に、ぼつかりと穴をあけるように存在する青山北町アパートは、そこに在るだけで「用途や活動の不在」、そして「自由や期待の感覚」を喚起する。有用性の只中で、その有用性ししんを眺めるための都市の余白。青山・表参道エリアにとって、あるいは港区にとつていまや希少なものとなつてしまった「空き地」が、この団地なのである。

そして、そんな都市の余白としての青山北町アパートは、それが余白であることの宿命として、再開発によつて取り壊されることとなった。開発それ自体は善悪を超えた、ほとんど都市のバイオリズムのようなものだ。築50年を超えたこの団地が、実質的に「寿命」を迎えていたことも確かだと考えられる。ソラ＝モラレスが言うように、あらゆる建築は植民地建設、つまり未知性を同一性に馴致することを宿命としている^{〔家4〕}。もし建築が都市の余白に対して唯一貢献できることがあるとすれば、それは「連続性に対する配慮」だけだと彼は言う。つまり何かの痕跡を、建てられたもののなかに残すことだ。

この再開発計画がどのようなものになるか、そこにどのような「連続性」が保持されることになるのか、われわれは知らない。しかし本質的には、都市の余白と開発は相反する。われわれはディベートよろしく都市の余白の側に立ち、これを擁護するためのひとつの碑を、この誌面上に建ててみたいと

考えた。その碑とは、この地に存在していた「一つひとつの断片を拾い集めて構成された、ありうる「連続性」としてのフィクションである。

／この地で没した蘭学者・高野長英
ひとつ目の断片は、この地で没した江戸後期の蘭学者・高野長英である。ヨーロッパの兵学書の翻訳や、徹底した幕府の鎖国批判によつて近代化を押し進めんとした学者として知られ、現在も青山通り沿いに存する商業ビル「SPRAL」(建築家・横文彦設計)の外柱や、北町アパート敷地に隣接する善光寺に彼の碑が残っている。

長英の生涯は、それ自体が物語じみた数奇なものである。シーボルトの鳴滝塾で学び、そのきわめて優秀な語学力をもつて医学と蘭学を修めた長英は、江戸の町医者として蘭学塾をひらく。洋書翻訳に従事し、当時最先端の西洋思想に通ずるも、鎖国に対する批判的な立場が仇となり、「蛮社の獄」にて投獄、永牢の刑に処される。政治犯として警戒された長英は、恩赦などによる出牢もかわず、5年ほどを伝馬町牢屋敷にて過ごす。合法的な脱出を諦めた彼は、牢に移める非人・栄蔵をそそのかして放火させ、その混乱に乗じてついに脱獄する。当然ながらこれは大犯罪であり、江戸中で指名手配されるお尋ね者となる。その後は、江戸から逃れ旧知の伝手を辿つて生き延びるも、ついには江戸の青山百人町に町医者として潜んでいるところを捕方に襲撃され、命を落とした。その最

期は自刃とも言われているが真相は定かではない。いわば江戸中で指名手配されていた長英にとつて、人との対面が避けられない町医者として仕事をすることには大きなリスクがあった。そのため、人相を変えるべく酸で顔を灼いたとも言われており^{〔家5〕}、彼の置かれていた状況はつねに切迫したものであった。そんな彼が身を潜める場所として現在青山北町アパートの存する青山百人町を選んだのは、その地にたまたま伝手があったからにすぎない。この全き偶然から、青山百人町という地と現在の青山北町アパートとの間に、ひとつの「連続性」を仮構することが今回のわれわれの目論見である。

／百人町の星灯籠

そしてもうひとつ、青山百人町と青山北町アパートとの結びつきを仮構するための要素がある。広重が「諸国名所百景」に描いたことでも知られる「星灯籠」である。当時の青山百人町は、その地

名の由来にもなっている譜代の家臣・青山忠成に仕えた与力・同心たちの武家屋敷が立ち並び、その高い塀によつて、昼でも夜のような暗さだったという。盆の時期に、そんな高い塀をさらに超え、2代將軍・秀忠を悼み星々のように掲げられた灯籠が「百人町の星灯籠」。この地を象徴するこの幻想的な灯りの輝きは、平成も終わりに近づく現在にも、団地の隙間から覗くビル群や再開発のクレーンという形で反復^{〔家6〕}されている。

言うまでもなく、2代將軍の時代と現在との間に、風景の同一性など存在するわけがない。しかしソラ＝モラレスがどう考えていたかはわからないが、「連続性」とはそもそも、繋がるはずもないものの間に見出される縁ではなかったか。あるいは、なら繋がりをもたない個々の出来事が、土地というひとつの器において生じること。それが土地の、あるいは地縁のもつ魔力なのではなかったか。

／ビルは都市の余白のために建てられる

青山北町アパート、高野長英、星灯籠。これらの本来は相互に関連していない要素を、仮構された偽史^{〔家7〕}において圧着すること。それによつて、この土地に眠るコンテクストをひとつに折りたたむこと。それは忘却への抵抗であり、この地に存在していたテラン・ヴァーグとしての北町アパートを言祝ぐことでもある。

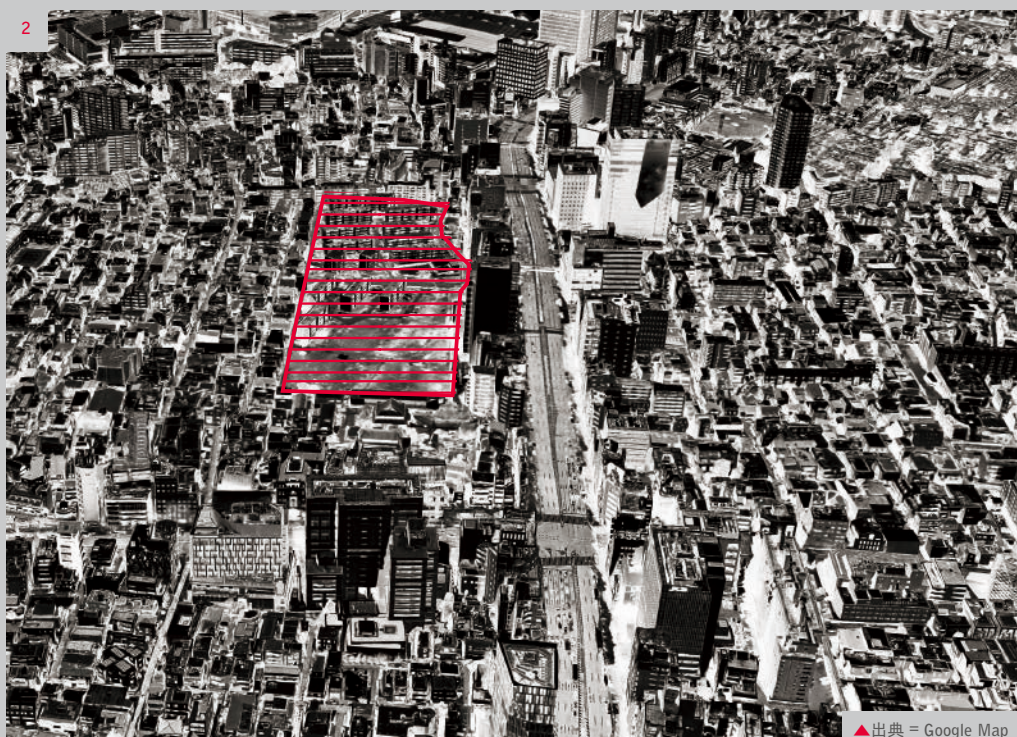
次頁以降では、高野長英にオマージュを捧げた架空のストリート・アーティストを追いかけるといふ体裁の、ブログの形式に擬した連作掌編小説を掲載する。この短いフィクションのなかでは、ビルは都市の余白に建てられたものではなく、都市の余白を吊うものとして描かれる。この小品が、再開発進む東京中のクレーンを、星灯籠として読み替えてしまえるような視座を提供できることを願いつつ。

photo: Ryo Yoshida

〔家3〕 上記引用箇所、すべてソラ＝モラレス前掲書、130頁。

〔家4〕 同、133頁。

〔家5〕 このエピソードに限らず、高野長英の生涯については、史料による確証が得られていない逸話も多い。参照・佐藤昌介「高野長英」、岩波新書、1997年。



▲ 出典 = Google Map



Home About My profile

1st entry: 幽歩者より

投稿日: 2018.10.21

港区青山に幽霊が出る。——歴史に棲み着き、気まぐれに這い出して都市を彷徨する、そんな幽霊が。

皮相な修辭にあらず。

足跡を辿れず、しかし街区の壁に微かな存在の跡を残して、それは去っていく。すぐに現場に駆けつけたところで、行方は知れぬ。仮にも遭遇する僥倖を得たとしたなら、その顔は、怪物めいたおぞましさ。瘴氣にあてられ正氣を失くし、あなたは氣絶する。こうした存在を、幽霊と呼ぼずして、なんと呼ぼう？

青山通りを歩いたあなたにも、よもや取り憑いたことがあるかもしれぬ。横文彦の設計になるSPIRALでウインドウ・ショッピングしたことのある、あなたにも。（この話はいずれしよう）わたしはこの幽霊を追って都心を遊歩する者——言葉遊びを弄するなら、そう——“幽歩者”だ。わたしは一介の幽歩者である。直截に言って、わたしは一連の心靈写真と、実在すらも定かでないその撮影者に取り憑かれている。

彼の存在を伝えるべく、わたしはこのブログを開設した。

Search

August 2019

M	T	W	T	F	S	S
	1	2	3	4		
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

< July

最近の投稿

- 3rd entry: Gast me if you can.
- 2nd entry: 自撮りの中の幽霊
- 1st entry: 幽歩者より

2nd entry: 自撮りの中の幽霊

投稿日: 2018.10.23

写真黎明期の19世紀中頃よりこの方、写真機の中には幽霊が居る。そう臆断することから、わたしはこの小文を開始する。つまり写真機とは一種の“ゴースト・ハートウェア”なのだ（という、そのフレーズはBurialの曲名からの引用だ、為念）。

デジタルやエニエマスら黎明期写真家たちの被写体となった貴族は、眼前に置かれた無骨な黒い箱——もののしいだけでなく、それは光をかすめ取ると言うではないか！——に対峙して、**靈氣を抜かれる**のではないかと、本気で危惧した。

ところで。文字通りに、除靈の装置として写真機を捉える想像力はビデオゲームの中に見られる。和製ホラーゲームの『零～zero～』は幽霊を撮影対象にするという、そのサブリミナル的発明を画した一作であるし、インディゲーム『DreadOut』というフロロウも生んだ。任天堂の『ポケモンスタジアム』もまた、われわれの想像の内にだけ憑いて巣食った小動物——普段は見えるはずのない小動物——をポリゴン製の山々や丘陵や河川の所々に探し求めるゲームだったという意味で、『零』の系譜に連なりうる。それが『Pokémon Go (ゴー) 』としてAR (拡張現実) 型スマホゲームに行き着いたのも、むべなるかな。なぜなら、スマホカメラを通してしか視えないデータ状の幽霊めいた存在を捕まえるというゲームだからだ。つまりわたしに言わせれば、これは本来“Pokémon Ghost (ゴースト)”と呼ぶべきアプリである。

われわれの手中に収まるスマホ付属のカメラもまた、靈氣を抜き取る不気味な存在であり続けていると、わたしは思う。シャッターも感光板も電子的なそれに置き換わったとはいえ、その分だけ電子的な靈氣を湛えたピクセルの集積を、わたしたちはいまも、収集している。

さて。駄弁を重ねた所以を語そう。わたしが虜となった港区の幽霊、それを写す写真機もまた、スマホアプリに連動したものであるという事情による。畢竟、わたしが追いかける幽霊はインスタグラムのインカメラに写されるものだ。——いわば“Ghost in the Self-portrait”と言えなくもない。今日のところは駄弁のみにて閉幕とするが、数日以内にはきつと、幽霊譚をお届けできるはずである。ゆめゆめ見逃すべからず。

プロフィール

ID: ghostroll

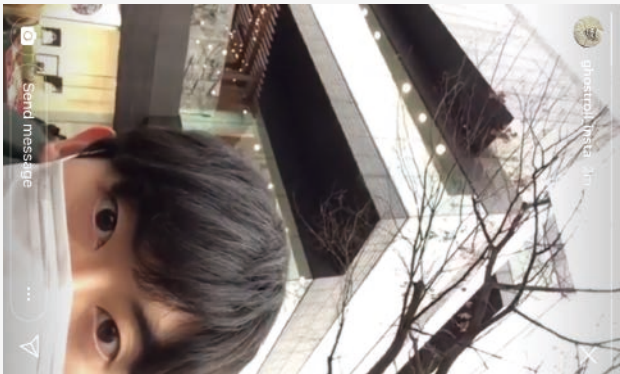
ブログ説明: かつて辻斬り横行したる街、港区は青山を拠点に活動するストリート・アーティスト、チヨウ・アイの作品を読み解こうというフアンブログです。非モテの星から来た男に愛と勇氣を教わります。

アーカイブ

- 2019年8月
- 2019年7月
- 2019年5月
- 2019年2月
- 2018年12月
- 2018年11月
- 2018年10月

3rd entry : Gast me if you can.

投稿日: 2018.10.30



つい半刻ほど前のこと。とあるインスタグラムのアカウントでストーリーが更新された。ようやくわれわれは、心霊写真を拝めるわけである。いつも通り、わたしは怖気を覚悟して、虹色の円形アイコンをタップする。画面上のおぞましい顔貌を直視せぬようにして、顔の背後に写り込んだビルにだけ注目するよう、わたしは努める。幽霊の発生地を特定しようというのだ。まるで下手くそなジェンガのように一層ごとの鋼材がズレて積まれたフアッシュョンビルが写り込んでいる。——そう、あれは確か、表参道のGYREではないだろうか？

(写真はGYRE前で自撮りした一枚。例の幽霊アカウントと同じ構図で写した。映っている男はわたしだ。なぜって読者にグロ画像を開陳できるはずもなからう？)

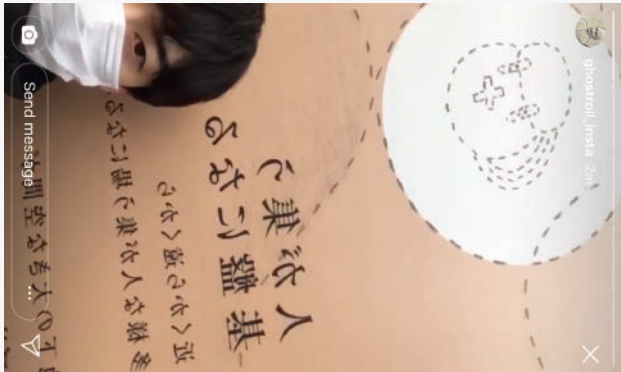
青山通りの喫茶店に居たわたしは、急ぎ近くまで、歩く。路地を折れてわたしは、心霊スポットに入っていく。そうして歩き、歩き、歩く。青山北町アパートへ。やがて再開発中のアパート壁面に掲示されたペンション・ボエムの類いが眼に入るだろう。

ストリート・アートの用語に曰く「爆撃 (BOMB) 」。により壁面へと刻印されたアートピースがわたしを迎える。この一品は、そうだ、「ジェンガ」としよう。出会って即座に、わたしはそう命名した。混乱した造形がGYREに似ているから。ストリート・アートイラストとしてのこの幽霊的な作家にとり、わたしが知る限りでのこれは第20作目のピースである。とはいえ作家自身の手になるインスタ写真のキャプションによれば、作品は常に「無題 (Untitled) 」であり、連番 (ナンバリング) も付されない。だから熱心なファンにして、いささか学芸員の収集癖のあるわたしは、己の内なるコレクションにおいてだけ命名されたひどく個人的な表題を付けるのを好む。

改めて見れば、ひたすら素晴らしい……。わたしは団地の隅で一人嘆息し、犬を散歩中の住人らしき壮年の男性から冷ややかな視線を浴びたが、何あろう、やましいことなどない。フエンスを隔てた向こうの彼岸では、クレーン車が古小屋を叩き潰しているのが見える。トタンがひしやげ、モルタルの霧が白く立ち昇り、それらと同時に轟音が響いた。リードに繋がれた犬は——解体のさまざまな日常の些事であるらしく——吠え立てることもなく、取り澄ましている。

わたしはスマホを見る。ストーリーが更新されている。心躍らせ、アイコンをタップ。まだ近くにいるのではないか？ 例えばあのフエンスの辺りであるとか。いかにも幽霊好みの一角である。そうしたらようやく、直接の対面が叶うのではないか。今日こそは、あるいは。——何度目かわからぬ、そうした淡い期待と共に、わたしは指先で虹色に触れる。

自らのアートピースを背景に自撮りした幽霊が、そこに写されていた。ちょうどわたしが立っているのと同じ場所。またもわたしは置いていかれたようである。あるいは先に立たれた、そうも言うのかもしれぬ。もちろん、二つの意味で。



4th entry :
幽霊の正体、
チヨウ・アイへの招待

投稿日: 2018.11.11

団地に取り憑く幽霊の正体は、ストリート・アートイラスト "cho_eyew"。そう名乗る謎の**《インスタグラム・アカウント》**だ。発音するなら「チヨウ・アイ」か。どこかしらアジア的な東風のそよぎを感じさせる名前だが、国籍は不明、性別・年齢も不詳。アツアツされた写真に唐突に付される各種の欧州言語から推察するに、数カ国語を嗜むと

される。フォロー数は約1万人。以上が、彼——と仮にわたしが男性を指す人称代名詞を使うのは、自撮りの首元から覗く屈強な肩幅による——のパーソナル・データについて、わたしを知り得たすべてである。

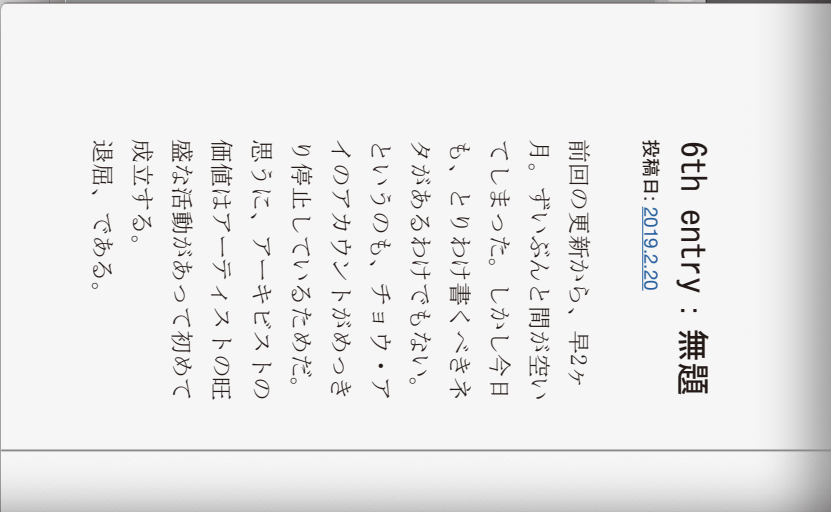
そしてチヨウ・アイを証し立てるトリードパークは、そのアートピースの他に、顔貌のおぞましさに存する。

「データ資本主義の下、わたしは匿名者たらんとする」とは彼の言だが、チヨウ・アイは己の顔を醜く潰した。GAFaや各種のSNSに席卷された現状への異議申し立て (プロテスト) を、彼はその顔に刻んだわけだ。青山北町の団地を背景に、**皮膚のただれた顔**の男が、眉から下半分だけ映り込むストーリー写真——これが彼のトリードパークである。

SNS上のアカウントは過剰露出で、その一方、個人の同定は不可能につき、完璧に匿名的。自撮りを切り売った成果がlikeによって量化される“顔面経済”のインスタグラムにありながら、有名性と匿名性とが矛盾なく不気味に同居した存在論的不確かさ。この点をもって、わたしは彼を幽霊と呼んでいる。——もはや**SNSは、あの顔を憶えてはいられない**。にもかかわら

ず、1万のフロワー—誰もの記憶に、その顔は焼き付いている。

わたしが心奪われた幽霊の魅力。その一端を、おわかりいただけだろうか？



5th entry : 遊歩と幽歩
投稿日: 2018.12.24



ようこそ、幽歩者コレクションへ。ギヤラリー・トークはいかがかな？ まずはこの一枚をご覧ください。

チョウ・アイにとっての記念すべき、第一作目のグラフィティだ。わたしの個人的な作品レコードでは「長英」と題される。この命名に込められた意図を、作品に付された秘密のキヤプションを、青山の歴史から紡がれる幽霊譚を、ここに解題しよう。

ある日のこと。わたしは青山通り沿いのSPIRALをぶらついていた。たいへんにアツバーな港区の優越的日常を彩る雑貨店やビュートエイ・サロンを擁した複合文化施設である。同時にわたしの手許では、とあるスキンケア・ブランドの紙袋が揺れていた。この事実から、よもやデートの付き添いではあるまいかと、青山通りを腕組み歩き、カエサルもかくやの視線で独り者を睥睨しつつ勇み歩きする、あの種のカッパルではなかるうかと、数瞬でもそのように想像された向きの読者には、あらかじめお断りしておく。**あなたに都市を愛しているとは言わせない**。近代的な南空間としての都市とは、そのように経験すべきものではない。教会から放射状に延びたストリートを中心軸を、あたかも侵略者または為政者のごとくに歩く、そうした城郭都市に相応しいような一つの作法は、ここ青山には馴染まない。そうではなく、われわれはボードレールの覗き見趣味を、ベンヤミンの逍遙を、あるいは彼が論じた写真家アジェの——その被写体であり続けた無人の街角への——眼差しを、それらをもつて港区青山と向き合わねばならぬ。斜から窺う窃視症者たることの申し訳無さを抜きがたく抱え込んだ遊歩の者として、近代都市は歩かれねばならない。ついではながら申し述べるなら、わたしが紙袋を持っていたのは、チョウ・アイの読解に供するためであった。

7th entry :
ストリート・アートか
都市犯罪か？

投稿日: 2019.5.5

公共物たる街路の壁にラッカー塗料を吹き付けて、己の名前をそこに象る。——グラフィティの典型的な光景。あるいは、これまた街路に設置された企業のビルボード広告を相手取り、その上からメッセージを上書きする。例えばガソリンスタンドの“ESSO”の看板に、垂直な二本の線を書き足してみよ。そうして現れる“ES\$Q”の四文字は、オイルマネーに翻弄されるグローバル資本主義を揶揄するような反-広告へと様変わりする。——ストリート・アートの作法。

自らグラフィティにルーツを持つペインターである大山エンリコイサムが著した『アゲインスト・リテラシー』によれば、厄介な問題はここに存する。すなわち、グラフィティやストリート・アートの営みは、都市でのヴァンダリズム（公共物破壊）や違法性と切り離せないこと。

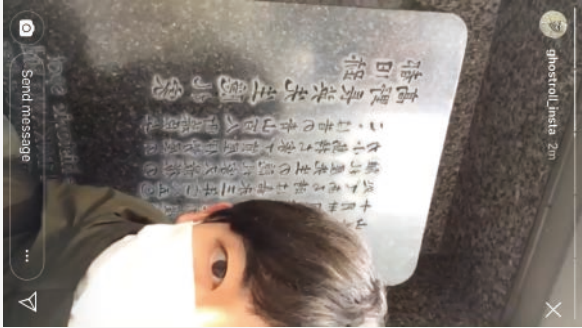
大山に曰く、1960年代末のニューヨーク

決して、断じて、フラれた結果プレゼントを渡しそびれて行き場を失ったハンブクリムなどでは、決して、断じて、ない。（仮にもそんなシナリオだったなら、ナイン・インチ・ネイルズのアルバム名——『落ち目のスパイラル』——に準えて、綺麗にオチが付いたものだけでも。）ゆめゆめ邪推されぬよう。

さて、以上は見かけほどには駄弁にあらず、わたしは本筋を見失ってなどいない。そう、わたしはSPIRALの周囲をぶらつき、とある石碑に出くわしたのだ。メイנסトリートの勇み歩きでは、およそ遭遇するべくもない柱の窪みに、ひっそりと佇んでいる。これは高野長英の碑である。そして繰り返せば、チョウ・アイは己の作家活動の第一作目を、ここに刻んだのだ。

アカウメントに名残りが甞している通り、チョウ・アイは江戸期のラディカルな反体制的蘭学者、高野長英にレベゼンを捧げているようである。何を隠そう、長英こそ、体制批判の責を問われて幕府の与力・同心に追われるなか、硝酸で顔を灼き逃げ延びたという異色の経歴を持つ、そうした政治犯なのであった。チョウ・アイと長英の共通点は、顔面の他にもある。長英が隠遁した地——当時の呼び名で百人町——を古地図で見てもれば、そこにすっぽりと青山北町アパートが収まっていることがわかるだろう。長英は医学を能くする町医者でもあったため、百人町で人々の病を治しつつ、隠棲していた。

SPIRALの敷地を出たわたしは、高野長英の足跡を辿るようにして、青山北町を歩いている。取り壊し中の、現在進行形の、廃墟を歩いている。現在の風景とは対



クに起源を持つグラフィティ文化は「八〇年代中頃までをひとつの黄金期」(p.120)としているが、その間の70年代には「風紀を乱すものとして[ニューヨーク]市やマスメディアによって悪印象を流布されて」

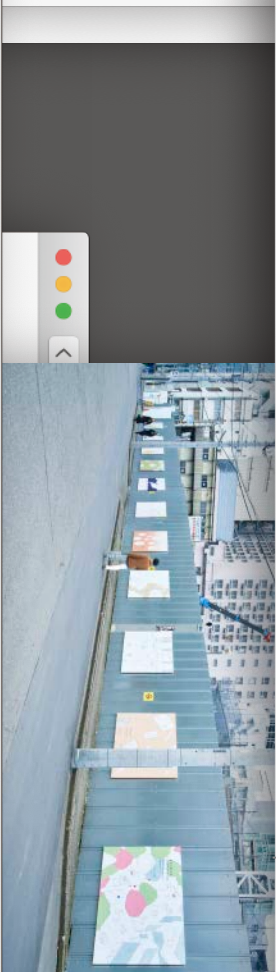
(p.143) いた経緯を持ち、その象徴的な出来事は「対グラフィティ戦争」の名の下で当時の市長が主導し警察や交通局を巻き込んだ一大グラフィティ浄化作戦であり、これはホームレス駆除やジェントリフィケーションと合流しながら15年にもわたって展開された。このように、ストリート・アートとグラフィティは公共物の総体たる都市空間を巡って闘われる、体制と作家との苦闘の歴史という側面を持つものだ。

むろんのこと、われわれが着目しているチョウ・アイもまた、都市犯罪者の誹りを免れない。

チョウ・アイが最新の投稿で吐露した事実によれば、青山でのBOMB行為に関して中止を求める複数名の人々(「コレクトネスに目を眩まされた住処リリストたち」——これは彼の謂である、為念)から、脅迫まがいのDMを受けているという。なるほど、以前より彼の投稿のコメント欄では炎上が頻発

していたのであったが、批判者らの動きが輪をかけてエスカレートしつつあるということなのであるう。とはいえ作家自身のチョウ・アイは臆するどころか、むしろ批判の矛先に身を晒すことを愉しんでいる様子すら見られる。江戸の警察権力に追われた高野長英の存在に近づいていとも言うかのように。

照的に、江戸期当時の百人町は猥雑とした地域であったという。そうしたストリーートの喧騒を横目に、長英は独り寂しく、歩いたのだらう。その足取りに窃視症者たることの申し訳無さがあつたかどうか、わたしは知らぬ。けれども顔を潰した彼は、己のみが他者を窺う存在である一方、そこを通じて内面を窺い知れるような顔貌を決して見つめ返され得ることのない、まさしく完璧なまでに語義通りの窃視症者であったと言える。かつて権力に追われた長英がおり、いまでは長英に成り代わったチョウ・アイがおり、チョウ・アイを「追っかけ」、するわたしがいる。ここには3世紀ほどの時を隔てて、同じ土地を忍んで歩く者たちがいる。あたかも先行者の足跡を重ね描きするかのように行うわれわれ三者の都市の歩みは、新たに足跡を残さない以上は幽霊的であるといえ、こうした仕方によってしか語り直せない場所の記憶があるのだらう。遊歩と幽歩によってしか。



8th entry : The eyes have it.

投稿日:[2019.7.14](#)

手短にだが、ブログを更新する。
重大ニュースだ。わたしの広報活動が、チョウ・アイ本人に、認められた。彼は突然わたしに宛てて、一通のダイレクト・

メッセージを寄越した。それも添付画像付きの。

画像を見れば、なんと(なんと!)、新作が写されているではないか。わたしは歓喜し、涙した。ここに転載することで読者の好事家諸氏と共に分かち合おうとの考えが過ぎりこそすれ、やはり個人宛てであるからには私秘性を重視し、思いつくうちに留めておくこととした。

ただしこの作品を、レポートNo.29「私立探偵」と命名したことだけは、ここに記す。(詮索好きの読者に向けた附記: 本作はわたしにとり、私秘的すなわち**プライベート**な**チョウ・アイ**氏との交歓の記録であるが、英語の“private eye”には私立探偵の意味がある。)

final entry : 星灯籠の物語

投稿日:[2019.8.15](#)

チョウ・アイのラストピースは、それまでのようなオリジナル作ではない。わたしが知る限り——ということは必然、この作家の制作歴すべてにおいて、とわたしは信ずるが——唯一無二の非オリジナル作であり、剽窃・転用(アプロプリエーション)による一作である。わたしは本作をしてチョウ・アイの到達点的傑作と評しめるのに一切の躊躇を持たない者である。

作品レポートNo.30「星灯籠」。百人町での盆にまつわる一つの習俗をモチーフとして歌川広重が描いた同名の浮世絵があり、これがチョウ・アイの手でアプロプリエートされているものだ。ただし本作を傑作とみなすのは作品の完成度のみならず、わたしの個人的なエピソードにも由来する。およそ批評家が伶俐な批評眼を狂わせる瞬間とは、作品とのドタバタツクな邂逅——その時を措いて他にはなからう。



広告

わたしは記録しよう。そして語り継ごう。「星灯籠」の物語を。

長英は走っていた。1839（天保10）年、その後の歴史では「蚕社の獄」と知られる一日。走ってのち、同心に組み敷かれ、投獄の憂き目を見た。

長英は走っていた。雑布と褌に身を包み、燃え盛る町並みのなか、ひた走っていた。放火の奸計をめぐらし、獄舎を混乱に陥れ、脱獄したのだ。

長英は走っていた。幾多の霊の台間を縫って、走っていた。**盆**。この日だけは霊が黄泉から繰り出し、江戸へ還る。のちの時代に後藤新平が都市計画する以前の、すなわち未然の帝都へ、霊が還る。受け入れる側の生者らは、先祖に対し生前の住処を指し示すよう目印代わりの灯籠を出すことで、還霊の準備を為す。我がものこそは、と誰もが灯籠の高さを競い合い、赤い灯りが街を照らす。——百人町での、これが習わし。

長英は走っていた。1850（嘉永3）年、冬。背後に迫り寄る同心の影に怯えて、走っていた。百人町への潜伏が幕府の耳に入ったのだ。逃げ場はないかと、辺りを見回す。——子供が提灯片手に辻を横切る、それが眼に入った。一瞬だけ目を奪われた光景に、いつかの盆の、赤い景色を想起した。“せめて、もう一目、——思いがけず立ち留まり、江戸の空を振り返る——聳え立つ星灯籠の群れ。幻視に凝んで満足けなその顔は、酸に爛れている。数瞬ののち、どしんと背後に衝撃。隘路の他にはどこへも通じぬ現在が、記憶の作業を断ち切った。お縄の時間。——嘉永3年10月30日、長英死没の日のことである。

チョウ・アイは走っていた。直前にキンコースでプリントアウトした広重の絵の複製を束で抱えて、青山北町アパートの外周沿いに、走っていた。ポスター大の浮世絵を一枚ずつ貼りながら、人目を忍んで走っていた。過ぎ去った後の壁面には何枚もの「星灯籠」が掲示され、それらはあたかも、江戸の街への寓意を介した時間跳躍のため設えられた窓々のよう。手持ちの複製が少なくなつてのち、チョウ・アイの歩みは停止した。仕上げとばかりに自撮りのインカメラを起動して、顔を作る——灼けた顔にもわずかに残り残った表情筋を動かすことで、微妙なニュアンスを帯びさせんとするのである。背後の自作と共に、

はい、チーズ。画像を確認し、光彩を調整していたとき。バックカメラの側から、すなわちチョウ・アイの前方から、数人の人影が肩を怒らせ歩み寄っていた。**お縄の時間**。手許から離れた広重の絵が、風に吹かれて街に散らばる。

わたしは走っていた。北町アパートをスクラップ・アンド・ビルドする建設機械の脇を、わたしは走っていた——。

場所が失われたとして、そこに棲み着く魍魎魍魎が消えたりするものだろうか。否、場所が減んでなおも消えない存在のことを、地縛霊と呼ぶのではなかったか。しかし、悲しきかな。ことはそう単純ではないようだ。失われたのは場所ではない。そこに取り憑く作家のほうだ。

チョウ・アイは捕まった。しかし幸いにして、この作家は誰でもない匿名者であった。匿名性に担保された、代替可能性の体現者。そして読者にとっては驚くべきだろうことに、**わたしの手許にはチョウ・アイのインスタグラムにログインするためのパスワードがある**。レコードNo.29「私立探偵」。その作品に描かれていたアルファベット数桁こそ、パスワードであった。たぶん彼は、己に迫る危機を知っていたのだろう。そこまで見越して、わたしに託したのだろう。

ならば必然、答えは一つだ。わたしは、顔を、灼く。

——わたしは走っていた。走りながら、すでにチョウ・アイに成り代わったわたしは、クレーン車を仰ぎ見た。彼を介して己が長英に成り代わってもいることもまた承知のうえで、見た。焼け爛れた眉に視野をほとんど塞がれながら、見た。拉いだ視界から街を見透かし、覗き見た——“ああ、こんな景色だったのか、——団地の彼方に聳える高層ビル。それに勝らんと高さを競って鶴首を伸ばす、建機のクレーン群。それらが視界の中で歪んで攪み、涙に洗われてきらきらと輝いて見えた。そのときわたしは、広重の絵のなかを、走っていた。

ニエフスら黎明期写真家たち 体制的
蘭学者 スマホ付属 グラフアイ
文化 批評家 都市空間 窃視症
者 **カメラ** 近代都市
フオロワー**数** 黄金期 城郭
都市 長英死没 データ資本主義
ビルボード広告 ニューヨーク
グラフィテイ戦争 代替可能性
グロウパブル資本主義
フアッシュンベル 体制批判 発生地
ボードレール 高層ビル グ
ロ画像 作家活動 ラストピース
和製ホラーゲーム ー**大グ**
ライテイ浄化作戦 優越的
日常 住処リアリストたち **バツカ**
マ クレーン群 幽霊好み 幽
霊アカウン ト ビデオゲーム イ
デイゲーム **大山エンリ**
イサム 北町アパート アイロ
BOMB行為 **ハンボク**
リーム コレクトネス **ベイヤ**
ニシ アイ本人 横文彦 後藤
新平 #フインスマグラム monGhost
DM Burial トク 天保
hauntnur フアンブログ モルタ
ル E アプロリアエーション
collection フアン **ダゲール** 集積
ネタ **ヴァンダリズム**
privateeye **デート** 硝酸 人
影 Gastmefyoucan zero スマホグラフィ

アーキビスト 為政者 落ち目
GhostintheSelf 遺囑 住人 **キ**
ンコース オ ラデイカル リテ
ラシー AR タップ サロバ 合間
手中 喧騒 **フリーズ** **任天**
堂 ベンジョ 寓意 経歴 思
い出 **ボケモン** スナップ **彼岸**
長英 トーク カリンスタン
星灯籠 **アイ** 幽霊 **グラ**
フ **アイ** 幽霊 **グラ**
真 フログ 都市 写真機 スト
リート 作品 青山通り アート
ピース **タグラム** 作家 心霊写真
アカウン ト 図 江戸 霊 **私立**
探偵 百人 **SPIRAL** アパー
ト 広重 レコードNo 港 twenty
青山北 アーテイスト 街 画像
数隣 江戸期 公共物 匿名性
ゲーム ≠ 写真黎明期 オリジナル
作 作家自身 都市犯罪者 嘉永
虹色 **ジェンガ** 写真家ア
ジェ 匿名者 批判者 者たち スマ
ホカメラ インスタ写真 ストリー
写真 撮影者 作家 顔貌

Chōei is running. His body wrapped in rags and a straw raincoat, he runs through the blazing town. His plot to start a fire has sent the prison into chaos and confusion — and Chōei flees from its grasp.

Chōei is running. Weaving his way through countless spirits. It is Obon. On this day only, the dead sail forth from the underworld and make their homecoming. They return to Edo — before the city is reshaped by Goto Shinpei in a later era, when it is not yet the Imperial capital. As preparation for the returning spirits, those on this side of the divide bring lanterns out as signposts to guide their ancestors back to the realm of the living. They each compete for the highest lantern, illuminating the town with a red glow. This is the custom in Hyakunin-cho.

Chōei is running. It is the winter of 1850 (the third year of the Kaei era). He runs with the fearful shadow of a constable at his heels. The military government has discovered his hiding place. He looks around for a possible escape. His eye is caught by some children, crossing at an intersection holding lanterns. For a moment this scene takes hold of him, and he recalls the scarlet cityscape of an Obon festival sometime ago. “At least, if I could only see it one more time” — suddenly he stops and turns to look up at the Edo sky — there he sees a cluster of star lanterns towering over him. He grins broadly at this vision — his face, burnt by acid, is a picture of satisfaction. After a moment or two he feels a sudden impact from behind. Standing on a narrow path that leads to nowhere, his memories are cut short. Chōei is captured. The day is October 30th,

the third year of the Kaei era, the day Chōei dies.

cho__eye is running. He sprints around the perimeter of the Aoyama Kitamachi housing complex — under his arm is a bundle of paper, copies of a Hiroshige print, fresh from a nearby Kinko’s. He runs while staying out of sight, pasting up the large Ukiyo-e posters one at a time — leaving behind prints of “Star-Lanterns” all over the walls. It is like they are windows to another time, allowing a metaphorical leap to the old city of Edo. As the copies in his hand begin to dwindle, cho__eye stops. His work done, he switches the camera function on his phone to front-facing and adjusts his face — although his skin is burnt, he attempts to imbue some subtle nuance to his expression, by a slight movement of his damaged facial muscles. His own work forms the backdrop — one, two, three, say “Cheese” — he checks the image and adjusts the brightness. Behind the camera, that is, in front of the artist, figures are approaching, squaring up their shoulders. cho__eye is captured. The remaining Hiroshige prints slip from his hand, and blown by the wind, scatter throughout the town.

I am running. Alongside the construction machinery tearing down and rebuilding the Kitamachi apartments, I am running...

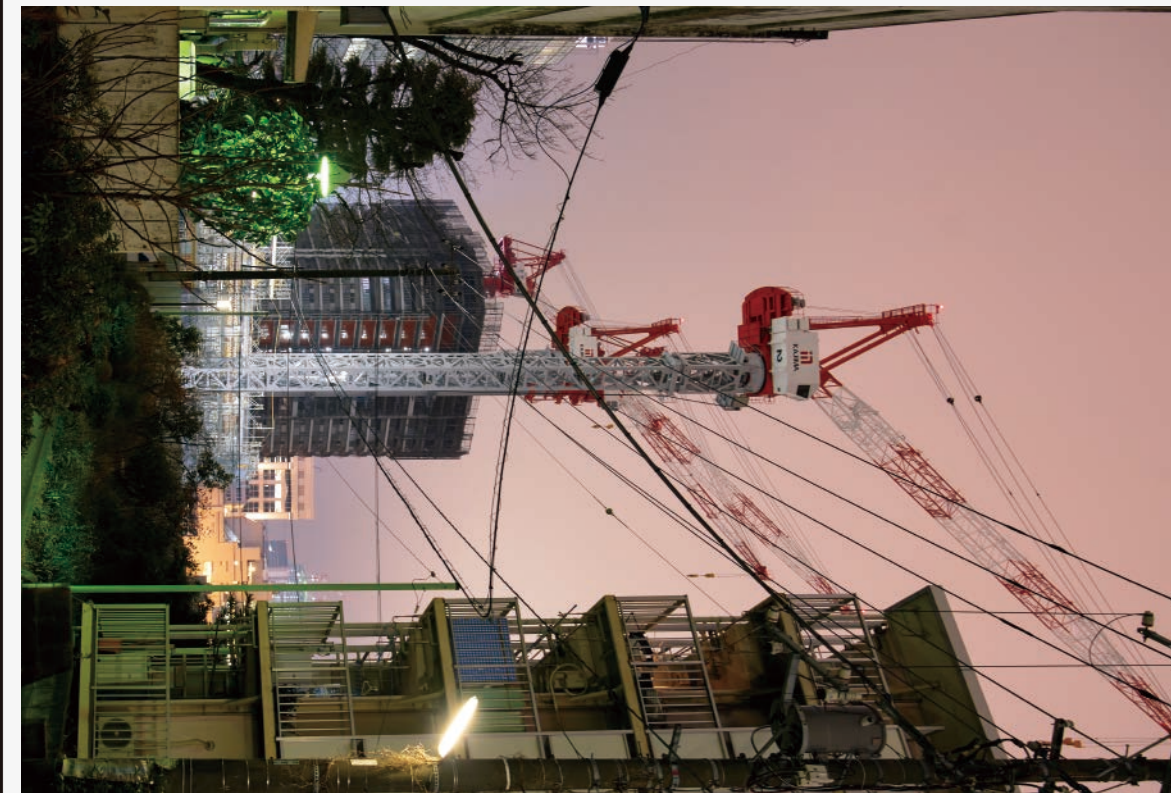
When a place is lost, do the monsters and spirits that once haunted there vanish too I wonder? But then, are there not spiritual presences such as

the “residual haunting” that persist even after the destruction of a physical location? It’s a melancholy thought — but then, things are not that simple it seems. It is not a place that is lost — and the presence haunting there, is an artist.

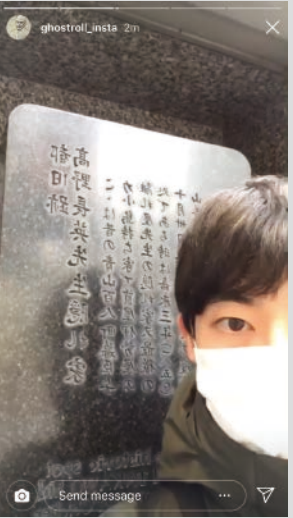
cho__eye is captured — but thankfully nobody knows this artist’s true identity. Ensuring anonymity allows for the possibility of substitution. So prepare yourself for a shock, reader, because I am now in possession of the login password to cho__eye’s Instagram account. This was revealed to me by certain letters depicted in work No. 29 “Private Detective”. Perhaps cho__eye was aware of the approaching danger — and in anticipation, he entrusted me with this information.

One certainty now exists. I must burn my own face.

...I am running. I have taken cho__eye’s place, and as I run, I look up at the construction cranes. I look, with the knowledge that through cho__eye, I have also become a substitute for Chōei. I look, though I can hardly see beyond my burnt and blistered eyebrows. Out of my stricken field of vision, I see right through the town, and peer at the skyscrapers soaring up beyond the housing complex — “So, this is how things were”. A flock of construction cranes stretch their bird-like necks in competition to see who can reach the highest. Everything appears distorted and warped, and seems to sparkle, washed by my own tears. I am running, now running, through the world of Hiroshige.



carrying was for the purpose of some deeper comprehension in regards to cho__eye. It certainly did not contain any hand cream I was now stuck with as a result of being dumped by my girlfriend — this is absolutely not the case — please allay any suspicions on that front (although in such a scenario, “The Downward Spiral” by Nine Inch Nails would make a perfect soundtrack).



Now, all this meandering talk is not all as irrelevant as it may seem, and trust me I have not lost sight of the main thread of my story. To return then, I was strolling around the Spiral building complex when I came across a stone monument. It was hidden away in a recessed space within a column, easy to miss from the bustling main street. This memorial was dedicated to Takano Chōei. And as I mentioned before, was engraved with the debut piece of the artist cho__eye.

Takano Chōei was a radical anti-establishment figure from the Edo period, who studied western science (it seems that as a mark of devotion, traces of the

name Chōei are echoed in cho__eye’s own Instagram account). Chōei was a political dissident with a singular personal history. To escape officials of the military government — who accused him of criticizing the regime — he burnt his own face with nitric acid. But a disfigured face is not the only thing that links him to the artist cho__eye. If you look at an old map of the area Chōei hid out in — a district at that time called Hyakunincho — it matches perfectly with the location of the Aoyama Kitamachi housing complex. With his knowledge of medical science Chōei in fact worked as a medical practitioner, treating the people of this neighborhood while in hiding.



Leaving the Spiral complex, I traced Takano Chōei’s steps back to Aoyama Kitamachi — walking around an area currently undergoing a process of ruin and destruction. The present view of this district contrasts with the disorganized slum it is said to have resembled during the Edo period. On such a street as this, the lonely Chōei must have walked, giving sideways glances

to the hustle and bustle around him — and as he moved about I wonder if he ever experienced that same self-reproach of a voyeur. After all, with his disfigurement he could see the faces of others, but not return their looks with an expression that gave any hint of his own inner world. Is this not, in a sense, the exact meaning of the word “voyeur”?

The scholar Chōei was once pursued by the authorities. Now the artist cho__eye has taken his place, and I have taken the place of the “pursuer”. Separated by three centuries, we tip-toe over the same ground. The steps we three take through this city — our footprints almost seeming to overlap — preserve memories of places that can only be retold in this way, although ghost-like, we leave no fresh trace. These are the recollections of flâneurs and ghostrollers only.

[6th entry]
Untitled

It’s been two months since the last update. A vast amount of time. Today, again, I have nothing in particular to write about — the reason being the deathly quiet state of cho__eye’s account. It occurs to me that the value of an archivist can only be established when they have a vigorously active artist as their subject.
I...am bored.

[7th entry]
Street art or urban crime?

The typical image of graffiti would be of a public building on a city street adorned with someone’s

name rendered in spray paint. But an advertisement billboard, again on a city street, with its message overwritten — let’s say two vertical lines added to a gas station ESSO sign so it now appears as “E\$\$O”, turning it into an anti-ad, making light of a global capitalist system at the mercy of oil money — this is the manner of street art.

For Enrico Isamu Ōyama — a painter whose roots lie in graffiti — there is a tricky issue involved here, as he writes in his book “Against Literacy: On Graffiti Culture”. Put simply, it’s hard to distinguish works of graffiti or street art from ordinary vandalism or other illegal acts.

As Ōyama writes, graffiti culture originated in New York at the end of the 1960s, and “went through a golden age that lasted until the mid-80s” (p.120). Even so, during this period — throughout the 70s — it was “demonized by the city of ‘New York’ and the mass media who portrayed it as a corruption of public morals” (p.143). Representative of these efforts was a large scale clean-up operation known as the “war on graffiti”. This was initiated by the mayor at the time, involving the police and transport authorities, and expanded over 15 years to combine attempts at ridding the streets of the homeless, and promoting gentrification. In this way, the history of street art and graffiti is one of a bitter struggle between the system and the artist, fought over the public property that makes up our urban spaces.

Our focus of interest, cho__eye, is of course not beyond reproach as an urban lawbreaker.

According to cho__eye’s latest, blisteringly honest post, he has been receiving intimidating direct

messages from many people (“realists blinded by political correctness” — as he puts it) trying to stop him in regards to his “bombing” of Aoyama. His previous posts were certainly engulfed by numerous comments, but now his critics are perhaps further escalating their efforts. But the artist himself, rather than shying away from these attacks, actually seems to enjoy bearing the brunt of such criticisms. Almost as if he’s saying: this only brings me closer to Takano Chōei, who himself was once hounded by the Edo police authorities.

[8th entry]
The eyes have it

A brief update.
I have big news. My own individual cho__eye PR campaign has been acknowledged by the man himself. He has direct messaged me — and what’s more, with an image attached.

Looking at the picture for the first time, I realize to my astonishment (yes at last!) it is a new work. I shed a few tears of joy. Should I now share this piece with you, my fellow connoisseurs, by reprinting it here? In the end, after much consideration, since it was addressed to me individually have I decided to respect the artist’s privacy and commit it only to memory.

I will however at least announce that I have given this 29th work the title “Private Detective” (for those readers of an inquiring mind, an addition: there is a hidden meaning here — this piece for me is a record of the private correspondence between myself and cho__eye — “Private Eye” becomes “Private Detective”).

[Final entry]
The tale of the Star Lanterns

Unlike all his previous efforts, cho__eye’s final piece is not original. As far as I know, from the entire body of work produced by this artist — at least what I believe to be his entire body of work — it is uniquely “not original”, but an example of “appropriation”. Although I don’t hesitate for a moment in declaring it cho__eye’s masterpiece.

I catalog it for my records as No.30 “Star Lanterns”. The same title (Hoshi-toro in the original Japanese) as the work appropriated by cho__eye, an Ukiyo-e woodblock print by Utagawa Hiroshige which depicts a custom practiced in Hyakunincho during the Obon festival. However my acknowledgment that it is a masterpiece is not simply an acknowledgment of its level of completion, but derives from my own personal experience. Only in those moments when there is an unsuspected and dramatic encounter with a work, only then is the observer’s critical eye disturbed from its intellectual reasoning.

Let me then record here for posterity, the tale of the “Star-Lanterns”.

Chōei is running. It is 1839 (the 10th year of the Tenpo era), during what later would be referred to as the “Bansha no goku” incident, a brutal suppression of students of western sciences. He runs but is caught and pinned down by a constable — the cruel misery of jail awaits him.

“Pokémon Go”, an augmented reality game — now we can capture ghostly fragments of data that only the camera on our smartphones can see. I dare say this game should have originally been called “Pokémon Ghost”.

These camera phones, small enough to fit into the palm of our hands, are still strange devices that draw spirits out of the ether I think. Although mechanical shutters and photosensitive plates now have digital substitutes, it is the accumulation of pixels — brimming with an electronic spiritual presence — that we now collect.

And here I come to my point: the Minato ward’s ghost that I am following, and has me completely under its spell, actually appears to me in images captured by such a device, using a smartphone app. Ultimately I am pursuing a spirit that reveals itself through the self-reflecting eye of Instagram. The “Ghost in the Self-portrait” so to speak.

I’ll finish with this fanciful talk for now — but within the next few days I should be able to post a ghost story here — one you would be most foolish to miss.

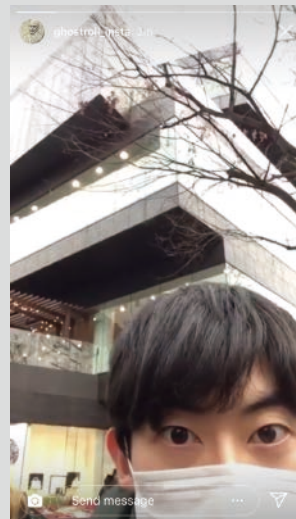
[3rd entry]

Gast me if you can

It was a little over an hour ago — a Story update on a certain Instagram account. At last, we can bow down in reverence to another phantom image.

As always, I prepare myself for the worst as I tap the circular, rainbow-colored icon. Trying not to look directly at the horrifying face that appears on the screen, I focus only on the buildings in the

background, attempting to pin down the location of this specter. I can see a fashionable shopping center, steel structured, with layers piled on top of one other, sticking out in all directions like a clumsily built Jenga tower — of course! It has to be the Gyre building on Omotesando — I leave the coffee shop on Aoyama Dori where I have been sitting, and walk quickly in that direction.



[fig.1] A self-portrait in front of the Gyre building, with the same composition as the picture posted on the ghost account. The figure you can see is myself — I could hardly expose the reader to the original grotesque image, could I?

Turning out of an alleyway from Aoyama Dori, I head to a place of strong spiritual power. I keep walking, pounding the streets, towards the Aoyama Kitamachi housing complex. Before long, something catches my eye — a line of poetic advertisement copy displayed on the wall of an apartment under redevelopment.

To use street art terminology the site has been “bombed”. What greets me is an artwork stamped

onto the wall’s surface, a piece I instantly decide to call “Jenga”, as its chaotic shape is just like that of the Gyre building. As far as I am aware, this work of street art is the twentieth by the ghost-like figure I have been following. The artist himself always captions his works “Untitled” on his Instagram page, without even numbering them. As an ardent fan, with a somewhat curator-like compulsion to collect things, I like to attach my own very personal title to each piece, and place them in my own inner collection.

Looking at it again, it is truly an extraordinary work...I stay transfixed in one corner of the housing complex — a middle-aged man, seemingly a resident, walks his dog nearby and gives me a cold hard stare, but I am doing nothing wrong. A fence divides me from another world — on the other side I can see a construction vehicle demolishing an old house. Corrugated iron is crushed, a white cloud of concrete dust rises up, and then in that moment a roaring, rumbling sound reverberates in the air. The man’s dog however is utterly unconcerned. He does not bark or howl, but acts as if all this destruction is just a trivial everyday occurrence.

I look at my phone. The app has been updated. My heart begins to pound in my chest as I reach to tap the screen. Are you still close? Perhaps behind that fence? Just the place for a ghost to haunt — and then finally, I could meet you face to face — today, perhaps today...Clinging to this faint hope (as I have done many times before) I touch the rainbow-colored icon with my fingertip.

There on the screen, with his own artwork behind him, another of the ghost’s self-portraits. He

appears on exactly the same spot where I am now standing.

It seems that once again I have been left behind. Or perhaps I should say he has departed ahead of me. Yes, maybe that’s it — departed, of course, in both senses of the word.

[4th entry]

Step forward cho__eye, the phantom’s real identity

The ghost that haunts this housing complex is in fact a street artist named “cho__eye”. At least that is what he calls his puzzling Instagram account. Although his name has an Asian ring to it, drifting in on an eastern breeze, cho__eye’s nationality, age, and sex are unknown. To guess from the various European languages that appear abruptly next the photos uploaded on his account, he is an accomplished linguist. The account has roughly 10,000 followers.

This is all the information I have on cho__eye (I use the male pronoun for now, as in his self-portraits cho__eye’s shoulders appear to have the broad shape of a man’s).

Other than in the work itself, proof of cho__eye’s authenticity resides in his own horrific countenance. The artist has disfigured himself. In his own words: “Living under data capitalism, I must remain anonymous”. He has etched into his own face a protest against the world as it is today — dominated by social media, and the big four tech empires of Google, Amazon, Facebook and Apple. This is his trademark — an Instagram Story photo showing the lower half of a man’s face from his eyebrows

down covered with blistered skin, and the Aoyama Kitamachi housing complex as a backdrop.

Social media overexposes our lives, although conversely, because individual identities are impossible to authenticate, we remain completely anonymous. While Instagram is a “facial economy” where selfies are peddled around and quantified by the number of “Likes” they get, there is an ontological uncertainty in this strange co-existence — without contradiction — of both notoriety and anonymity. It is for this reason I refer to cho__eye as a ghost. Social media cannot bear to remember his face. Nevertheless, for all his 10,000 followers, the memory of it is burned into their consciousness.

And I am utterly bewitched by this ghost’s charms. Perhaps you can understand this in part...

[5th entry]

The flâneur and the ghostroller



Welcome to my ghostroller collection. Perhaps I can give you

a gallery tour? Well then, to begin with please regard this first work.

This is cho__eye’s first piece and should be commemorated as such. I have given it the title “Chôei” as part of my own personal record. But let me now explain the meaning behind this name, the secret caption belonging to this work, and a ghost story spun from the history of Aoyama.

One day, I happened to be strolling around the Spiral building on Aoyama Dori. The complex is a multipurpose cultural center, with various shops and beauty salons giving a colorful glimpse into the exclusive upper-class life of Minato-ku. As I walk the paper shopping bag of a certain skincare brand swings from my hand. Now, before any readers imagine I am like one of those dating couples you see swaggering arm in arm along Aoyama Dori, looking down upon the ordinary singletons like conquering Caesars, let me stop you. No-one can say they love this city more than me. Cities as modern commercial spaces should never be experienced in this way. To strut in the manner of an invader or statesman, more suited to a citadel town with streets radiating out from a central temple — this is wholly incongruous to Minato-ku’s Aoyama. Rather, we should confront this neighborhood like Baudelaire would — as a curious spectator — or through the eyes of Walter Benjamin and his idle wanderings, or Eugène Atget — the photographer Benjamin wrote of — who made empty street corners his subject. We should walk the modern city as a flâneur, casting our glances sideways, with the unshakable self-reproach of a voyeur. Incidentally, the bag I was

that to disguise himself, he burned his own face with acid^[*5]. He chose Aoyama Hyakunin-chō, where Aoyama Kitamachi housing complex is located, as the place to hide himself, because he had some acquaintances there. Our intention, here, was to take this completely unconnected event and create a fiction of “continuity” that joined Hyakunin-chō with the current Aoyama Kitamachi housing complex.

/ Hoshitōrō (star-lantern) in Hyakunin-chō /

There is another element that was important in creating a fiction that joined Hyakunin-chō with the Aoyama Kitamachi housing complex: Hoshitōrō, which has become well known through its depiction in Hiroshige’s print series *Shokoku meissho hyakkei* (*One Hundred Views of Famous Places in the Provinces*). Aoyama Hyakunin-chō came out of the building of residential dwellings for *yoriki* samurai families, who served the Tokugawa chief of the time, Tadanari Aoyama. The buildings’ high fences, meant the area was dark day and night. The name “Hyakunin-chō’s Hoshitōrō [which literally means star-lantern]” came from the many lanterns that were lit, like stars, during the period of Obon to mourn the second shogun Hidetada. Even today, as we approach the end of the Heisei Period, a repetition of this fantastical glittering of lanterns that symbolized this area, can be glimpsed through the gaps between houses in the groups of buildings and silhouettes of cranes

used for reconstruction.

Needless to say, there is no clear identification between the landscape of the second shogun period and that of today. But Solà-Morales’ idea of “continuity” allows us to ask whether there isn’t some relation discoverable between things that seem like they are completely disconnected; or, whether an area of land can’t be considered a sort of vessel in which disconnected individual events can coexist. Is this not the magic that an area of land or regional ties, can create?

/ Buildings are Created for the Sake of the City’s Empty Space /

Aoyama Kitamachi housing complex, Chōei Takano, Hoshitōrō. Attaching these elements, which are not originally connected with each other, through a fabricated fictional history; and through this, collapsing the many contexts which sleeps within this area into one. This produces a resistance to oblivion, and sends well-wishes to the “terrain vague” of Aoyama Kitamachi housing complex.

From here, we turn to the serial short stories, published in blog-form, that follow the fictional street artist who devotes a homage to Chōei Takano. In this short fiction, buildings are depicted as mourning the city’s blank space, rather than being built on that space. This short work hopes to put forward the point of view that takes the cranes of Tokyo as its redevelopment continues as the vision of Hoshitōrō.

1. Ignasi de Solà-Morales, “Terrain Vague,” translated by Tanaka Jun, in Isozaki Arata, and Asada Akira eds., *Anyplace: Problems of Place (Anyplace: Basho no sho-mondai)* (NTT Publishers, 1996).

2. Other research that proposes Aoyama Kitamachi housing complex as an example of “terrain vague” can be found in Sayo Iwamoto “Terrain Vague Network: On the Redundancy of Cities and the Behaviour of Buildings” (2017): <https://www.jia-kanto.org/shushiten/2017/data/16/index.html>

3. Solà-Morales, *op. cit.* p. 130.

4. *Ibid.*, p. 133.

5. The historical facts of Chōei Takano’s life are unclear in many instances, not only in relation to this episode. See Satō Shōsuke *Chōei Takano (Chōei Takano)* (Iwanami Shoten, 1997).

The Selfie-taking Ghostroller:

The story of Aoyama and the Artist “cho__eye”

Rhetorica (Tomoya Ohta, Tomoya Matsumoto, Masami Ishii, Ryo Nagara and Ryo Yoshiya)

Weblog for Ghostrollers

[1st entry]

Dispatches from a ghostroller

A specter is haunting Aoyama — crawling out of the cracks of its history, roaming the city at will — just such a spirit exists.

I do not say this merely for effect.

He leaves no footprints, but marks his presence on the walls of the city blocks, before slipping out of sight. No matter how quickly you race to the scene, he will be gone. Even if by some chance your paths should cross, his face, a monstrous horrifying thing, would engulf you in its miasma — your mind would unravel, and close in on itself. If such a presence cannot be called a ghost then what is it?

Perhaps, walking along Aoyama Street you yourself have been possessed by this spirit. Window shopping outside Fumihiko Maki’s Spiral building, perhaps...but, let’s leave that story for another time.

As for me, I walk the streets in pursuit of this ghost. A “ghostroller”, to coin a phrase — for that is all I am — and one that is in all honesty obsessed. I am under the spell of a series of phantom images and the photographer who took them, whose own true nature is unclear. It is so I can pass on all I know of this figure that I begin this blog.

[2nd entry]

Ghosts in the Self-Portrait

Ever since the middle of the 19th century and the early days of photography, photographic equipment has been picking up ghostly images. Let me begin this entry then with a conjecture — that the camera is in fact a type of “Ghost Hardware” (this phrase is one I’ve taken from the title of a song by Burial).

Pioneering photographers like Louis Daguerre and Joseph Niépce used members of the nobility as their first subjects.

When confronted with a bulky black box placed in front of them — and assured it was not just for show but would indeed capture beams of light — the aristocrats genuinely feared their souls would be drawn from their bodies.

The creative power of this idea — cameras used as a device to literally drive away or capture spirits — has taken hold in the field of video games. One such work is the Japanese-made horror game “Zero” (known as Fatal Frame or Project Zero in the west), which broke new ground, creating a separate sub-genre, as well as giving rise to the indie title “DreadOut”. Nintendo’s “Pokémon Snap” could also be said to fit into this genealogy, in the sense that here was a game where you roam a polygon shaped world of mountains, hillsides, and valleys searching for small creatures that nested only within your own imagination — creatures that should not normally be visible. It naturally follows that we arrive at the mobile app

Is Hoshitōrō Mourning the City's Empty Space, or "Terrain Vague"?

Tomoya Matsumoto (Rhetorica)

Taking a side street off the buzzing Aoyama Street, its outline appears: through dense greenery, a building built over fifty years ago, giving off a distinguished air. This view of Aoyama Kitamachi housing complex is disappearing as I write, in March 2019, as redevelopment plans get underway.

We have a responsibility, at least symbolically, to preserve these marginal areas, for very few of them remain in Tokyo's Minato ward. This is what motivated our decision to create the fictional work *The Selfie-taking Ghostroller: The story of Aoyama and the Artist "cho__eye,"* a fictitious blog containing articles and pictures (with writing by Tomoya Ohta, design by Ryo Nagara, photographs by Ryo Yoshiya, and concept by Tomoya Matsumoto

and Masami Ishii.

The question is why choose Aoyama Kitamachi housing complex? In what way is this building and its surround marginal? Going back in time to 1900—the beginning of this area's history—the "Tokyo Teachers College" new schoolhouse was constructed in Aoyama for the purposes of teacher training. Following this, it was used by countless educational organisations as a schoolhouse, until it was completely burned in the air raids on Tokyo. The first metropolitan residence built in this razed area after the war, was the present Aoyama Kitamachi housing complex.

/ Aoyama Kitamachi housing complex as a City's Empty Space, or "Terrain Vague" /

This site, situated almost at the border of the Minato and Shibuya wards, has watched over the high growth of the Aoyama-Omotesandō area since the end of the war. It seems strange, now, that this site exists just on the other side of Aoyama Street, which has become a high fashion spot in recent decades. It is as though time in Aoyama has only stopped in this strangely quiet plot. The character of this site overlaps with architect Ignasi de Solà-Morales' concept of "Terrain Vague" [*1][*2].

The term "Terrain Vague" (literally meaning something like "vacant plot") is, according to Solà-Morales, "a portion of land in its potentially exploitable state but already possessing some definition to which we are external" bringing together the meaning of "terrain" with that of "vague," which contains the etymology of "wave" and the nuances of "emptiness" and "vagueness." Through this term he identifies the double meaning of these spaces in terms of an "the absence of use, of activity, and the sense of freedom,

of expectancy." These spaces "as internal to the city yet external to its everyday use", "exist outside the city's effective circuits and productive structures." [*3].

Surely, Aoyama Kitamachi housing complex, as a hole that opens up within the solid centre of the city's productivity, awakens this sense of an "absence of use and activity," and, at the same time, "the feeling of freedom and expectation." This is a city's empty space at the heart of its functioning life, that allows for that functioning, itself, to be observed. This site is the strange place of a "vacant plot" for both the Aoyama-Omotesandō district and the larger Minato ward.

The empty space of the Aoyama Kitamachi housing complex, was fated to become an empty space with its destruction for redevelopment purposes. Redevelopment, itself, is not a matter of right and wrong, it is a natural component of a city's biorhythm. It might also be correct to say that a building that has been standing for over fifty years has achieved its "lifespan." As Solà-Morales puts it, all buildings are colonial constructions in that they naturalize strangeness [*4].

He suggests that if architecture can contribute anything by considering a city's empty space, or "terrain vague," it is an "attention to continuity." That is, there is a trace of something that remains within any constructed building.

What exactly are these redevelopment plans? And what kind of "continuity" do they preserve? We cannot know. But essentially, the redevelopment conflicts with a city's empty space. We decided in this magazine, to stand on the side of a city's empty space, for the sake of debate, and present a monument in their defence. This monument represents a fiction of "continuity" constructed out of the many gathered fragments of this site's historical existence.

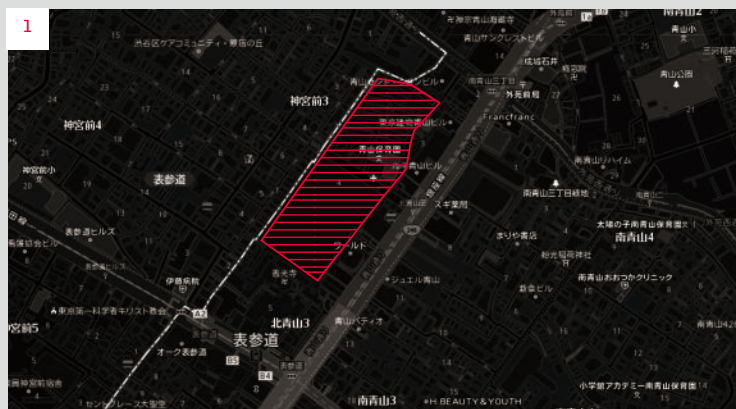
/ The Dutch Studies Scholar, Chōei Takano, Deceased in this Area /

One such fragment is the late Edo period Dutch Studies scholar, Chōei Takano, who died in this area. He translated European military documents, and was known as a scholar who promoted modernisation and rigorously opposed the shogunate's policy

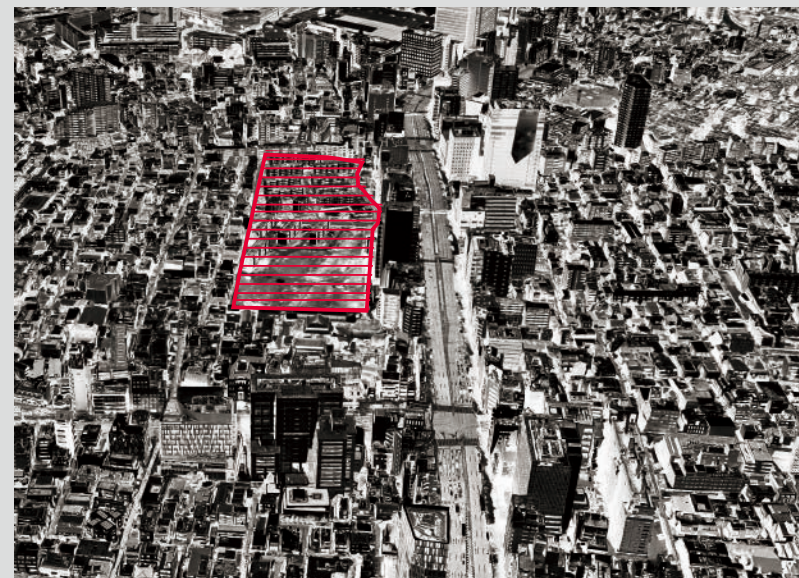
of national isolation. Even today, there are monuments to him in the commercial "Spiral" building (designed by Maki Fumihiko) that runs along Aoyama Street, and in the Zenkō-ji temple, beside the Kitamachi building.

Chōei's life, alone, makes for a story full of ups and downs. Having studied medicine and Dutch Studies at the Siebold's Narutaki School, he had excellent linguistic abilities, and went on to found his own Dutch Studies school, as a town doctor. Chōei's position, as a translator of western writing, and a follower of the most advanced western thought, and as an opposer of the policy of national isolation, became dangerous. He was among those punished with life imprisonment as part of the "*bansha no goku*" (the 1839 suppression of scholars of Dutch Studies). Despite petitioning for amnesty, Chōei spent five years as a political prisoner in Tenma-chō prison. Having given up on any hope of legal release, he persuaded a fellow prisoner of the "*hinin*" class, called Eizō, to commit arson. During the confusion, he managed to escape from prison. Evidently, this was considered a serious crime, and he was marked as a wanted criminal throughout Edo. He fled Edo and managed to extend his life through relying on old acquaintances, before eventually returned to Edo and worked in hiding as a doctor in Aoyama Hyakunin-chō, until he was attacked and killed by officials. It is uncertain whether the claim that he in fact killed himself is true or not.

It was incredibly risky for Chōei to work as a wanted man in Edo in a job that required him to have face-to-face dealings with patients. Forced into this incredibly threatening situation, some say



▲ Map of the area



▲ aerial photography

基本情報：青山北町アパート	
竣工年	1968年
戸数	376戸（25棟）
敷地面積	約4ヘクタール

▲ Current information: date of completion, number of houses, site area, etc.

G. In most of the Totō Tenjin-zu paintings, Tenjin himself wears a long hood and a Chinese robe, together with a bag hanging from his left shoulder to his right hip, and also holding a twig of plum tree. By following these rules, Totō Tenjin-zu were produced in large numbers. Besides, in the early days, Tenjin was painted stockily built—where you can see in the exhibition catalog “The Art of ZEN: From Mind to Form” (Published by Nikkei Inc. in 2016.); no. 238 and no. 239. The famous painter, Motonobu Kano (狩野元信) painted Tenjin with his face facing the viewer straight on, along with his right arm slightly forward. The painters of the Kano School followed this way of painting. However, Shokei (祥啓), who was a Zen priest as well as painter at Kencho-ji Temple in Kamakura, painted Tenjin in a profile in Suiboku-ga [水墨画] (ink painting).

the reason that the title contains the character ‘続 (zoku, literally “continue” in English)’ is because for about 10 years before, Kōsei Ryūha [江西龍派] has also compiled a book entitled Shinsen bunrui shoka shikan [新選分類諸家詩卷] (manuscript of the Shin-senshū) with almost similar contents, and Zoku shinpen bunrui shoka shishū was considered to be its sequel.

3: Chokushū Hajō Shingi Shō [勅修百丈清規鈔2巻] (the Imperial Edition of Baizhang’s Rules of Purity). Copied in 1516 (Eisei [永正] 13).

The original version of this book is entitled Chokushū Hajō Shingi [勅修百丈清規]—a general behavioral guideline for individual monks. Procedures for routine activities and events were compiled during the Chinese Yuan Dynasty by the order of emperor. Then for this book, first, a priest from Tofuku-ji Temple [東福寺] made a lecture and explained about the contents of Chokushū Hajō Shingi. Then, a priest from Shokoku-ji Temple took notes about that, and compiled it as a book—in the middle of 15th century.

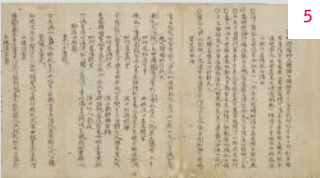
This manuscript was hand-copied by Hōshuku Shusen [彭叔守仙] (1490-1555)—representative academic priest at Tofuku-ji Temple during the 16th century—and his friend when Hōshuku was only 27 years old. In the picture, you should be able to see a black square-type stamp, which is an ownership stamp (called Zōsho-in [藏書印]) from ‘Zenne ken [善慧軒]’—a Tatchu of Tofuku-ji Temple where Hōshuku belonged. In fact, Zenne-in still exists today and after the Meiji Restoration, the place was known as a headquarter of komuso [虛無僧] (Zen

monks playing a shakuhachi bamboo flute). However, except for only a few of his signed manuscripts (e.g., collection of poems), most of them were gone outside. Afterwards, the Library at Tokyo Imperial University [東京帝国大学図書館] obtained many of them, but most of them were burnt in the Great Kanto Earthquake.

4: Totō Tenjin-zu (Gukyoku Reisai San) [渡唐天神図(愚極礼才贊)]: a portrait painting from the Muromachi period.

This is a painting called Totō Tenjin-zu Totō Tenjin-zu [渡唐天神図] (Image of Tenjin). Sugawara no Michizane [菅原道真] (845-903)—who is also known as “the god of learning [学問の神様]”—was deified as a god and received a posthumous name “Tenjin” after his death (due to a curse). However, as you can see in this painting, he is dressed up in an unusual style—wearing a Chinese robe, with a bag at his waist, and also holding a twig of plum tree—which is based on a mysterious legend of Michizane[G]. According to the legend, Tenjin apprenticed himself to a Chinese priest: Bujun Shibān [無準師範] (also read Mujun Shihan), succeeded his teaching, and was given a robe as a proof of his succession. Despite the fact that Bujun was a priest who lived his life in the beginning of 13th century (and to establish master-disciple relationship, they needed to overcome the time as well as space), this story spread nationwide and was believed as true miracle. However, according to the caption written in the upper part of this painting, it says that Enni [円爾]—who used to be Bujun’s disciple and became a founder of Tofuku-ji Temple—recommended

▼ List of artworks introduced in the section 3



Michizane to be Bujun’s disciple, and I assume that the priests in Tofuku-ji Temple, including Enni, were the ones who ‘made up’ this legend. Among many Buddhist sects in Japan, Zen sect was established quite later, and there were often many troubles with the older Tendai sect [天台宗] or Shingon sect [真言宗]. Therefore, I assume that the legend about Michizane, the story that he studied in Zen sect, was a fabrication to indicate the legitimacy of ‘Zen’ in Japan. By the way, the story about Daruma (達磨) and Shotoku Taishi (聖德太子)—Daruma Daishi came to Japan and met with Prince Shotoku—is also an improbable legend which was made in the Kamakura period. This also might be just a ‘story’ with the same purposes.

5: Kyōun-shū [狂雲集] (Mad Cloud Collection): an anthology of poems from the middle of Muromachi period.

The last work I would like to introduce is Kyōun-shū [狂雲集] (Mad Cloud Collection): an anthology of poems written by Ikkyū Sōjun [一休宗純]. The postscript (okugaki [奥書]) with its date 1472 (Bunmei [文明] 4) is written by Ikkyū himself. However, the anthology is considered to have been compiled by his disciples, making a fair copy of Ikkyū’s work. There are revisions made by different hands, and the revisions seem to have been made by 1478 (Bunmei [文明] 10). Although there are various versions of Kyōun-shū (its manuscripts), the content of this edition was comparable with a book owned by Shinjuan, one of the Tatchu located in the site of Daikoku-ji Temple [大徳寺] where Ikkyū’s disciples were based.

As you may already know, Ikkyū is well-known for his quick wit (known as Tonchi Kozō [トンチ小僧] in Japan). However, he also gained a reputation with his fiery temperament. His calligraphies are very popular. At the exhibition, there are no real calligraphy (so called shodo [書道] in Japan) from Ikkyū himself, instead, we display reproduced works, anthology of poems (such as Kyōun-shū, etc.), and collected novels written in the Edo period, which are also known as the origin of Ikkyū’s quick wit legend story.

Conclusion

Throughout the lecture, I discussed how the scholarship and culture of Zen were nurtured in Tatchu—the living space—by the support of personnel and economical resources, and further see how they have survived after many long years of war, as well as various social changes, and still have been preserved to this day.

I do hope that people in Zen Buddhist temple will continue preserving this unique Japanese culture. Yet the books that were displayed at the exhibition were compelled to relinquish after the Meiji Restoration, then purchased by the library and/or Institute of the Oriental Classics (through the second-hand bookstores). Accordingly, the books are now carefully stored and treated as a subject of research. In that sense, we are also performing the role of preserving as well as succeeding the culture of Tatchu, to the future.

E. The photographs taken during the research sessions are microfilmed and the first edition (until 2009) is available as ‘Catalogue for the microfilms produced from the books and manuscripts collection in the Ryosoku-in Temple: first edition [慶應義塾大学附属研究所斯道文庫撮影建仁寺兩足院蔵書マイクロフィルム目録初編]’ (<https://ci.nii.ac.jp/naid/120004770626>) You can download the catalog from the Keio Ssassociated Repository of Academic Resources system (KOARA): http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20100000-0239 (Japanese version only)

2.Ryōsoku-in <https://ryosokuin.com/>

3.Keio University is a partner of FutureLearn, a social learning platform based in London, UK, and since 2016 Keio has been offering original online courses. The course “Sino-Japanese Interactions through Rare Books” is one of the 3 companion online courses for Japanese rare books, and alongside this course, a course entitled “Japanese Culture Through Rare Books” and “The Art of Washi Paper in Japanese Rare Books” are also available on FutureLearn. For further details regarding the FutureLearn online course design, please refer to the research paper published in the online academic journal called DMC Review (Japanese version only): FutureLearnプロジェクトにおけるオンラインコースの開発 (<https://ci.nii.ac.jp/naid/120006312475>), written by Akinori Takanobu, *DMC Review* 4(1), pp. 34-41, 2017-03 (Published by the Research Institute for Digital Media and Content, Keio University)

to maintain, as well as develop the culture during the Muromachi period—through personnel and economical resources.

／ What I Feel from Researching the Collections at Ryōsoku-in [兩足院] ／
At the Keio Institute of Oriental Classics, where I belong, we conduct research (regularly every year) on the collections housed in Ryōsoku-in[E]. Whenever I visit there, I highly respect the works of successive chief priests where they have spared no effort in adding a collection. From the 16th through 19th centuries, the descent of the chief priests has obtained and copied the books/ manuscripts, and finally established the rich collection of rare and precious books—which I always get impressed.

For example, there are some books (records) about kanshi [漢詩] (Chinese poetry) party which was held inside the Tatchu. The chief priest and the ascetic monks were reading/studying kanshi together. Also, some books were written/kept like a database—e.g., collected and combined specific articles from many different books—where all works in the past can be commemorated.

These books were handed down from the chief priest who first made them to another, revised and supplemented. In some case, they worked for three generations and continuously made additions.

Making an assumption through examining the brushstrokes is also important to understand the date and/or background of establishment.

／ Ryōsoku-in [兩足院] Today ／
Today, Ryōsoku-in (its buildings

and gardens) is open to the public on specific days, according to the season. In addition, they provide opportunities for Zen meditation (so called Zazen [座禅]), Yoga, as well as various types of lectures and exhibitions. Furthermore, the Omura family donated two chashitsu [茶室] (tea-ceremony room) Inside the precinct, and they often hold tea parties as well[*2]. For details, you can refer to the official website, yet now let me show you a video we shot at Ryōsoku-in.

This video is an online course content from Keio University. Keio University has been joining an UK-based MOOCs (massive open online courses) platform called FutureLearn, and various kinds of original online courses have been made available worldwide on the Internet. The faculty members of the Keio Institute of Oriental Classics were in charge of making 2 courses, both focusing on introducing Japanese rare books as well as the cultural history of Japan. One of the courses was entitled “Sino-Japanese Interactions through Rare Books” and shot the introduction video at Ryōsoku-in[*3].

The temple was built at the end of Edo period. During the winter, when you walk on the wooden flooring corridor or engawa [縁側] (veranda of a Japanese house), it is freezing cold—even if you have your socks on. And of course, the ascetic monks must have walked there on barefoot. When I visit the place for research, I sometimes wonder about their past lives.

F.“Treasures from Century Cultural Foundation: Calligraphy and Books of Zen Priests” (<http://www.art-c.keio.ac.jp/en/news-events/event-archive/century2018/>) An exhibition catalogue with detailed explanation of all exhibited works is published as well (Japanese version only).

3. Exploring the Culture of Zen Temples through Books—Introduction to the Exhibition at Keio

We held an exhibition at the Keio University Mita Campus, from 12 November through 14 December 2018, entitled “Treasures from Century Cultural Foundation: Calligraphy and Books of Zen Priests.” The exhibition was co-organized by Keio University Institute of Oriental Classics (Shido Bunko), Keio University Art Center, and Mita Media Center (Keio University Library).

The Century Cultural Foundation [センチュリー文化財団] was established by the founder of Obunsha [旺文社] (a publishing company in Japan) named Akao Yoshio [赤尾好夫], to collect, study and exhibit cultural assets of linguistic importance from artistic and cultural viewpoints. To perpetuate research and disseminate knowledge of their collections, recently, many of the collections were consigned to Keio University, and all collections will be donated to Keio in the near future. To bring the consigned works of art to public view, an exhibition has been held every year. And in 2018, the exhibition theme was “calligraphy and books of zen priests” and had a deep connection with the topics of this lecture. Hence, from now, let me introduce some of the works which were displayed at the exhibition[F].

1: Zoukan Kousei Ou Jyouden Shicchu Bunrui Tōba Sensei Shi [増刊校正王状元集註分類東坡先生詩 (20巻後

集10巻)1. Published in the later 13th century in China.

This book is a poetry collection of a politician in the Northern Sung of China: Su Shi (1036-1011), who was called Soshoku [蘇軾] in Japan, and his poems are classified into details according to its contents, followed by the annotations. Soshoku was the most beloved poet among the monks in Gozan, and his book was not only imported from China but also published in Japan as well.

The greatest feature of this book is that it contains innumerable commentaries of the Japanese Zen monks. First, the blank spaces were used, yet after lacking of space, they once split all pages, stucked the pages into a larger paper, then bound again and kept adding the commentaries. Further, when they could not make up with the blank spaces, they wrote the commentaries in some different papers, then stucked or bound it to the book. From this book, you can deeply understand the scholarship—the way of studying—of the monks in Gozan.

2: Zoku Shinpen Bunrui Shoka Shishū [続新編分類諸家詩集] (manuscript of the Shin-penshū). Copied in 1474 (Bunmei [文明] 6).

This book is an anthology of Chinese poems, Kanshi [漢詩]. Approx. 1,200 poems—made from the 7th through 14th century (from the Tang to Ming dynasty in China)—were categorized by its theme, and copied in 1474 (Bunmei [文明] 6).

The person who edited this book was Botetsu Ryūhan [慕哲龍攀] whom I mentioned before, in the talk about Ryōsoku-in, and assumed to be compiled in around 1410. Also,

1.The following description is based on the book: Oryu Iin [黄龍遺韻] (published 1957) written by the former chief priest of Ryōsoku-in, Ito Tōshin [伊藤東慎師].

学問づら, ” literally “Scholarship face (always studying)” —which is also a cynical remark to be said.

/ The Foundation of Ryōsoku-in [両足院] / Inside Kenninji temple, Gakumon zura, the most important Tatchu is Ryōsoku-in [両足院][fig.4]. Since it was built in the 14th century, Ryōsoku-in represents a wealth of cultural properties, such as books and documents[*1].

Ryōsoku-in was founded by Ryūzan Tokuken [龍山徳見] (1284-1358) who was born in the Chiba clan, a warrior family (which is now Chiba prefecture). He moved to Kamakura to practice Buddhism, then went to China and spent 45 years there studying whilst became a chief priest at a Zen Buddhism temple. After he returned to Japan, he became a chief priest at Kenninji temple, Nanzen-ji Temple, as well as Tenryu-ji temple [天龍寺]. Although many accomplishments were made, at Kenninji temple, he gave academic instructions to Gido Shushin [義堂周信] and Zekkai Chushin [絶海中津] — who later became the major writers of Gozan Bungaku [五山文学] (literally, Five Mountain Literature), and further this became the starting point of traditional scholarship of Kenninji temple. Ryūzan Tokuken himself have died at Kenninji temple.

After his death, his two disciples became the chief priest and each of them founded a Tatchu after their

retirement. One is Ichian Ichirin [一庵一麟] who founded Reigen-in Temple [霊源院], and the another is Mutoh Irin [無等以倫] who founded Chisoku-in Temple [知足院]. And formally, both considered Ryūsan Tokuken as the patriarch.

In Reigen-in Temple, there were many disciples from To clan (so-called Tō-shi [東氏]) — a branch line of the Chiba clan family where Ryūsan came from — located in Mino [美濃] (which is now Gifu prefecture). To name a few; Kōsei Ryūha [江西龍派] — one of the most important people when it comes to the history of scholarship and literature of Kenninji temple —, Kyūen Ryūchin [九淵龍琛] — appointed as the envoy to China in the middle of 15th century —, and Botetsu Ryūhan [慕哲龍攀] — mentor of Ikkyū Sojun [一休宗純] during his boyhood — who were all active.

On the other hand, in Chisoku-in Temple, there were many descendants of Rin Jōin [林浄因] who came from China along with Ryūsan (when he returned to Japan).

Rin Jōin’s family managed a manju (steamed buns) shop [饅頭屋] in Nara prefecture, and the descendants still run the shop as a long-established Japanese confectionery shop called ‘Shiose Sohonke [塩瀬総本家]’. Also, Mutoh’s disciple, Bunrin Juiku [文林寿郁] is from the Rin family (so-called Rin-shi [林氏]) as well, and he built a new Tatchu after retiring the chief priest at Kenninji temple — which is known as Ryōsoku-in.

In 1552, Tenbun [天文] 21, when most parts of Kenninji Temple was burned down in a fire, Chisoku-in Temple was merged into Ryōsoku-in. In addition, Reigen-in Temple suffered from financial difficulties,

and it was kept under the control of Ryōsoku-in. Yet, in this way, Ryōsoku-in succeeded in their studies and literature, and became the most important Tatchu at Kenninji Temple.

/ Ryōsoku-in during the Edo Period /

During the Edo period, the Omura family, an influential merchant located in Kyoto, became a patron of Ryōsoku-in. Their trade name was Shirokiya [白木屋], who ran a kimono fabric shop (so called Gofukuya [呉服屋]). After the Meiji period, they opened department stores throughout Japan. Maybe some of you know that in Tokyo, the “Shirokiya department store” was located in Nihonbashi[fig.5], present day ‘COREDO Nihonbashi.’ Anyhow, with all those financial supports, Ryōsoku-in accumulated academic achievements for decades.

One of the achievements is: during the Edo period (under the national isolation policy), the Japanese shogunate permitted official trading only with two countries (the Netherlands and Korea) and with Korea, they exchanged diplomatic papers through Tsushima domain [対馬]. The shogunate employed superior Zen monks from Kyoto Gozan, and sent them as officials to take care of writing the papers. From Ryōsoku-in, four monks were elected and sent to Tsushima seven times in total[D].

/ Conditions to Preserve and Succeed Tatchu [塔頭] /

Based on these histories, we know that both financial and academic support are both important to maintain and preserve Tatchu. As for

academic support, it is important to have an individual with exceptional ability, who can succeed skills and techniques — the scholarship — from the master, and ‘books’ were great resources. Books have played a major and essential role in accumulating the information, handing down the scholarship to the next generation. Some of the books were imported from China, some were published in Japan, and some were circulated only in the form of manuscripts. And further, some books were copied by their own hands. However, to acquire books, what they first need was ‘money.’ Even if they copied the books by hand, they needed paper, brush and ink. Thus, to succeed scholarship, the financial base was also a ‘must.’

People, goods and money. All three are indispensables to maintain Tatchu for a long time over decades.

As for Ryōsoku-in, the Tatchu accepted many members from Tō-shi [東氏] in Mino [美濃] and Rin-shi [林氏] in Nara [奈良]. Although Tō-shi [東氏] were the samurai in a local region, they produced a successor of the Kokin Denju [古今伝授] — the secret transmissions of the ‘Kokin Wakashu [古今和歌集] (Kokin Waka Poetry Collection)’ — and had acquired wide and deep cultural training also in Japanese traditional literature. Also, by referring to the extant family tree, the members from Rin-shi [林氏] had many talented members in medicine, Shodo [書道] (calligraphy), music, and chanoyu [茶の湯] (the tea ceremony).

Since they were raised in such rich cultural environment, it seems it was natural for them to become Zen monks and keep studying. In this way, they contributed much



▲ Utagawa Hiroshige, *Nihonbashi Tōri-itchōme ryakuzu* from the series: *One Hundred Famous Views of Edo* (Meisho Edo hyakkei) , National Diet Library, Japan.

D. The headquarter at Tsushima was a temple called Itei-an [以井庵]. The name 'Itei-an' can be found in the documents of the lord family of the Tsushima domain [対馬藩藩主 宗家文書] kept in Keio University. The documents are consisted of old manuscripts and records (approx. 1500 items in total) — written during the Edo period when the lord family of the Tsushima domain monopolized the diplomacy and trading between Japan and China — and 895 items of them are designated as Important Cultural Property.

C. Rokuonin Temple was discontinued during the Meiji period. However, recently, the remnant was found in Doshisha University Imadegawa Campus. For more information regarding their excavation, please visit the following URL (Japanese version only):

<http://hmuseum.doshisha.ac.jp/database/xwc/map/imadegawa2010.pdf> (「相国寺旧境内の発掘調査-同志社大学今出川キャンパス整備に伴う発掘調査-」Published 27 November 2010 by 同志社大学今出川キャンパス整備に伴う発掘調査委員会・歴史資料館)

Shokoku-ji Temple was built as a symbol of Shogun’s power in 1392 (third year of Meitoku [明德]). It was built in the center of Kyoto, close enough to both the shogunate and the imperial court. The temple has a magnificent “garan [伽藍] (ensemble of temple buildings),” and the “Shichijunoto [七重塔] (Seven-storey pagoda)” was the highest pagoda of all the existing pagodas in Japan. And in one of the sub-temples (Tatchu [塔頭]) called “Rokuon-in Temple [鹿苑院],” a governmental office (of the Muromachi shogunate) called “Sorokusu [僧録司]” was established. Sorokusu was a managing section of the overall Gozan system and the highest-ranking priest/leader of the Zen sect was appointed in there[C].

On one hand, Shokoku-ji Temple [fig.3] played an important part of religious and public policies (which was led by the shogunate government). On the other hand, Shokoku-ji Temple functioned as a family temple (so-called Bodaiji [菩提寺]) of the shogunate, and conducted funeral and memorial service for the shogunate. And this gives enough

reason to regard both Rokuon-ji Temple [鹿苑寺] as well as Jisho-ji Temple [慈照寺] for becoming sub-temples of Shokoku-ji Temple—both being a private residence in the first place.

By the way, after entering Edo period (1603-1868), Tokugawa Ieyasu (the first shogunate of the Edo period) moved

Sorokusu to “Konchi-in [金地院],” a sub-temple of “Nanzen-ji Temple [南禅寺].” Also, to ensure smooth communication, a sub-temple (Tatchu [塔頭])—with the exact same name “Konchi-in [金地院]”—was established in Edo; which is now located inside Shiba Koen[公園] (Shiba Park, a public park in Minato, Tokyo).

/ Tatchu [塔頭] as Sub-Temple /

So far, I have been using the term “Tatchu [塔頭]” several times, but now let me explain what it means in detail.

The term is an idiom consisted of the Chinese character ‘塔’ and a suffix ‘頭,’ yet the (original) meaning is same as ‘塔.’ ‘塔’ is an abbreviation of ‘Sotoba [卒塔婆]’—the Japanese transliteration of the Sanskrit word “Stupa”—which originally meant Buddhist monument in which Buddha’s sarira (Busshari [仏舍利]) were laid. The triple tower and the five-storied pagoda (in the large temples of Nara and Kyoto) were built in this purpose, yet gradually, it also started covering the graves of Buddhist priests.

Zen Buddhism places great importance on a master-disciple relationship, the practice and conversations with a master. So even after the death of the master, his disciples took a great care of his grave and to protect the pagoda, they built a building next to it—which is the Tatchu [塔頭]. However, in Japan, Tatchu was also used as a retreat of the chief priest after his retirement. Thus, it was common to start building the Tatchu before his death, and during the Muromachi period, there were dozens of Tatchu within Gozan system temples.

Kenninji temple made a great contribution to scholarship and the arts, and produced many outstanding poet as well as scholars.

Basically, in Zen Buddhism temples, almost all ascetic monks must live in a building called So-do [僧堂], a temple building dedicated to the communal living—except for the chief priest and Jisha [侍者], an attendant who serves the chief priest. However, when the number of Tatchu increased, each Tatchu started to have their own ascetic monks. It became customary to first start training at your Tatchu, then (after the training) build his career by being a chief priest at some different temples. And finally, after becoming a chief priest at a Gozan temple, they went back to their Tatchu to spend the rest of their life—this became a typical life-cycle. In the later years, of course, there were too many monks coming from one Tatchu, so they needed a new building for retreat and decided to build a smaller Tatchu inside the Tatchu. And these attached facilities (which functioned as dormitories) were called Ryosha [寮舎].

However, it costs a lot of money to build and maintain Tatchu or Ryosha. Thus, in many cases, each of them had a patron/supporter, such as daimyo (Japanese feudal

lords), aristocrats, or influential merchants. They did not only support them financially/economically, but actively made their children become priests and sent them to those Tatchu or Ryosha. Next, let me give you some specific examples.

2. Scholarship and Culture of Tatchu [塔頭]—Case from Ryōsoku-in, Kenninji Temple [両足院建仁寺]

/ Kenninji Temple [建仁寺] /

Kenninji temple is Kyoto’s oldest Zen Buddhist temple, and one of the Kyoto Gozan temples. The temple was founded by Eisai [栄西] with the support of the 2nd shogun of the Kamakura Bakufu, Minamoto no Yoriei [鎌倉幕府第2代将軍源頼家].

While Shokoku-ji Temple [相国寺] had strong connection with the Muromachi shogunate and played an important role in politics, Kenninji temple made a great contribution to scholarship and the arts, and produced many outstanding poet as well as scholars. From some point, a Zen Buddhist temple—its individual and unique characteristics—started to be called “XX zura [づら]” (zura [づら] means tsura [つら] and indicates “face”) in Kyoto, and Shokoku-ji Temple was acknowledged as “Shomyo zura [声明づら].” “Shomyo [声明]” is the special song that Zen monks sing at ceremonies, and precisely grasped the perspective of (functioning as) Shogunate’s Bodaiji [菩提寺]—conducting many funerals and memorial services. On the other hand, Kenninji temple was acknowledged as “Gakumon zura [



▲Shokoku-ji Temple



▲Ryōsoku-in

A. Zen related exhibitions are held from time to time. Recently, in 2016, a large-scale exhibition called “The Art of ZEN: From Mind to Form” was held at both the Kyoto National Museum and Tokyo National Museum. The exhibition catalog introduces the entire work related to Zen Buddhism. Additionally, the catalog contains some explanation of Zen temples (e.g., Kennin-ji temple, introduced in this talk), as well as Zen Buddhist terminology.

“The Art of Zen From Mind to Form: In Commemoration of the 1150th Memorial of Linji Yixuan and the 250th Memorial of Hakuin Ekaku [臨濟禪師1150年白隠禪師250年遠諱記念 禅心をかたちに残す]” edited by Kyoto National Museum, Tokyo National Museum, and Nikkei Inc. Published by Nikkei Inc. in 2016. *Texts are in Japanese. Preface, message and list of works are in English.

and further affiliated with the Shokoku-ji Temple [相国寺]—One of the (so-called) Five Mountains “Gozan [五山]”—and also known as the sub-temples belonged to Shokoku-ji Temple site—called “Tatchu [塔頭].” I will describe in more detail about “Gozan [五山]” and “Tatchu [塔頭]” later, yet please keep in mind that Zen Buddhism was acknowledged as the center of culture (during the Muromachi-period) and all shoguns—supreme leader—of the Muromachi Bakufu took a great care of it, which is symbolized by Kinkaku and Ginkaku.

1. Zen Buddhism [禪宗] and Gozan [五山]

/ What is Gozan (Five Mountains) ? /

The character “山 (zan)” from “Gozan [五山]” stands for mountain and indicates temple. In China, many Zen temples were built in the mountains, and that is why they used the character “山 (zan)” and commonly called the temples by the name of the mountains (in addition to their official name).

Well then, what does “五 (go)” stand for? Zen Buddhism in China has gradually expanded since the 6th century, and in the 12th century, it deepens the ‘connection’ with the ruling class and elites. Then, five prominent temples were selected from the capital city Rinan [臨安]—the present Hangzhou [杭州]—and the trading city nearby, called Mingzhou [明州]—the present Ningbo [寧波]. These five temples were government-sponsored, obligated to pray for the emperor and the peace and security

of the nation. Furthermore, the chief priest of the temple (called ‘Juji’ [住持]) was appointed by the emperor.

This system was introduced to Japan in the Kamakura period (ca. 1185-1333) and completed during the Muromachi period, known as Japanese Gozan.

/ Zen Buddhism [禪宗] in Japan /

The introduction of Zen Buddhism from China occurred in earnest during the Kamakura period[A].

Zen places great importance on a master-disciple relationship as well as a direct (teaching) method: the practice and conversations with a master. Thus, at that time, the Chinese Zen monks had to visit Japan or the Japanese Zen monks had to visit China and spend time to study under a master. In its historical development, Zen divided into various schools (so called *Ryūha* [流派]). Although at that time, the teachings of Zen Buddhism from various schools were brought from China to Japan in these two ways.

Meanwhile, there were two main patriarchs who developed Japanese Zen: Dōgen [道元] (1200-1253) and Eisai [栄西] (1141-1215). While Dōgen—the founder of the Sōtō-shū sect—conducted missionary works in only Hokuriku region (northwestern part of Honshu) at first, Eisai—the founder of the Rinzai sect—actively conducted throughout Japan, and even after his death, the Zen monks in Rinzai sect (the ones who studied abroad and who came to Japan) had a strong connection with the ruling class and elites, and built large temples in the center of Japan. The latest Chinese culture was brought to these Zen temples,

B. During the lecture, a great number of temples were shown and introduced. Some of them have been reduced to rubble, yet there are still many existing temples where you can visit. The following website allows you to explore those temples online. <http://art-c.keio.ac.jp/~cnmap19>

and became a ‘place’ to support the official authority on both cultural and economic fronts, just like how Gozan system worked in China.

/ Gozan [五山] in Japan /

The Kamakura Shogunate (during the 13th century), as well as the Emperor Godaigo [後醍醐天皇]—after launching “Kenmu no Shinsei [建武の新政] (restoration of the Emperor’s direct administration)” —both tried to establish the Gozan system, but a full-scale establishment started after Muromachi shogunate emerged. After several refinements, at the time of the 3rd Shogun of the Muromachi Bakufu, Ashikaga Yoshimitsu, the system eventually became in its current form[B]. Following is the list of Gozan Temples in Japan—the final form of the Gozan system with ranks—established in the 14th century.

The reason why there are 6 temples in Kyoto only is because Shokoku-ji Temple [相国寺] was built and added to Gozan by the 3rd Shogun, Ashikaga Yoshimitsu. However, as a matter of fact, Manju-ji Temple [万寿寺] does not have any

particular achievements in their cultural activities. Thus, there is no inconvenience in excluding Manju-ji Temple and capturing the other five temples as Kyoto Gozan.

By referring to the system in China, the Muromachi shogunate further segmentized other ten temples to Jissatsu [十刹] (ten important temples located around Kyoto, ranked after Gozan) and the others to Shozan [諸山] (temples located around Japan, ranked after Jissatsu.)

Outside the Gozan system, other large temples (including those of the Rinzai sect) such as Daitoku-ji Temple [大徳寺] and Myoshin-ji Temple [妙心寺] in Kyoto are known as ‘Rinka [林下].’ These temples have also played an important role in the field of Zen culture during the middle ages, and also included the head temples from Sōtō-shū sect, such as Eihei-ji Temple [永平寺] and Soji-ji Temple [総持寺].

Out of these, for the Muromachi shogunate, the most important was Shokoku-ji Temple [相国寺]. The 3rd Shogun, Ashikaga Yoshimitsu had exercised his power in many fields. He achieved the integration of the Northern and Southern Courts (which were splitted for 58 years), forced to diminish powerful Shugo daimyo [守護大名] (military governors), suppressed the rebellion, and further became influential in the imperial court, consolidating the culture of court nobles [公家] with the culture of the warrior class [武家]. Moreover, he built close diplomatic relations with Ming [明] and the Yi Dynasty Korea [朝鮮], and made the benefits from the trade as a source of revenue.

RANK	KYOTO	KAMAKURA
Top	Tenryū-ji Temple Zuiryu-zan Taiheikokoku Nanzen Zen-ji [瑞龍山太平興国南禅禅寺]	
First Rank	Tenryū-ji Temple Reiki-zan Tenryushisei Zen-ji [霊亀山天龍資聖禅寺]	Kenchō-ji Temple Kofuku-san Kencho Kokoku Zen-ji [巨福山建長興国禅寺]
Second Rank	Shōkoku-ji Temple Mannen-zan Shōkoku Shōten Zen-ji [万年山相国承天禅寺]	Engaku-ji Temple Zuiroku-zan Engaku Kosei Zen-ji [瑞鹿山円覚聖禅寺]
Third Rank	Kennin-ji Temple Tō-zan Kennin-Zen-ji [東山建仁禅寺]	Jufuku-ji Temple Kikoku-zan Jufuku Kongō Zen-ji [龟谷山寿福金剛禅寺]
Fourth Rank	Tōfuku-ji Temple Enichi-san Tōfuku Zen-ji [慧日山東福禅寺]	Jōchi-ji Temple Kinpo-zan Jōchi-ji [金宝山淨智寺]
Fifth Rank	Manju-ji Temple Manju Zen-ji [万寿禅寺])	Jōmyō-ji Temple Tōkasan Jōmyō Kōri Zen-ji [稻荷山淨妙広利禅寺]

Scholarship and Culture of Zen Temples

Takashi Horikawa (Professor at the Institute of Oriental Classics [Shido Bunko], Keio University)

Introduction

—Kinkaku[金閣] and Ginkaku [銀閣]—

Kinkaku (golden pavilion) of Rokuon-ji Temple [鹿苑寺] and Ginkaku (silver pavilion) of Jisho-ji Temple [慈照寺] are the two famous temples that symbolize the Muromachi period (ca. 1392 - 1573)

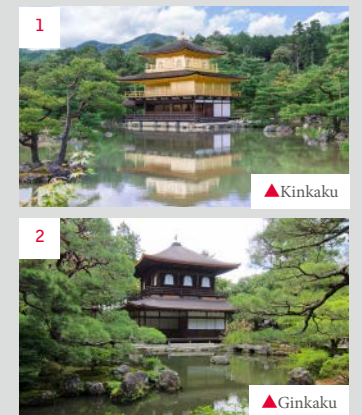
[fig.1][fig.2].

Rokuon-ji Temple was formerly built as a villa called Kitayama-dono [北山殿] by the 3rd Shogun of the Muromachi Bakufu, Ashikaga Yoshimitsu [足利義満]. It became a temple with his will, after he died. On the other hand, Jisho-ji Temple was formerly built as a place for retreat called Higashiyama-dono [東山殿] by the 8th Shogun, Ashikaga Yoshimasa [足利義政]; and later became a temple, after his death.

These two places were considered to be the center stages of Japanese

culture, and we have been calling Yoshimitsu's rule as "Kitayama culture [北山文化]" and Yoshimasa's rule as "Higashiyama culture [東山文化]." Especially, both Kinkaku and Ginkaku—which marks great contrast as the sun and the moon—were deemed to be the symbolic representations.

Worthy of attention here is that both are temples of Zen Buddhism,



Fukushima, which are entitled *Neah Bay I* and *Vibration of May II* are displayed[fig.4]. The first-floor exhibit can be overlooked from the 2nd floor through the colonnade. If you enter the terrace on the second floor, you will find Abraham David Christian's sculpture *Untitled*, which is displayed permanently on the lawn. This work is intended as a public sculpture; therefore, it is located in a position which is visible from the Yurikamome Line, and it conveys the message that the gallery is a unique cultural facility to the local community[fig.5]. The reason for Mr Yokota choosing Minato City to relocate his Nihonbashi gallery was that he wanted to be located at the centre of logistics, surrounded by the sea, the road, and the airport.

/ Gallery and Publicness /

Mr Yokota and Ms Watanabe talked about the activities of the gallery in a Q & A style.

Regarding the theme of "publicness", Ms Watanabe once again confirmed the distinction between "official" and "public", and then asked about the role that contemporary art plays between the citizens and the public. Mr Yokota said that "contemporary" naturally exists in any era. Not only what is now called "contemporary art", but also any art convey an era's spirit and view of the world. He added that the gallery is a mediator between the artist as a message originator and the public. I remember clearly Mr Yokota mentioning that the word

"publicness" has an impression of sending a message to many people. However, even if only one person receives the message, this is also considered as a form of publicness[fig.6].

Furthermore, Mr Yokota said that he is trying to oversee production and perspective of each artist, not only one piece of work or one exhibition. Creating artworks is daily life for artists. Therefore, a gallerist works along with it as his daily life. It seems Mr Yokota's attitude contrasts with the activities of museums and art history, which organise events to history and movements.

Also, when he was asked the reason for establishing TPH, he replied that it was purely his private interest in the printed matter as well as the gallery, and he added jokingly that basically "selfishness" is the root of TPH. Talking about 'publicness', he also told us that publications could create a public space in a different form from the physical space in galleries. Through artist books as artworks and catalogues as records, TPH has the advantage of being able to convey messages differently from temporary exhibitions. In that sense, TPH seems to function not only as a print department of the gallery but also as another place to convey the messages of the artists. Besides, Ms Watanabe mentioned the differences between the publishing culture in Japan compared to overseas, which they talked about in the past conversations. While overseas artists publish a considerable number of copies of catalogues, try to spread them to as many people as possible and provided access to the information, in Japan, handmade artist books are made for a small number of people.

The issue of such publications and publicness has only been briefly mentioned due to the lack of time. However, this should be an interesting viewpoint to consider the differences of publicness in Japan compared to overseas.

At the end of the conversation, "Playing catch" with the artist became a topic once again. To my surprise, Mr Yokota said that he is not actively seeking artists. Discovering artists looks like the encounter between a man and a woman. He said that it is normal to take two or three years from picking up a "ball" thrown by an artist to finally making it happen as they imagined. In the question and answer session, Tatsuo Kawaguchi, an artist taking part in this event talked about the social impact when a piece of work is made public. He also shared his personal memories and recalled the time Mr Yokota came to his studio in Suma, which led to them subsequently going out to karaoke together!

Mr Yokota has been running the gallery for about 40 years, and he always has doubts about how exhibitions and galleries function in general. The current gallery is a pile of things that he has been fumbling around with and he talked about gallery from his personal viewpoint. However, if the issue of publicness involves communication between citizens in the first place, the publicness can start from the unintended encounter with a piece of work, an artist or personal communication with them. I have reconfirmed that galleries can be places where publicness can be generated through personal encounters.

This is an edited version of the lecture entitled, "Temple as a Scholarship and Cultural Platform: Sengakuji and Zen in Japanese Culture," delivered on 18 November, 2018 at Sengakuji in Tokyo. The accompanying information and figures are added by the editorial staff of ARTEFACT.



▲ Conversations about the "Gallery and Publicness."

The Possibility of Publicness from the Gallery

From Nihonbashi
to Takeshiba / 40 Years of Dialogue

Shun Mizuno (The Aesthetics and Science of Arts Department,
Keio University Graduate School of Letters)

In the event titled “Gallery and Publicness”, the Cultural Narratives of a City project introduces the activities of the Shigeru Yokota Gallery. The gallery has been active in Takeshiba, Minato City for nearly 40 years and relocated in 2018 from its former location two blocks away. The new space accompanied by the large exhibition space with a double-height ceiling does not look like a typical Japanese gallery, which

reminds me of a room in an art museum abroad. This article is a report on the backyard tour of this gallery which was conducted on the 8th of February 2019, and the conversations between Shigeru Yokota, the owner of the gallery, and Yoko Watanabe from Keio University Art Center.

According to the introduction of Ms Homma, the event organiser, Minato City in Tokyo possesses more than 144 galleries, which is considerable compared with other prefectural-level municipalities. However, what galleries do other than exhibitions is not necessarily apparent to the general public. This project is focused on finding new gallery functions, which then contribute to cultural resources.

/ Shigeru Yokota Gallery, Tokyo Publishing House, JCRI /

Next, Satoshi Yokota, a representative of the Tokyo Publishing House introduced the activities of the Tokyo Publishing House (TPH) and the Japan Cultural Research Institute (JCRI, Non-Profit Organisation). They are derived from “Gatodo Gallery”

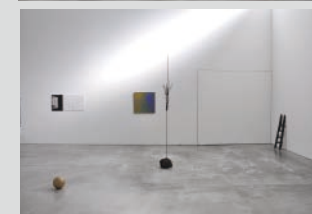
which opened in 1976 as part of a Japanese antique shop, “Setsu Gatodo” in Nihonbashi. The gallery started in the basement of Setsu Gatodo and moved to a warehouse in Takeshiba in the vicinity of Hamamatsucho Station in 1982. Furthermore, in 1989, it started their activity as the Shigeru Yokota Gallery. Before the redevelopment, the Takeshiba area was a district with warehouse after warehouse with a lack of footfall. Mr Yokota moved his base from Nihonbashi which was the centre of gallery culture to the warehouse town Takeshiba because he wanted to display artworks in a lively everyday space for ordinary people. The building where the gallery has relocated to this time used to be a night club which was extremely busy during the bubble era, and it conveys one aspect of Takeshiba which is always markedly changing. Also, TPH which mainly deals in books and printed materials was founded in 1991. It publishes and displays artists’ words and photographs. Their activities are uniquely different from the Shigeru Yokota Gallery. In the beginning, TPH



▲Tour around the gallery.

had a collection of the catalogues of overseas museums and art magazines from the 20th-century etc., and gradually started to handle books and photographs. It also now carries a portfolio of works: publishes artist’s books, exhibits printed matters, edition prints and so on.

The gallery collects and exhibits materials from artists’ studio, which includes those of Isamu Wakabayashi, Tomoharu Murakami, and Natsuyuki Nakanishi. It makes you realise the substantial role of this gallery to find these important contributors to postwar art. Besides, under the founding philosophy of conveying Japanese culture in their own words, JCRI carries out activities including grant projects; creates a directory called “Archive @ Archive Directory” that lists major archives and their characteristics; and constructs the gallery’s archive. Their work provides a valuable group of materials to the public in the field of postwar Japanese art where an archive has not been established. In general, we tend to think that galleries are places of economic activity, holding exhibitions or facilitating the trading of works. However, this was a reconfirmation that a gallery could be a place which can provide a wide range of “publicness” through works such



▲Main exhibit space.

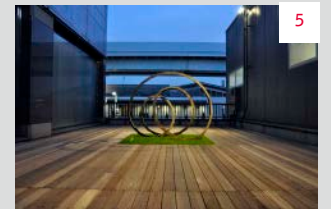
as publications, research activities, and so on. Then the sequence of events moved on to the gallery tour[fig.2].

/ Backyard Tour - “Behind the Scenes” and Supporting the Exhibition /

During the tour, the groups were divided into three. The first group went to the main exhibition space, the second group went to the second floor from where you can look down into the main exhibition space, and the third group went to the backyard, then each group rotated after each visit had ended. In the building that was originally used as a nightclub, walls and balconies were removed leaving part of the original structure. Natural light comes in from a slit which had been newly cut into the wall. The fan-shaped exhibition space shows the remnants of when it was once a stage, which remains intact to facilitate exhibiting various works such as images, sculptures, as well as paintings or even performances. We were able to appreciate exhibitions of artworks, such as *COSMOS* which had space and time as theme by Tatsuo



▲Gallery on the 2nd floor.



▲Outdoor terrace on the 2nd floor with Abraham David Christian’s sculpture *Untitled*.

Kawaguchi who participated in the event on that day, a piece of canvas work called *Out There*, and a square record called *SPECIMEN* by Yuko Shiraishi[fig.3].

The backyard is at the heart of supporting the displays of the gallery. There are storage full of collections, a library and another storage for archival materials. You can find all the tools that support exhibition activities such as packaging materials and exhibition tables. The library which is already full of books was originally a dancer’s waiting room, and apparently, a Russian poster was left on the wall when they moved in. Although Takeshiba continues its redevelopment, it may be the case that former aspects are remaining like this when it concludes. With over 10,000 collections in total, more than half of the overseas catalogues are displayed in the exhibition space on the 2nd floor.

On the 2nd floor, a part that is referred to as the loft in the old gallery, works by Emiko Sawaragi Gilbert and Hideko



▲View of the bay from the window of the old gallery.

Maekawa once said, “I would be glad if you could see it as a rather huge stone set in a garden.” Just like the stones placed in the rock garden of Ryoanji Temple, he attempted to thematise the designing of external space created by placing an architecture[fig.4].

Maekawa’s plan was praised for its use of space created by the existing buildings, and it was often featured in architectural magazines of the time. The Pyramid School Building, especially its interior, made an overwhelming impression invoking a religious architecture[fig.5]. It was used not only as a functional classroom, but also as a stage for official ceremonies, theatres or lectures. Moreover, it was an oasis on campus where students gathered between lectures or after classes.

However, the Pyramid School Building was forced to dismantling due to various circumstances such as changes in number of students or curriculum. The university museum strongly wished to preserve the “memory” of the Pyramid School Building, and thus organised various activities such as the fixed-point shooting of the dismantling process, preservation of the building materials, tours and lectures. When organising these events, we called for cooperation of various departments in the university and utilised our alumni network. The outcome was published as *Photographic Album of Gakushuin Campus. Memory of Pyramid School Building: Central Lecture Room by Kunio Maekawa* (2008).

/ Connecting to the Future: Conveying Form and Memory /

The curators of the Gakushuin University Museum of History have been developing activities to protect and utilise the historical

buildings. Here we would like to introduce our campus tour and archives: ‘The Entire Campus Museum Tour’ and ‘Gakushuin Architecture Archives.’

The ‘Entire Campus Museum Tour’ takes the visitors around the campus to see the buildings, monuments and nature, introducing them as museum pieces essential to the history of Gakushuin. It provides not only explanations of the appearance or the features of the buildings, but also the opportunity to experience the architectural space by having a walk around inside or a view outside and by touching the building materials. The guided tour is very popular because it allows the visitors to find out the historical features of the buildings and monuments as well as the campus full of nature.

Gakushuin School in Mejiro: Historical Buildings on Campus (Maruzen Planet, 2010) was published to commemorate the seven Registered Tangible Cultural Properties featured in the book. It also introduces other university-related places outside Mejiro Campus, as well as historical photographs, drawings, and columns written by graduates and teachers who used the building.

Another publication *Gakushuin: Memory of South Building No. 1* is the entire record of renovation works of the school buildings designated as Registered Tangible Cultural Properties. This book shows the process of how the original exterior and interior were reconstructed and how the modernisation (barrier-free and earthquake-proof construction) was achieved while preserving the valuable remains. It also features photographs, drawings and the voices of the architect and site managers.

Journal of Gakushuin University Museum of History (Nos 22 and 24) also included the research results of the buildings. Recently we compiled research on the two residence halls related to the current Emperor of Japan (then Crown Prince Akihito): the Koganei Seimei Residence (1946) and Mejiro Seimei Residence (1951).

By publishing books,



▲Central Lecture Room (Pyramid School Building)



▲Interior of the administrative building next to the Pyramid School Building



▲Campus plan by Kunio Maekawa, from *Shinkenchiku*, October 1960, p. 105.

distributing public relations magazines free of charge and organising guided tours, our students have developed a sense of school spirit. These activities help the university, which aims to open themselves to the public while respecting the tradition, to appeal its history and charm not only to the university members but also to the neighbourhood and the general public. We would like to proceed with the collection of photographs and architectural materials related to the original design of the buildings dismantled without a chance to leave any record in the archives; and to promote the recording of buildings

through interview surveys to former students. In this way, we would like to continue developing awareness of preserving our historical buildings.

/ References /

- 1 *Gakushuin kyanpasu shashinshu piramiddo kosha no kioku: Maekawa Kunio Sakuhin Chuo kyositsu* (Photographic Album of Gakushuin Campus. Memory of Pyramid School Building: Central Lecture Room by Kunio Maekawa), Gakushuin University Museum of History (2008)
- 2 *Gakushuin Mejiro no manabiya: Gakunai ni nokoru Rekishi aru kenchiku* (Gakushuin School in

- Mejiro: Historical Buildings on Campus*), Maruzen Planet (2010)
- 3 *Gakushuin minami ichigokan: saiseishita kyu rika kyojo* (Gakushuin South Building No. 1: Old Science Building Revived), Maruzen Planet (2013)
- 4 Gakushuin University Museum of History, *Museum Letter*, No. 24 featuring South Building No. 1; and No. 29 featuring Koganei Seimei Residence
- 5 *Gakushuin daigaku shiryokan kiyo* (Journal of Gakushuin University Museum of History), No. 22 (2016) and No. 24 (2018)



▲Interior of the Central Lecture Room

then. At the time of its original construction, both the first and second storeys were built in red brick with a roof partially of slate and of French tile. The building was damaged by the 1894 Meiji Tokyo Earthquake, and the second storey was reconstructed in wood. The tower was burnt down by a fire on campus in 1914, and the large chimney on the second floor collapsed due to the 1923 Great Kanto Earthquake. Although it was once decided to demolish the building, it was reconsidered after several communities requested its preservation. In 1963, the Tokyo Metropolis who acquired the land for the expansion of National Route 1 for the Tokyo Olympic Games decided to cover the expenses to move the building. In 1964, the repair and conservation of the Memorial Hall together with the Imbrie Hall were decided, and *Hikiya* was carried out. The hall has resumed its beautiful appearance of a stick-style house combining brick masonry with wooden structure.

The Memorial Hall currently has a small chapel and an exhibition room of the Historical Museum on the first floor. The former library on the second floor is now used as a large meeting room and an office. The building was designated as Tangible Cultural Properties of Minato City in 1979, and as Historic Landmarks Especially Important for the Landscape of Tokyo in 2002.

/ Meiji Gakuin Chapel /

The present chapel can be described as a symbol of Meiji Gakuin and was built in 1916 by the American architect William Merrell Vories [fig.3]. It is based on the English Gothic style with a roof supported by scissors

truss. After a series of disasters, the school was in urgent need to construct a new chapel, but the price of building materials was severely rising. Therefore, they reused the building materials of the Miller Memorial Chapel, which was irreparably damaged by successive earthquakes. The buttress was added after the 1923 Great Kanto Earthquake. Due to the increase of the number of students, the transepts were expanded in 1931, forming the present cross-shaped plan.

During the investigation following the 1995 Great Hanshin-Awaji Earthquake disaster, the insufficiency of earthquake resistance of the chapel was revealed. Thus from 2006, the conservation repair work of the chapel was carried for around two years. The main engineering works concentrated on the reconstruction of the front pulpit to its original form in the interior, the reinforcement of the brick masonry of the exterior wall structure, and the installation of the pipe organ on the second floor. The Chapel was designated as Tangible Cultural Properties of Minato City in 1989, and as Historic Landmarks Especially Important for the Landscape of Tokyo in 2002.

/ Inheritance and Utilization of Architecture /

Looking back at the history of the three buildings, it may be a miracle that they still exist on campus in the heart of Tokyo after suffering repeated earthquakes and fires.

The late Dr. Hiroyuki Suzuki (the former professor of Tokyo University Graduate School) who had cooperated with the investigation of the cultural asset buildings and the preservation

repair work said, “I hope that culture apart from the financial constraints could be kept accumulated in the university campus.” I have a feeling of duty to preserve these precious cultural assets that our ancestors have left for us. We should also make good use of them as sites of research, education and cultural activities to carry them forward into the future.

Preservation and Utilization of Historical Buildings of Gakushuin Mejiro Campus

Yuri Tomita and Miki Maruyama (Gakushuin University Museum of History)

/ Overview of Gakushuin Mejiro Campus /

Gakushuin was established in Kanda-Nishikicho in 1877. Since then, the school was relocated to Toranomom, then to Yotsuya, and finally to its current site in Mejiro in 1908. Currently, the school has its kindergarten, junior and senior high schools and university in Mejiro; elementary school in Yotsuya; girls’ junior and senior high schools and women’s university in Toyama. The original plan of Mejiro Campus was designed by Masamichi Kuru, an engineer at the Ministry of Education who was famous for designing school architecture. In his campus plan, the education area and the residence area were clearly separated. The classroom buildings, the Main Building, and the Old Library were located in the northwest. Athletic facilities such as the playfield and the *Kendo* Hall were located in the southwest. Dormitories, dining



▲ From top to bottom: Main Gate, Old Residence Office, Stables, Old Library, Old Dormitory for Imperial Family, Old Science Building, Old Junior High School Building

rooms and teachers’ houses were located in the east. On entering the Main Gate, green woods and some open space welcomed the visitors. Behind the woods, the Main School Building and the Auditorium were located opposite the Old Library. The architecture was mostly wooden designed simply without ornate decoration to suit Gakushuin’s school spirit of “simplicity and fortitude.” Despite the damages caused by the Great Kanto Earthquake and World War II, the buildings survive around the campus, each representing the era of Meiji, Taisho, Showa or Heisei, and thus it has been described that “the entire campus is like a huge museum.”

/ Preservation: Seven Registered Tangible Cultural Properties /

Due to several changes made to the campus plan and deterioration of old buildings, there were some buildings that were demolished without notice. Gakushuin University Museum of History realized the need to do close study on each building on campus, and asked Professor Hirohisa Ito from the Department of Architecture at Tokyo University of Science in 1999 to pursue an investigation. Taking this opportunity, we started our public relations activities such as exhibitions and publication of articles to pass on the ‘memories’ of the historical buildings of Gakushuin to future generations. In 2009, seven of the buildings were designated as Registered Tangible Cultural Properties of Japan. It has made the university aware of the importance of preserving and utilising the historical buildings on campus[fig.1].

1. Main Gate, 1908, designed by Masamichi Kuru.

2. Old Residence Office (Nogi Kan), 1908, designed by Masamichi Kuru.
 3. Stables, probably around 1897-1907.
 4. Old Library (Gakushuin University Museum of History), 1909, designed by Masamichi Kuru.
 5. Old Dormitory for Imperial Family (East Building Annex), 1912, designed by the Construction Bureau of the Imperial Household Ministry.
 6. Old Science Building (South Building No. 1), 1927, designed by the Construction Bureau of the Imperial Household Ministry.
 7. Old Junior High School Building (West Building No. 1), 1930, designed by Yokichi Gondo, the Construction Bureau of the Imperial Household Ministry.
- * (Current names of the building in parentheses)

/ Architecture That Could Not Be Protected: The Pyramid School Building /

The Central Lecture Room (Pyramid School Building) was a symbolic building of Gakushuin University nicknamed “Pira School,” which emerged in the campus plan by the architect Kunio Maekawa started in 1959[fig.2]. The pyramid-shaped building, accompanied by three school buildings[fig.3], was positioned in the centre of an L-shaped square surrounded by architecture in neo-Gothic style of the early Showa period. Maekawa inherited the spirit of “simplicity and fortitude” from Masamichi Kuru’s campus plan and decided to pursue his project according to his mantra: “let’s wear strong cotton (instead of cheap silk).” The design was planned with the aim of realising solid academic thoughts through its simplicity.

visible.

/ Universities and Architectural Archives /

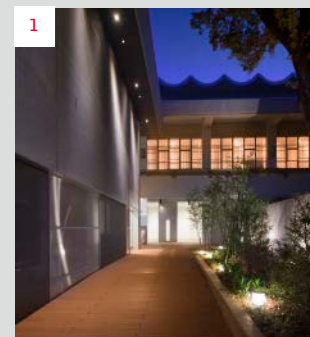
I have mentioned NAMA as the only national institution specialising in architectural documents, but architectural documents are also contained in many archives nationwide. I would like to discuss the Kyoto Institute of Technology Museum and Archives as an example of architectural documents being used for educational purposes within a university. The Kyoto Institute of Technology Museum and Archives holds the drawings of the leading Japanese Modernist architect, Togo Murano. The work of ordering these documents resulted in fifteen exhibitions. These exhibitions were run by students, who processed the documents, researched the field, conducted and transcribed interviews, edited the catalogues, designed and constructed the event space, and managed the exhibitions and symposia. Alongside this, students created models for the exhibition.

While examples of architectural documents and research documents contained within universities might be many, it is not so common to find these documents being used in public ways. This is not the case abroad, where the preservation and making public of Modern architectural documents within university archives is far more common. Some examples from the U.S. will illustrate this point. The architectural archive at Penn State University in Philadelphia, which contains the papers of Louis Kahn, is both connected to a gallery space where regular exhibitions are held, and also results in archival materials

being used in University classes. Students are involved in the organisation of the Manuscripts and Archives of Yale University, which contain the architectural archives of members and former students, as part of their education. The Avery Library at Columbia University in New York contains architectural documents relating not only to the university but also to the architectural culture in the metropolitan area of New York. The Environmental Design Archives of the University of California, Berkeley, collect both architectural documents relating to North California, and documents connected to landscape and environmental design, and make them available to public. Harvard University and Massachusetts Institute of Technology, which both hold archival materials of Kenzō Tange, are also preserving and making available architectural documents. Within Europe, the U.K. has the archives of the famous Architectural Association School of Architecture in London, and in Germany many universities archivally preserve and make public architectural documents[*4].

There is a profound meaning to the use of architectural archives in higher education. Considering universities as public institutions makes sense of the possibility

of housing archives that focus on the architectural culture and environment of certain areas, as do the archives in universities abroad. Given the vast number of architectural documents that lie unused, I am hoping that there will be an increase in institutions like Keio University Art Center, which actively uses its own architecture and architectural documents as cultural resource. I think it would be fantastic if NAMA could work as a hub organisation to support activities using university archives.



▲Flattening process of drawings



▲Exterior view of NAMA



▲Exhibition view of "Uniting Architecture and Society: The Approach of OTAKA Masato" Exhibition

4. The Architectural Archives of the University of Pennsylvania
<https://www.design.upenn.edu/architectural-archives/about>
Archives at Yale
<https://archives.yale.edu/>
Columbia University's Avery Library
<https://library.columbia.edu/locations/avery.html>
The Environmental Design Archives at University of California, Berkeley

<https://archives.ced.berkeley.edu/>
Harvard Library, The Kenzō Tange Archive
<http://id.lib.harvard.edu/alma/990143792750203941/catalog>
MIT Museum Architecture and Design Collection
<http://mitmuseum.mit.edu/collection/architecture-and-design>
AA Archives
<https://www.aaschool.ac.uk/AASCHOOL/LIBRARY/archive.php>



▲Imbrie Hall (Above: original, below: after the repair work)



▲Meiji Gakuin Memorial Hall (Above: original, below: 2013 [Meiji Gakuin 150th anniversary])



▲Meiji Gakuin Chapel (Above: after Great Kanto earthquake, below: present)

The University Campus, Narrated by Historical Buildings: With a Focus on Imbrie Hall, Memorial Hall and Meiji Gakuin Chapel

Michiyo Kohri (Meiji Gakuin Historical Museum, Meiji Gakuin University)

Meiji Gakuin is a Protestant mission school, which marked its 150th anniversary in 2013. It currently has a junior-high school, two senior-high schools, a university and a graduate school. Meiji Gakuin has its origin in 1863, when the American Dr. James Curtis Hepburn and his wife Clara founded the Hepburn School at their house in Yokohama Settlement. Subsequently, they moved to Tsukiji Settlement in Tokyo. In 1886, the Tokyo Union Theological Seminary merged with the United Japanese-English Union School and the Japanese English Preparatory School and assumed the name "Meiji Gakuin." Following the approval of its establishment in 1887, the campus was transferred to Shirokane from Tsukiji. Three historical buildings survive on Shirokane campus: the Imbrie Hall, the Memorial Hall, and the Chapel.

/ Imbrie Hall /

The only surviving residence of the missionaries who taught at Meiji Gakuin is the Imbrie Hall[fig.1]. It is named after Dr William Imbrie who lived there for a long time. It was built around 1889 as a wooden two-storied American-style residence. The designer is unknown, although it seems that there was a person who directed the American-style

architecture of that time. In 1964, it was transferred to its present place using the method of *Hikiya* (moving a house as it is without dismantling). It had been used as a school facility until dismantling and reassembly for the repair work started in 1995. After two years, all parts except for the roof were reconstructed to its original form including the balcony and the chimney. During the preservation work, a cardboard from the time of its original construction was found pasted on the inner side of the weather-board of the exterior wall. The schematic plan or the tool box drawn there indicates that Japanese carpenters participated in the construction.

The Imbrie Hall is extremely valuable not only as the oldest missionary house in Tokyo but also as the oldest case of such architecture in Japan. It provides a standard model when considering the transition of western-style residences in Japan. The Imbrie Hall is currently used as the school minister's room, the historical museum office and a meeting room. It was designated as National Important Cultural Property in 1998, and as Historic Landmarks Especially Important for the Landscape of Tokyo in 2002.

/ Meiji Gakuin Memorial Hall /

The Meiji Gakuin Memorial Hall was originally constructed in 1890 as a school of theology and a library[fig.2]. The American neo-Gothic architecture, situated on the right-hand side on entering the main gate of the campus, is characterised by its exterior design: the first storey in brick and the second in wood. The designer is unknown, although it is assumed that it was Rev. Henry Mohr Landis who was teaching



▲ ‘Yoshiro Taniguchi and Noguchi Room’ Exhibition (2009)



▲ Workshop co-organised by Keio Yochisha Elementary School and Architecture of Keio Project



▲ Symposium and Guided Tour ‘Modern Architecture on Hiyoshi Campus’



▲ ‘Taniguchi Yoshiro and Keio University Hall of Residence HIYOSHI’ Exhibition (2013)

photographs taken by the pupils of Keio Yochisha Elementary School were exhibited alongside the professional architectural photographs by Ryota Atarashi. This was the outcome of the workshop led by the same professional photographer preceding the exhibition [fig.2].

By taking photographs by themselves, the pupils experienced that the architecture, where they had been spending their time every day for many years, finally became ‘visible.’ It thus generated the view of the architecture as seen by 288 pupils, in other words, by the users’ eyes, which were also archived as a result of the project.

/ Symposium ‘Modern Architecture on Hiyoshi Campus’ and ‘Taniguchi Yoshiro and Keio University Hall of Residence HIYOSHI’ Exhibition /

The second example is the case related to Keio University Hall of Residence Hiyoshi completed in 1938. The university magazine *Mita Hyoron* proudly claimed that the dormitory was the “best of the architectural equipment among the dormitory and others” and that this architecture improved the “effectiveness of the education of boarding students[*2].” If young people spend their daily lives in an excellent architectural space, they will surely obtain a sense of space which would greatly affect their architectural awareness. The pride and the enthusiasm in creating such an excellent architecture with educational significance can be clearly observed.

However, just seven years after its completion, as the war situation worsened, the Hall of Residence Hiyoshi was firstly confiscated and occupied by the Japanese navy, and then it became the dormitory of the US armed

forces. When Hiyoshi Campus was handed back, only one building out of the three was returned to its original use. To protect it from aging as a cultural property, a plan was proposed to renovate one building and scrap the other two. Fortunately, the experts meeting in 2011 proposed to keep the other two buildings as well, and this was accepted. Through careful discussions of various elements at the time of its original completion, the renovation aimed to convey the original design, as well as to realise a comfortable lifestyle of students studying at a modern university.

In response to this, a symposium was held to consider the preservation, utilisation and application of architecture by inviting experts and people in charge of the actual renovation. On the same day, there was a tour of the dormitory guided by the boarding students [fig.3].

Through this tour, the visitors were able to experience the architecture as an active dormitory, while for the boarding students, it was a chance to re-encounter the space where they live every day.

In 2013, the exhibition entitled ‘Yoshiro Taniguchi and the Keio University Hall of Residence Hiyoshi’ was held in Keio University Art Space on Mita Campus [fig.4].

Along with the drawings and the photographs of the architecture, materials such as memorial albums, documents or magazines published by each dormitory were exhibited to introduce some aspects of dormitory life. The documents regarding the renovation work were also exhibited to display the history of the changes made to the buildings over time.

School architecture provides an excellent vessel which accumulates memory and also triggers memory for a great number of people. Therefore, it is my belief that we should not slacken in our efforts to denote its significance and to connect the memories of buildings and people. Such activity also weaves together the memory of schools and enriches the space of school and education.

The Preservation and Use of Modern Architectural Archives: On the Agency for Cultural Affairs National Archives of Modern Architecture, with Examples from Japan and Elsewhere

Takako Fujimoto (Researcher of Architectural Documents, Agency for Cultural Affairs National Archives of Modern Architecture)

/ What is Archives? /

What comes to your mind when you hear the words Modern Architectural Archives? According to the International Council on Archives—an organization that gathers archival representatives from national organizations—archives are what contain: “documentary byproducts of human activity, that are retained for their long-term value.” In concrete terms, the kinds of documents collected by archives do not have a fixed format, but we can understand “archives” to refer to the entirety of valuable documents being preserved for futurity. In qualitative terms, archives must satisfy the conditions of “authenticity,” “reliability,” “integrity,” and

“usability[*1].”

The specialists who handle these kinds of documents are termed “archivists.” In Japan there is no public qualification for becoming an archivist and collections of private documents also have no legal position. In any case the mission of archivists is to establish appropriate ways to order materials, and ways to promote fair use.

/ Activity of the National Archives of Modern Architecture /

The movement to preserve Modern architecture materials in Japan started in the 1980s, and in order to counter the possibility of architectural documents getting scattered, lost, or sent abroad, the Agency for Cultural Affairs created the National Archives of Modern Architecture (NAMA) in 2013[*2][fig.1].

The tasks of NAMA are to collect and store documents, to promote education through exhibitions, to gather information, to conduct research, and to make documents available for the public, which is the most important task of an archival institution. Architectural archives tend towards more specialist documents and those using them tend to be researchers, but as with the National Archives, the Archives of Modern Architecture make documents available to anyone. Obviously, to further understanding of the documents through exhibitions and publications is also one of the important missions of archives.

Up to now, NAMA has gathered and preserved thirteen fonds. The number of drawings in the collection amounts to 113,000, alongside which there are vast quantities of photographic and

written documents. Large-scale archives include the documents of Junzō Sakakura, Takamasa Yoshizaka, and Masato Ōtaka. The Ōtaka archive experimentally accepts as many materials as possible. As a result, it includes the majority of types of architect documents. In concrete terms, there are drawings, sketches, photographs, slides, aperture cards, reports on city plans, bureaucratic documents, magazines and offprints, and even a small number of video and audio recordings.

The majority of documents brought into the archive are fumigated and transferred to the storeroom. Drawings curved in tubes are flattened, then numbered [fig.2]. They are also digitized in some cases. Filmic materials are at risk of degradation, so they are stored in neutral paper boxes with paper that absorbs gases, and then contained within dry cabinets that moderate humidity. Various written documents are stored within archival boxes. Once documents have been ordered according to this process, they are catalogued in line with the national standards adopted by the International Council on Archives.

After these ordering works, we were able to organise the first comprehensive exhibition of Masato Ōtaka’s documents from October 2016 to February 2017, under the title “Uniting Architecture and Society: The Approach of OTAKA Masato[*3].” As the first personal exhibition of Masato Ōtaka [fig.3], it resulted in an increased interest in Ōtaka’s documents and eventually led to their exhibition outside NAMA. One of the purposes of holding an exhibition at archives is to provide future opportunities to utilise the stored materials by making them

1. For information regarding the activities of ‘Architecture of Keio’ project, see Focus: Architecture of Keio, No.1 (Keio University Art Center, 2018). It also features the exhibition entitled ‘The Comings and Goings of Keio University Shinanomachi Campus’

held in 2017 at an open area on Shinanomachi Campus, which opened a new dimension for the outreach activity of our project.

2. ‘About the Residence Hall,’ *Mita Hyoron* 485 (January 1938), pp.50-53.

1. “What are archives? International Council on Archives,” <https://www.ica.org/en/what-archive>, accessed 12 February 2019.

2. “Purpose of Establishment,” <http://nama.bunka.go.jp/global/eng/gaiyo/>

3. The exhibition catalogue is published online: <http://nama.bunka.go.jp/wp/wp-content/uploads/2017/03/oataka/index.html>



▲ Exterior and interior of the Kumanodo Hall after restoration, photo by courtesy of Myojoin



▲ Exterior and interior of the Jodozo after restoration, photo by courtesy of Myojoin

we could match with the correct building. While the location of the Kumanodo Hall and Jodozo had been changed before, it was clear from the many repairs, that great care had been taken to preserve their treasures for generations.

During the dismantlement and renovation of the Kumanodo Hall and Jodozo, where Edo period elements existed as a symmetrical pair, one example was always left in place. Work proceeded thanks to the help of Shingo Kato, a master plasterer who had repaired many traditional storehouses, including those of cultural significance in Kawagoe (a city known for such structures) [fig.4][fig.5].

To build the walls of the two structures, lumps of clay were pressed against a bamboo lath made of wooden slats and rope. This process is known as *Arauchi*, and was repeated for a week until a durable flat surface had been built up. Following a “reverse” action where clay is inserted from the inner side (in a process known as *Uragaeshi*), sand was gradually added while rope wrapped around the wall several times (there were over ten steps to this process in all). A layer of plaster was then applied, and the walls finished with a final layer of authentic plaster made from a mixture of loose hemp fibres, *Tsunomata* seaweed, limestone, shell lime, and other materials. The wooden parts of the buildings were constructed using methods from the Edo period - with reinforced concrete applied at the foundations to protect against earthquakes.

For the Kumanodo Hall, ingenious and unusual techniques were used such as the layering of plaster on joints in the stone foundations to protect against fire and damp. The charcoal coated boards fitted to the walls to protect the plaster, and the eaves placed above the windows to stop rain water entering, involve another fire prevention measure. The wooden eaves and panels are attached to the building by hooked nails protruding from the walls. In case of a fire they can then be removed to prevent the spread of flames.

The earthen walls of such structures are thick, and along with the mud-plastered doors, very sturdy. When you measure heat and humidity outside the two buildings in August, during the morning and evening, there may be a fluctuation in temperature of about 10 degrees celsius and a nearly 30 percent shift in humidity. Inside the buildings however there will only be a moderate change.

Being extremely resistant to fire and such fluctuations in temperature and humidity is a special characteristic of earthen wall structures. But not only this, the reason why the treasures of Myojoin survived the city air raids and did not burn in the flames of war, was that the temple family had predicted such disasters, and took the precaution of placing their most precious, sacred objects into these *Dozo*. In this way the temple’s cultural wealth was protected, preserved, and can now be presented through the Myojoin exhibitions.

Forum for Architecture of Universities:

Archive and Outreach

School and Memory: A Study Based on the ‘Architecture of Keio’ Project

Yohko Watanabe (Professor and Curator, Keio University Art Center)

/ Architecture of Keio Project: User-Minded Architectural Archive /

The ‘Architecture of Keio’ project emerged in 2008 from a working group when a massive construction plan was being carried out in the course of the 150th anniversary of Keio University. We first started by photographing the buildings which were about to be demolished and investigated the related drawings and materials, making records of them. It was an experiment to create a record of the architecture in order to enable the reconstruction even after the architecture itself had gone.

An architectural archive in general puts its focus on the design of a building and it preserves the building as it was at the state of its completion. In contrast, our project aims to create an architectural archive based on users’ minds: taking

the moment of completion as the birth of an architecture, we record the memory of the architecture including the time elapsed after its completion.

This point of view works well when we archive school architecture. This is because a school building is a peculiar case in terms of the relationship between the building and its users. Students spend most of their daily lives for a certain period in school buildings. Therefore, a school building functions as a crucial vessel of memory for many people. It also has a double peculiarity in that it holds the memory of particular age range across different generations.

The project emphasises both outreach and archiving activities. These could be seen as activities to link the memories of buildings and people. As a university-based project, it is very important to approach the current students. It aims to open the eyes of the people who currently spend their time within the architecture to their own space and to improve their architectural literacy. Among such activities which involved the current students, I would like to introduce two cases[*1].

/ ‘Yoshiro Taniguchi and Noguchi Room’ Exhibition and ‘Yochisha Main Building by Yochisha Pupils’ Workshop /

The first outreach activity of our project was the exhibition entitled ‘Yoshiro Taniguchi and Noguchi Room’ held in October 2009 combined with the related workshop. This provided a model for the subsequent developments [fig.1].

The exhibition included the special viewing of the Ex Noguchi Room designed by Yoshiro Taniguchi for the first time. It thus offered an opportunity to appreciate both the actual architectural space and the archival materials of Taniguchi’s architecture for Keio (Keio Yochisha Elementary School and Keio University Hall of Residence Hiyoshi). Students from the Art History department also took part in the management of this exhibition. We felt that it is most important to make use of the history of the Noguchi Room as a catalyst to create a chance for young generation at the university to encounter the architectural space and to consider its related issues, so that they are handed down to the next generations.

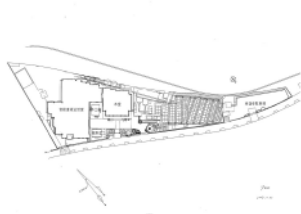
Another characteristic of this exhibition was that the

This text is a summary of the lecture entitled, “Forum for Architecture of Universities: Archive and Outreach,” delivered on 20 October, 2018 at Keio

University. The summary is created and edited by the ARTEFACT editorial team.



▲ Shosai Ikkei, 48 Famous Sites of Tokyo, Akabane Bridge, Myojoin



▲ Myojoin around 1804, 1913, and 2008

unlucky and so located Zojoji behind Edo castle to the south, on the land that had always been considered holy.

Myojoin was established in 1763 by Archbishop Myoyo Jogetsu - the 46th chief abbot of Zojoji — with the backing of Tokugawa Ieshige — the ninth shogun of the Tokugawa shogunate. It was originally meant as a humble dwelling for Jogetsu but gradually the building was enlarged. Jogetsu himself was an extremely cultured figure. As an artist he painted, wrote, and sculpted many works, and even landscaped Myojoin’s garden.

As depicted in the Ukiyo-e print, Myojoin temple was once located near rice paddy fields and a gently flowing stream. As the modern era progressed however, the topography of the area changed and its surrounding plots of land were rezoned.

Fires were common during the Edo period, so the construction of the temple buildings involved thick, largely fireproof earthen walls. Such structures were known as *Dozo*. During an air raid in 1945 however a direct hit meant much of the complex burnt to the ground, including the main temple hall, and the priests’ living quarters (or *Kuri*). Only a hall dedicated to *Jizo*, the *Kyozo* (a storage building for sutras and other ancient texts) and two *Dozo* survived. In 1950, as part of the post-war reconstruction efforts, a temporary main building was erected, and in 1958 the Showa main hall was built. Participants in this lecture are now sitting in the current main hall, a wooden construction completed in 2008 using timber from the Japanese cypress tree.

With the support of architect Michiko Isaka, the two surviving *Dozo* from the 1945 air raid were taken down and reconstructed nearby. Now known as the Jodozo and Kumanodo Hall, they are registered nationally as Designated Tangible Cultural Properties, and thanks to their survival most of the treasures of Myojoin are still with us. Zenkoji Amida Buddha is enshrined in the Jodozo as the temple’s principal focus of worship (known as *Honzon*), and various other works related to the Tokugawa family and Edo castle are also housed here. Many other treasures are stored in the temple’s repository.

Since 2008 an annual “Myojoin exhibition” has been held to exhibit these treasures, and various statues and pictures have been placed on public display. One of our aims at Myojoin is to be accessible to the local area and society as a whole. Despite the many changes to our

2008	Myojoin’s first exhibition - marking the temple’s 250th anniversary
2009	The life of Honen - Hidden treasures of Kumanodo Hall, Buddhist statues never exhibited before
2010	Heaven and hell - visions of enlightenment and pictures of the underworld in Buddhist perspective
2011	Honen: the path to Pure Land Buddhism (Jodoshu) - The 800th anniversary of the Honen’s death
2012	Okyo’s depictions of Sakyamuni Buddha - the beginnings of Buddhism
2013	Archbishop Jogetsu and Tokugawa Ieshige: Myojoin temple, the ninth shogun and the ladies of Edo castle
2014	Fuji and Kumano: Prayers to nature - Kumano Daigongen (the Three Deities of Kumano), exhibited for the first time
2015	Statues of Zenkoji Nyorai and other Amida Buddha - Grand ceremonial exhibition
2016	The temple’s sacred legacy and Tokugawa Ieyasu - Special opening of the main hall
2017	Masterpieces of the Myojoin collection - 10th anniversary of exhibitions at Myojoin
2018	The artist monk Gessen and Maruyama Okyo

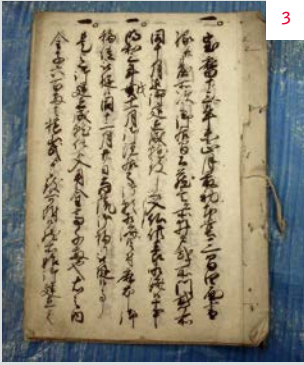
▲ Myojoin exhibition topics from 2008 to 2018



▲ *Munafuda* (architectural records written on wooden panels) discovered during an examination of the Kumanodo Hall.



▲ An earthen walled storehouse in the grounds of Engakuji temple’s Shariden (reliquary hall)



▲ Documents relating to Myojoin discovered at the beginning of the renovation work. They reveal that the *Dozo* had stood at the temple since its foundation

surroundings we have been able to pass on and preserve much of our cultural wealth from the Edo period up until the present day. I hope that by openly displaying this heritage, we will in some way bring many more people closer to Myojoin, and provide a deeper understanding of Buddhism, traditional Buddhist culture and Buddhist temples.

Opening Doors to the Architecture of Edo

Michiko Isaka (Architect, Co-Representative of the Isaka Design Studio)

A great deal of Edo period architecture has survived in Shiba district, Minato City. Within the precinct of Zojoji there is the main hall of Joshoin temple, and Kodoin temple’s front gate and earthen wall (*Neribei*).

Among such examples Myojoin has a long and distinguished history — which I have been lucky enough to research myself. Through my studies I discovered wooden panels (architectural records known as *Munafuda* [fig.1]) with inscriptions dating from 1811 in the temple’s Kamidozo (the current Jodozo, which houses documents moved from the *Kyozo*), and dating from 1796 in the Kumanodo Hall.

Please refer to ARTEFACT 01 for more detailed information on temples within Zojoji’s precinct.

In the period when it was forbidden to build new temples, Myojoin was constructed as an affiliated temple of Zojoji. For

250 years, from the Edo period to the modern age — from the time of Archbishop Myoyo Jogetsu to the current 14th generation Rev. Shodo Kobayashi — the form and appearance of Myojoin has been transformed, under the impact of such events as the rezoning of land and the devastation of war.

The temple’s Rev. Shodo Kobayashi resolved to return Myojoin to its former glory, and receiving his instructions I began a detailed examination of Myojoin’s structures, and started work on a blueprint for the temple complex. The two surviving *Dozo* needed protection against vibrations coming from the expressway, and the deteriorating effects of aging. Based on this, as well as the brief to recover the original Edo period look (these *Dozo*’s facade at the time comprised of corrugated sheet metal) I travelled all over Japan to examine similar structures, in reference to dismantlement, relocation and reconstruction [fig.2].

For the Jodozo, our intention was to create an area for the temple’s collection of Buddhist statues as well as an exhibition space, and removing the second storey floor without changing the original earthen wall construction of the building. When dismantling and relocation work finally started, many old documents were discovered in the Kumanodo Hall [fig.3], which threw light on the fact that we had not been able to know through sections of the San’enzenshi and Zojoji Monjo (historical records of Zojoji temple) before. We also learnt more of the original building materials for the Jodozo and its dimensions, which



▲ Famous Places in the Eastern Capital by Utagawa Hiroshige (View of the precincts of Zojoji, Shiba) / National Diet Library, Japan



▲ Kodoin's Neribei

allow us to picture this scene from many years ago. *Neribei* like this apparently once stood all along the road by the temple grounds creating a beautiful landscape with a profound sense of unity. When I consider this, the scenery of Hibiya Avenue which I have always passed along so casually, seems to take on a much deeper significance.

/ 4. Zojoji Sangedatsumon Gate (Sanmon) /

Our tour concluded at Sangedatsumon Gate. Along with the Daimon, this is one of the few structures in the area to have survived the “Bombing of Tokyo”, a series of terrible air raids that took place during the Second World War. The large wooden framework under the eaves of the “hip-and-gable” roof (known as an *Irimoya*), constructed in the traditional *Zenshuyo* style of Japanese Buddhist architecture, leave a very strong impression.

Daimon Avenue, which goes

from Sangedatsumon Gate and past Daimon Gate, intersects with the famous Tokaido road at Hamamatsucho. Even now, from former Tokaido Hamamatsucho, looking back towards Zojoji, the three structures of Daimon, Sangedatsumon, and Zojoji’s Main Hall can be seen lined up in a straight line. Of course this is no coincidence, but part of a construction plan put in place as the city of Edo went through its process of formation.

All the structures I visited on this tour have continued to exist on the same spot from the Edo period to the present - however the paths they have taken have not been uneventful. Due to disasters such as the Great Kanto earthquake and the ravages of war they have continuously changed in appearance, but due to their existence traces of the past are clearly etched into the city. This tour has been an opportunity to really think about these layers of history.



▲ Among Famous Places in the Eastern Capital by Utagawa Hiroshige (View of Zojoji, Shiba) / Museum of Fine Arts Boston, William S. and John T. Spaulding Collection

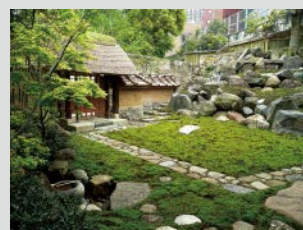
The Story of a City’s Cultural Landscape Told by Its Temples:

The Heritage of Myojoin

Artefact editorial team



▲ Myoyo Jogetsu, Picture of Myojoin, Myojoin



▲ Myojoin garden

On the 29th of September 2018 a lecture and special tour were held at Myojoin temple in Minato City. The temple’s head priest Shodo Kobayashi and architect Michiko Isaka were invited to speak at the event, which was entitled: “The story of a city’s cultural landscape told by its temples - the heritage of Myojoin”. Participants in the project were able to view parts of the temple’s main hall and Jodozo, not normally open to the public. They learned first hand about the history of the temple - from the Edo period up until the present day - what has changed and what has been preserved of its structures, as well as the treasures held at Myojoin.

Below is a summary of the two lectures given during the event.

Protecting and Presenting Myojoin’s Cultural Wealth

Rev. Shodo Kobayashi (Head Priest of Myojoin Temple)

Myojoin is within the former precinct of Zojoji temple. Zojoji was founded in 1393 by Yuyo Shoso, a holy figure and the eighth patriarch of Jodo Buddhism. The temple was moved to Edo (now Tokyo) in 1590 when Tokugawa Ieyasu made the castle town his seat of power. Zojoji was his family temple.

Zojoji’s temple grounds are on the edge of a vast area of raised land in the Kanto region known as the Musashino Plateau. Nearby is the ancient Maruyama Kofun burial mound, so we know the site has been treated as sacred since the Kofun period (roughly 300-538 AD). In arranging the position of Zojoji, Ieyasu followed the belief that north-east and south-west directions were



▲ Today’s Myojoin

Touring the Surviving Temples around the Precincts of Zojoji

Yusuke Kameyama (Assistant Curator at Keio University Art Center)

[Tour outline]

Thursday, 27 September 2018 -
“Historical Visits to Shiba Zojoji
Daimon Street and Old Onarimichi
Street”

Zojoji Daimon Gate - the Main Hall
of Joshoin temple - Kodoin temple -
Zojoji Sangedatsumon Gate

Tour guides: Michiko Isaka (Architect,
Co-Representative of the Isaka Design
Studio), Tsunemichi Nomura head
priest Joshoin temple

The grounds of Zojoji temple - known for being the family temple of the Tokugawa shogunate - were far more expansive during the Edo period than they are now. Many of the temples within Zojoji's precinct were gathered around Buddhist monasteries and mausoleums and performed various roles. They covered an area so vast it could even be likened to a small town. For this tour we walked from Zojoji's Daimon Gate to its Sangedatsumon Gate, visiting two temples along the way.

/ 1. Zojoji Daimon Gate /

Our guided tour began at this large gateway. Nearby Daimon Station is named after this historic gate, but in truth the structure that stands here now is “second generation”. The “first generation” Daimon Gate was constructed from wood in around 1605, shortly after Zojoji became the Tokugawa family temple. Funeral processions for family members would have passed

through the gate, and as a symbol of Zojoji it has even been depicted in the work of ukiyo-e artist Utagawa Hiroshige.

The current “second generation” gate however is a reconstruction, built in 1937 using reinforced concrete. Due to the original gate's deterioration - exacerbated by the Great Kanto earthquake of 1923 — as well as need to widen its frontage to allow traffic to pass, the decision to rebuild was made. As Michiko Isaka tells us, the new gate was an attempt to express the Japanese architectural style for great gates known as *Koraimon*, using the modern technology of reinforced concrete. To realize this both engineers and craftsmen were heavily involved in the project. The well-balanced form of the “second generation” Daimon retains traces of Zojoji's historic architecture while at the same time gives a grand sense of scale that the wooden original did not have.

/ 2. Joshoin Temple Dozo (Akando/Main Hall Inner Shrine) /

If you head towards Sangedatsumon Gate along Daimon Avenue, then enter a narrow lane on your right hand side, you will come to an old stone-walled *Dozo* (these are traditional structures often used as storehouses). This is the Main Hall of Joshoin temple. The sturdy stone walls were apparently constructed following concerns after the Great Kanto earthquake, and thanks to their strength this was the only building at Joshoin to survive the destruction of the Second World War. It is said the principal image of worship here, the Zenkoji Buddha (a triad of statues known as *Ikkosanzen Amida Buddha*) was once caught in a fisherman's net in the Kanasugi Sea, Shiba. It was apparently hauled up and later dedicated to the temple.



▲ Joshoin Main Hall (Dozo)



▲ Lecture by head priest Nomura Kodo



▲ Ranma



▲ Inside Joshoin - Akando



Enshrined within the *Dozo* it was very rarely presented to the public, because of which during the Edo period the hall was also given the name Akando (meaning the hall that doesn't open).

For this tour we were given special permission to see the temple's inner shrine, a space not normally open to public view even now. Although the interior of the *Dozo* is small in scale (roughly 4.5 meters square) its intricate decorations are truly magnificent - such as the latticed ceiling with Sanskrit patterns, and the colors of the central Buddhist altar. While inside I felt almost overwhelmed by the elaborately fashioned details and solemn atmosphere.

/ 3. Kodoin Temple Front Gate: Neribei /

We next visited Kodoin temple, which faces the Sangedatsumon Gate. It is the oldest affiliated temple within Zojoji's grounds and was originally established at the time of Zojoji's own foundation as a place of training for monks. The temple's front gate and *Neribei* (a traditional earthen wall made with alternating layers of mud and clay tiles) still remain, though they have been renovated many times since the Edo period. The gate is decorated with the Asano clan family crest (called *Geishu Taka No Ha*, consisting of two crossed hawk feathers), as Kodoin was used by the family as a guest house on pilgrimages.

Kodoin's *Neribei* which can be seen from the street, along with Sangedatsumon Gate on the other side of Hibiya Avenue, bear important traces of the past that

5. See Kayoko Ichikawa’s article in this volume.

project and are knowledge found by having an overview of the whole project for the first time.

The second viewpoint concerns the education of students through Local Cultural Resource Internship: Cultural Communicator Workshop. This programme not only stimulates students to participate in events but also aims to train them to become ‘cultural communicators’ through their proactive research of local cultural resources in Minato City, especially, for this year’s programme, through learning about food culture and broadcasting culture. As one component of the programme, we held a workshop using Value Graph and CVCA so that we could have an overview of the significance of our activities through system and design thinking, from multiple perspectives and a bird’s eye view [5].

Approximately 40 students applied to participate in this professional development programme, about half of whom were students from overseas. This programme intended

to train the students to become cultural communicators through three phases: training of thinking skills; visits and interviews at local cultural institutions; and dissemination of texts and images through publications. As the first step of the process, we held a workshop using Value Graph and CVCA to

think about why we disseminate culture internationally. Although students’ grades, areas of study and nationalities varied, the team members discussed with each other frankly, and as a result, very interesting Value Graph and CVCA were created.

We received the following comments from the students who participated: ‘I was the only participant in the first grade, and then a bit nervous. However, thanks to free discussion on equal terms, I could talk with senior students at ease’ or ‘I acquired skills to work together with people from different disciplinary and cultural background.’ It is from the discussion on equal terms that differences between ideas become clear. What is concretely made clear are not the positions of participants given by social structures like grades or nationalities but their unique experiences and viewpoints. Then the focus of international dissemination is personalised. They start thinking about to whom and what culture they would like to spread, not as one anonymous student at Keio University, but as one individual person. In a certain team’s CVCA, the following insight was made: ‘Let’s begin by telling the culture of Minato City to our close friends and students from abroad. There should be a way of spreading it to the world from them through SNS etc.’

What is behind such an awareness is the formation of such a team that respects individuals equally and accepts their opinions. Not by general understanding through dictionary or text-book-like words,

but by exposing our own thoughts as our own matters —‘why do I communicate internationally?’—, we can think of our own standing position and the purpose of our activities, and then we can share our consciousness with co-operating members. In this regard, the participating students could be conscious of the meaning of writing, not only as reports of passive visits but also as articles to disseminate culture and people’s relationship formed through culture (the articles as final achievement are inserted in the separate volume).

A series of Value Graph and CVCA made by these two attempts have their own meanings, but at the same time, many participants say as their opinions that it was very impressive to have been able to experience the creation process in which they first express their thoughts to each other and then, based on them, conceive new ideas.

The events held in the ‘Cultural Narrative of a City’ project as well as the experience learning and workshop held at museums are various and diverse. What should be noted is not their variety but whether or not the organisers, participants and supporters are sharing the upper

purposes of these events. Most evaluations of individual events are performed depending on the number of participants or their satisfaction level by questionnaire. These are evaluations for the organisers, and therefore not necessarily for the purposes of holding events. It is because I have a question about this point that I aim to construct a new evaluation system for the experience learning and workshop in museums in this research project. Against such existing evaluations, the approach to ‘extract each other’s purpose with different perspectives and clarify the upper purposes that are aimed’ gave us a new perspective for evaluation.

I believe this attempt could illustrate clearly in detail the ‘Local Cultural Resource Internship’ through which we jump into various and diverse local cultural resources. At the same time, this attempt made it possible for us to share many stakeholders’ purposes, which are intricately intertwined. Finally, although it might be overstated, it would be also very significant to consider the individuals’ words written on tags while making Value Graph and CVCA as a kind of form of ‘Cultural Narrative of a City’.



▲CVCA by team ‘The Collaborators’

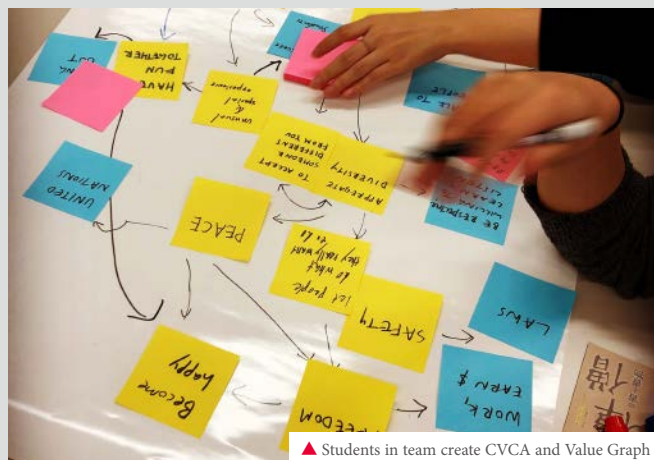
4. Takashi Maeno (ed.), *Change the World with System x Design Thinking: 'How to Innovate' by Keio SDM* (Nikkei Business Publications, Inc., 2014).

workshop. The remarkable takeaway of these methods is that by writing down elements that constitute a project activity or a social system on tags, and by relating them, we can see the whole activity systematically from a bird's eye view.

For example, by proceeding to think about the purpose of an activity in terms of ‘for what’ towards upper dimensions, the Value Graph helps us obtain alternative plans without falling into local solution methods while sharing the true purposes with each other. In contrast, CVCA helps us to clarify the stakeholders involved in an activity, and to have an overview of the whole activity by describing the values (e.g. money, information, knowledge) exchanged among them [4].



▲Example of Value Graph (created by BREAK OUT team in Cultural Narrative of a City Workshop)



▲ Students in team create CVCA and Value Graph

In practice, we tried Value Graph and CVCA together with the persons in charge of the experience learning and workshop at Tokyo Tech Museum and Archives and the Osaka Prefectural Museum of Yayoi Culture. In the process, it became clear that, even if small in scale, an activity such as experience learning or workshop at a museum often has multiple purposes. Moreover, multiple institutions and individuals are involved in it, and the actual activities progress under their complicated relationship. There are various prospects included, such as increasing the number of visitors, activating museum activities for external demonstration, or obtaining a grant for management by the events of experience learning and workshop. It also visualised that the people involved have their own expectations, such as cultural education and improvement of general awareness of museums for practitioners of events (museum curators or volunteers); intellectual desire and enjoyment of cultural knowledge for participants (visitors or regional residents); and improvement of corporate image through improvement of citizen service or cultural contribution for supporters (municipalities or enterprises). Although the experience learning and workshop are only one factor of museum activities, our survey from a bird's eye view brought us a clue to reconsider the whole operation of museums while taking account of the relevant stakeholders.

On the basis of these practical experiences, we concluded that Value Graph and CVCA would be useful to

understand the ‘Cultural Narrative of a City’ project, which was becoming rather confused because of various and diverse activities that developed around the events. We then attempted to apply Value Graph and CVCA to the project from two viewpoints.

One viewpoint is the attempt to have an overview of the whole project and to reconsider its significance. The project members belong to various cultural fields, such as temple, broadcasting, Japanese confectionary, flower arrangement and contemporary art. The concrete projects are developed by utilising their respective characteristics. Their activities also fall under the auspices of Minato City's 'FY2018 Minato Cooperation Project for Cultural Program'. In this way, while multiple members become the core of the project, the number of stakeholders related to it increases too. The values exchanged among them cannot be expressed in a word. The CVCAs were made by groups of different membership: 'Researchers and Staff at Keio University Art Center (KUAC),' 'Faculty Members, Staff, and Students at Keio University,' and 'KUAC Members, Members from Local Cultural Institutions, and Minato City Officers.'

Each CVCA has its own characteristics and shows its distinctive value circulation, which could not be exposed by one individual or one institution alone. For example, in the case where students were involved, the value chain of 'Keio University' and 'Mita-kai (Keio University's so-called alumni association)' was outstanding. Students attached

their importance not only to the value of education from Keio University but also to the brand of 'Keio University' and furthermore to the value of 'Mita-kai' as the connection point to society. This CVCA also showed another aspect that the university receives values from students, such as their potential as active human resources and their student generation's contemporary sensibilities. Moreover, in the case where Minato City staff members participated, we noticed in the CVCA production that the promotion of utilisation of local cultural resources had the potential to enrich not only the value circulation around culture but also the welfare of the citizens participating in it. (Besides these, we could obtain many other various insights and identify problems, as shown in the list (†list1)). These samples are insights that cannot be obtained simply by looking at individual

[List 1] Insights from
'KUAC Members, Members
from Local Cultural
Institutions, and Minato
City Officers'

'Culture fans' as stakeholder

- Desire to connect culture fans with academia

- Expectation of a place for exchange between Minato citizens and culture fans

- What to do with manpower shortage

- Dissemination power of culture fans is great

- Pressure from overseas

Expectations of Minato City

- Leadership

- Make use of cultural services and activities in other fields too

- Pay more attention to positive ripple effects

- To connect students and citizens through

the dissemination of
information

- Discover and visualize local cultural resources

- KUAC offered the

connection between temple
and university for the first
time

- Supported by tax and goodwill

- Professional development through culture

- Connect students and the local community

- How to fulfill mutual desire

- University can associate with various stakeholders

without conflicts of interest



▲A flyer for Cultural Communicator Workshop '18

activities and to analyse various values circulating among them. It made us realise that communicating by word of mouth was actually quite effective, for stories you hear from close friends or family have added value and persuasiveness. Through the workshop, the participants gained a broader perspective and creative thinking skills; and learnt the importance of visualising and sharing ideas.

/ Part Two: Visits and Research at Cultural Institutions /

The participants, divided into three groups, visited the Ajinomoto Foundation For Dietary Culture; the NHK Museum of Broadcasting; and the Toraya Archives (closed to the public). Prior to the visit, they did their own research and communicated their questions as a group to the staff at the institutions. Each institution generously organised a special visit programme tailored to students' interests, including an exceptional opportunity to take a close look at some of the materials that are usually not freely accessible. The interviews with experts in each cultural field

provided further insights to deepen the students' research interests.

/ Part Three: Writing Up and Editing Articles for Publication /

Finally, the participants shared their research results based on their visits and wrote up articles for the project magazine, blog, or SNS channels. They rewrote and edited their text several times according to the feedback from the tutors and research staff at the cultural institutions. This academic process of writing is becoming increasingly important now that people can easily publish their opinions through social media. At the same time, we learnt from students some fresh points of view or engaging writing styles, as well as effective ways to communicate through these new media.

/ Student-Centred Learning through Workshops /

Our professional development workshop encouraged students' active participation providing opportunities to deepen their knowledge and learning through experience. Such student-centred learning model is becoming essential to foster creative minds to produce innovative solutions in the increasingly complex society of the globalizing 21st century. Cultural communicators with creative thinking and international communication skills would provide valuable models for talents required in the society.



▲ Students analysed the activities of the Cultural Narratives of a City project using CVCA method.

Cultural Value Chain Analysis:

Expansion of Perspective and Its Sharing

Takayuki Ako (Curator at Informatics Systems Management,
Curatorial Planning Dept. Tokyo National Museum)

1. Keio University Art Center
"Cultural Narrative of a City"
<http://www.art-c.keio.ac.jp/research/research-projects/cunary/>

2. See Yu Homma's article in this volume.

3. Masako Toriya, 'New evaluation framework for museum activities based on functional analysis of systems engineering' JSPS Grant-in-Aid for Research Studies 18K18665, <https://kaken.nii.ac.jp/en/grant/KAKENHI-PROJECT-18K18665>

When people refer to the richness of culture, we often hear the word 'variety' or 'diversity.' It seems, however, that we have stopped thinking about them by using these convenient words. While we utter the words 'various culture,' 'various people' or 'diverse activity,' we do not fully grasp the true elements that constitute diversity. We use these words because we have given up grasping.

I started participating in the 'Cultural Narrative of a City' project in 2018. The members and activities of this project are various and diverse, but its scope is still unclear and difficult to determine. 'Local Cultural Resource Internship' was put forward as the theme for 2018, and 'Visits to Urban Temples,' 'Introduction to Galleries,' and 'Tours to School Architecture' constituted three major topics within it [*1][*2]. At first, I could not understand their relationship at all and why temples, galleries and school buildings had been marked

as local cultural resources in Minato City. For this reason, I was greatly caught in question and interested at the same time.

Around the same time, in June 2018, the JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research 18K18665 'New Evaluation Framework for Museum Activities Based on Functional Analysis of Systems Engineering' (Principal Investigator: Masako Toriya) was adopted, in which I was involved as a co-investigator. The aim of this research is not only to regard the experience learning and workshop held at museums as the means of attracting customers but also to reconsider their purposes and values to construct a new evaluation index for them [*3]. Our members visited museums in various places so far, and by using the methods called Value Graph and Customer Value Chain Analysis (CVCA) that were born in the Systems Engineering field, we engaged in discussions and examinations with persons related to the experience learning and

Lecturer: Takashi Horikawa (Professor at the Institute of Oriental Classics [Shido Bunko], Keio University) and Kenmyou Muta

2. Introduction to the Galleries

Gallery Tour and Talk
“Exhibition: The Man who Transmitted Zen to the World—Soyen Shaku and Modern Japan”

21 July 2018, 10:15–11:45,
Keio University Mita Campus
Participants: 23 people

- *Small Talk: “Cultural Properties of Keio University and the Galleries on Mita Campus”*

Lecturer: Yu Homma (Research Fellow at Keio University Art Center)

- *Guided Tour: “Soyen Shaku and Modern Japan: A Young Zen Priest who Trotted around the World.”*

Lecturer: Takeyuki Tokura (Associate Professor at Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University)

Guided Tour and Talk “Gallery and Publicness”

8 February 2019, 13:30–15:30,
Shigeru Yokota Gallery
Participants: 43 people

- *Introduction and Special Visits: “Activities of Shigeru Yokota Gallery, Tokyo Publishing House and JCR”*

Lecturer: Satoshi Yokota (Tokyo Publishing House)

- *Talk: “Gallery and Publicness”*

Lecturer: Shigeru Yokota (Shigeru Yokota Gallery) and Yohko Watanabe (Professor and Curator at Keio University Art Center)

3. Tours to School Architecture

Keio University Mita Campus Architecture Open Day

17 and 20 October 2018,
10:00–17:00, Keio University Mita Campus
Participants: 514 people in total

- *Guided Tour*

17 and 20 October 2018,
Keio University Mita Campus
Participants: 55 people in total

Lecturer: Midori Moriyama (Research Fellow at Keio University Art Center)

Forum for Architecture of Universities: Archive and Outreach

20 October 2018, 14:00–16:30,
Keio University Mita Campus, West School Building, Room 517
Participants: 57 people
With language support in English
Yohko Watanabe (Keio University Art Center), Takako Fujimoto (National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs), Michiyo Kohri (Meiji Gakuin Historical Museum), Yuri Tomita and Miki Maruyama (Gakushuin University Museum of History)

ARTEFACT. We organised a visit and interview programme with special collaborations with the three out of nine institutions participating in this project: the Ajinomoto Foundation For Dietary Culture; NHK Museum of Broadcasting/ NHK Broadcasting Culture Research Institute; and Toraya Archives (Toraya Confectionery Co., Ltd.). Our intern students received instructions and advice from tutors and professional staff at the cultural institutions in order to improve their writings based on their interests and to turn them into articles (included in the separate volume).

/ Internship as a Margin Area /

“Intern” also means a doctor-in-training. This strangely matches with the design fiction provided by Rhetorica in this volume, which is about the margins of a city examined

by a fictive *rangakusha*, a Japanese scholar of Dutch language and Western science in the late Edo period, who was also a doctor. “Margin” is an important keyword in considering internships. Internship is an activity that connects various sites. In other words, it is a margin area between different sites. This margin could become a place to connect the two different areas of culture often divided into “creators” and “recipients.” There is a possibility that the practices of both areas could be shared and exchanged in this margin, and the margin works as a place to create new practices. It is my hope to connect the achievements and challenges of this year’s activities to the previous research on internships, and to explore the possibility of internship as a creative margin area.



▲ Guided Tour “Explore the Precincts of Sengakuji: Its History and Culture”

Let’s Become a Cultural Communicator!

Kayoko Ichikawa (Project Manager, Keio University Art Center)

/ Overview of the Workshop /

Cultural Communicator

Workshop 2018 was designed in collaboration with Keio students and faculty members as a prototype of a professional development workshop to cultivate skills to identify different values of cultural experiences and to communicate them to a wide international audience. It consisted of three parts: Part One “Orientation and Design Thinking Training,” Part Two “Visit and Research at Cultural Institutions,” and Part Three “Publications and Communication.” To provide an opportunity to acquire skills necessary for international communication through practice, we called for Keio students both from Japan and abroad.

/ Multilingual Communication /

The workshop unique for being a university-based internship combining cultural experience and international communication attracted students from a wide range of grades, faculties and countries. The tutors provided

language support to facilitate multilingual communication in Japanese and English. We also shared the principle of each being assertive to talk in the language we speak more comfortably. Despite the challenge, the participants soon realised the importance and richness of exchanging opinions openly by making effort to overcome language barriers.

/ Part One: System and Design Thinking Workshop /

In collaboration with Dr. Masako Toriya from Keio Graduate School of System Design and Management, we organised a workshop for group discussions using two methods of system and design thinking: Value Graph and Customer Value Chain Analysis. The former method allowed us to visualise the higher purpose of international communication, namely to embrace diversity to achieve world peace. The latter was useful to identify many people and institutions involved in cultural

Internship Landscape:

What Is Produced in the Margin Area?

The Activities of the
Cultural Narrative of a
City Project in 2018

Yu Homma (Research Fellow,
Keio University Art Center)

1. Visits to Urban Temples

The History and Culture of
Affiliated Temples of Zojoji

(1) Lecture and Guided Tour
“Historical Visits to Shiba
Zojoji Daimon Street and Old
Onarimichi Street”

27 September 2018, 15:00–
17:00, Zojoji (Daimon and
Sangedatsumon), Joshoin,
Koudoin Participants: 30 people
Lecturer: Michiko Isaka (Architect,
Co-Representative Director of
Isaka Design Studio) and Kodo
Nomura (Abbot of Joshoin)

(2) Lecture and Guided Tour
“Heritages of Myojoin: The Story
of a City’s Cultural Landscape
Told by Its Temples: The
Heritage of Myojoin”

29 September 2018, 15:00-17:15,
Myojoin Temple Participants:
53 people

Lecturer: Michiko Isaka, Shodo
Kobayashi (Abbot of Myojoin)
and Jundo Kobayashi (Deputy
abbot of Myojoin)

Lecture and Zazen Workshop at
Ryugenji Temple

13 October 2018, 13:30-15:00,
Ryugenji Temple Participants:
31 people

- *Lecture “Topography Narrated
by a Temple”*

Lecturer: Shinju Matsubara
(Abbot of Ryugenji Temple)
and Norifumi Kunimoto (Keio
University)

- *Zazen Workshop*

Temple as a Scholarship and
Cultural Platform: Sengakuji and
Zen in Japanese Culture

18 November 2018, 10:00-
11:30/13:00-14:30, Sengakuji
Participants: 63 people in total

- *Guided Tour “Explore the
Precincts of Sengakuji: Its History
and Culture”*

Lecturer: Kenmyou Muta
(Priest/Department Director of
Sengakuji)

- *Lecture “Scholarship and
Culture of Zen Temples”(with
language support in English)*

The theme for this year’s
“Cultural Narrative of a City”
project is “Internship.” The project
focused on visits to sites where
culture is created and inherited,
providing opportunities to
participate in that very process. We
prepared two programmes: events
and a professional development
workshop.

/ Events /

Our events were organised
under three sub-themes: “Visits to
Urban Temples,” “Introduction to
Galleries,” and “Tours to School
Architecture.” Each event was based
on the same structure: visiting
cultural sites and listening to people
working there. The following pages
provide reports on the events:
“Historical Visits to Shiba Zojo-ji
Dai-mon Street and Old Onarimichi
Street” (p. 99) ; “Heritages of
Myojoin Temple: A Temple as a
Narrator of Cultural Narrative
of a City” (p. 96); “Temple as a
Scholarship and Cultural Platform:
Sengakuji and Zen in Japanese

Culture” (p. 80); “Lecture and Zazen
(meditation) Workshop at Ryugen-ji
Temple”(p. 14); “Keio University
Mita Campus Architecture
Open Day” (p. 24); “Forum for
Architecture of Universities:
Archive and Outreach” (p. 92); and
“Guided Tour and Talk: Gallery and
Publicness” (p. 83).

/ Professional Development Workshop /

The “Cultural Communicator
Workshop” prototyped professional
development programme on
communication skills based on
cultural experience. Cooperating
with faculty members and students
from Keio University, we organised
a three-part programme consisting
of a system-and-design thinking
workshop (p. 104); visits and
interviews at cultural institutions in
the local area; and writing sessions
facilitated by tutors to write up
articles for various media (p. 106).

/ ARTEFACT and Internship /

The theme of internship is also
reflected in this project magazine

◎ Cultural Narrative of a City '18

In 2018, the Cultural Narrative of a City project carried out a series of public events with the support of FY2018 Minato Cooperation Project for Cultural Program and the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan. This project magazine ARTEFACT compiles reports and edited transcriptions of the events but not in the form of conventional activity report. It takes a cultural magazine-style approach, hoping that the readers of ARTEFACT can enjoy and learn the cultural narratives produced in our project.

Cultural Narrative of a City: Local Cultural Resource Internship

Co-organised by FY2018 Minato Cooperation Project for Cultural Program

Cultural Narrative of a City in Minato: Activation of Local Cultural Resources through University Museum Initiative

Supported by Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

Edited by the Cultural Narrative of a City project (Yu Homma, Kayoko Ichikawa and Fumi Matsuya)

Editorial Produced by Rhetorica (Tomoya Ohta, Tomoya Matsumoto, Masami Ishii, Ryo Yoshiya and Ryo Nagara)

Art Directed and Designed by Tomoya Ohta (Rhetorica)

Designed by Ryo Nagara (Rhetorica)

Assisted by Ritsuko Shino, Norifumi Kunimoto, Shinsuke Niikura and Akiko Takano

Supported by FY2018 Minato Cooperation Project for Cultural Program

Published by Keio University Art Center

2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345, Japan

+81-3-5427-1621 <http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact>

25 March 2019



諸國名所百景

[アルテファクト]

ARTEFACT

02

Features:
Internship



陽
子
雨